

女大納言ノ君

歌什

重光樂

長德四年七月十日

一三四

言の御むすめ大納言のきみつかうまつり給へり、○下略

〔勅撰作者部類〕

自帝王至庶人之部

重光正二位、大納言、代明親王男

後撰集戀三、二、戀三、二

續後撰

集賀、大三

〔萬代和歌集作者部類〕

重光大納言

秋下、一、

〔續教訓抄〕

舞之部 壹越調菩薩雙調

重光樂新樂、中曲、或古樂、拍子十六、

初拍子、五、已下、八、四反可吹之、加三度拍子ヲ、有舞、絕畢忠拍子アリ、興福寺法華會梵音登樂、用之、抑此曲ハ、大納言源朝臣重光之作也、仍重光樂トイフ、且以作者之名付其名事、其タメシヲ、キヲヤ、或云、光大臣ト云々、此大臣大ナル僻事也、

此重光ハ、醍醐天皇ノ御孫、四品中務卿代明親王ノ一男、權大納言正三位

ナリ、長德四年七月日薨、歲七十六、

或云、花山法皇御宇作之ヲ云々、

〔體源抄〕

水調曲

重光樂

此曲大納言源朝臣重光ノ作也、仍重光樂ト云、

或云、重光大臣ト云々、此大臣ハ大ナル僻事也、私云、此重光ハ、醍醐天皇ノ御孫、四品中務卿代明親王ノ一男、權大納言正三位也、長德四年七月日薨、歲七

花山法皇御宇ノ作トノ説

兼家第一種物ニ參會ス

十六ト云々、或云、花山法皇御宇作之云々、是モ不審也、

〔續古事談〕

二節

大入道殿攝政ニオハシケル時、法住寺ノオト、ヨリハシメテ、オホクノ上達部、一種物ヲクシテ、マイリアツマリ給ケリ、カネテチ

キリアリケルナルヘシ、閑院ノ大將ハ、銀ノ鯉ノ腹ノ中ニコナマスマフエコミ、ヲリヒツニ入テイレラレタリ、小一條大將ハ、銀ノ鮎ノ桶ニ、アユヲヲリヒツニ入テイレラレタリ、左衛門督重光ハ、酒一瓶子、雉一枝、春宮權大夫公季ハ、銀ノ葉餅、修理大夫懷遠俎、攝政殿ノ御マウケアリ、盃酌管絃アリテ人々ノ祿、隨身ノコシサシマテ、タマヒケリ、○下略

○重光御庚申ニ侍スルコト、天曆七年十月十三日ノ條ニ、内裏詩合ニ列スルコト、天德三年八月十六日ノ條ニ、内裏火災ノ時ノ功ヲ賞セラ、ル、コト、同四年十月十八日ノ條ニ、殿上侍臣ノ奏樂ノ座ニ列スルコト、康保三年十月七日ノ條ニ見ユ、

十二日、辰藏人頭藤原行成ヲシテ、左大臣道長ノ病ヲ問ハシメ給フ、

〔伏見宮御記錄〕

利一

七月十二日、候内、○中略依勅詣左大臣第、問所惱、歸參

申御返事、○下略

長德四年七月十二日

一三五

御返事ヲ奏ス

長德四年七月十四日

一三六

十五日、○中 差人奉左府、○中 使者歸來云、左府甚重御座、○下

十四日、庚午 孟蘭盆、是日、藏人ヲ補ス、

〔職事補任〕一 五位藏人 右中辨正五位下藤說孝 長德四七十四補、○辨任同

〔外記補任〕二 少外記能登連守成 七月十二日（四九）大外記、

〔伏見宮御記錄〕權利一 七月十三日、罷出之間、於后町廊下招取時方、（應）至光等

朝臣相語雜事、歸宅之間、惟弘後車、心神已不覺、

來十四日、御倉、可令所司遣寺事、明後日奉幣、依

近江日次專當事、可有其事、略○中

當任官人年來所勤仕也、大掾笠惟忠已以去任、大掾曰佐理仲本勤此事

之間、已無懈怠、然而依可見任之者奉仕、去年理仲去任、替補惟忠、々々今

年又去任、其替以理仲、可被補歟、理仲今年又

十四日、○中 右兵衛佐時方來云、大內只今無祇候之人、仍爲御使詣左大殿、申

事由、凡是可然之人、忽可免昇殿事等也、御返事云、皇后宮亮教忠朝臣自宮初

時久候殿上、任山城守、頗有事勤之、任之後、究濟公文、加之近曾患疫、近日已愈、

近江日次
專當ノ替

内裏ニ祇
候ノ人ナ

昇殿ヲ聽

行成勝祥
ヲシテ不
動護摩法
ヲ修セシ
ム
觀修ニ護
身ヲ受ク

令候殿上、尤有便宜、亦本候殿上者之中、同煩此病、平損之者、爲義、輔公等中、可
被聽歟、亦左兵衛尉則隆、同此病平愈者也、又候殿上何如、余示云、教忠最有便
事也、且諸人皆病之中、職事人不候、於事不便也、藏人式部丞行資明年廻至、可
預敘位者也、給爵彼行資、以右中辨說孝被補其替、令奉行雜事如何、以六位雖
被補、忽不知案內之輩、不可有益、行成平生短慮也、況病惱不覺、所案之事、定有
紕繆誤事、（マ）能被廻思慮可及奏聞也、○中略、本月十日、頃之自左府權中將來示
云、自內以時方被仰、皇后宮亮教忠朝臣聽昇殿、右中辨說孝補藏人、行資、敘依
無可仰下之人所示也、早遣召小舍人可令仰者、依命遣召小舍人真正、令召件
人人、中將歸參之後、又書送殿命云、左兵衛尉則隆、同免昇殿云々、仍同仰真正、
十六日、○中 午刻許、右中辨說孝來訪病惱、次示云、慮外朝恩、汝一言之所致也
云々、

十五日、辛未 藏人頭左中辨藤原行成、病ニ依リテ、辭表ヲ上ル、

〔伏見宮御記錄〕權利一 七月二日、○中 酉刻、偷閑罷出、令勝祚闍梨、（應）今夜

〔簡日修不動護摩法、伴僧二口、

五日、○中 逢觀修僧都、受護身、○下

長德四年七月十五日

一三七

奏上ノ雜
事ヲ注記

女房侍臣
等病祇候稱
シテ祇候
セザル事

成親等ノ
愁文ノ事

明子宅及
正子愁
文ノ事

十二日、候内、從朝心神不例、然而依有仰事、相扶祇候、依勅詣左大臣第、問所惱給、歸參申御返事、往還熱暑之間、心神彌惱、重有勅命、猶不退出、依極難堪、解束帶著宿衣、爲逐涼氣、候弓場殿、與彼此言談、右大臣被今夜候宿、惟弘來、十三日、罷出之間、於后町廊下、招取時方、至光等朝臣、相語雜事、歸宅之間、惟弘後車、心神已不覺、源清、宋商曾令文、延喜天曆御記書寫ノコト等、カ、ル本等、月十日ノ條、

女房侍臣等不候事、

皆稱病由不參入、陪膳人等不候、更無術計、召遣左右大將可令候給、女房院邊、有未病者被啓事由、可令候給、○中略、近江日次御營ノ專當ノコト、カ、ル、本月十四日ノ條、收ム、

故高節朝臣後家、成親等愁文事、

自院所令奏給、早下給可令定申之由、被啓御返事了、而依爲任不參未下給、若有參入、早可下給、

公任朝臣令奏廳所定明子宅事、并正子愁文事、

一副定文、一副尋空申文、本左大臣所知也、所障連々未仰案内、於彼大臣隨無奏聞事由也、

東大元興
兩寺全破
實錄ノ事

東大元興寺全破實錄事、於官令校合也、

件事等心神雖不覺、爲令奏案内所書出也、以前承案内事等、未一定之間、今受重病、遂無沙汰、極可無便宜之故也、

十四日、觀修大僧都來臨、立願數多、○中略、藤原說孝ヲ藏人、以六位雖被補、忽不知案内之輩、不可有益、行成平生短慮也、況病惱不覺、所案之事、定有紕繆誤事中、略下

十五日、相招式部權大輔、匡衡、示可候、辭藏人頭、左中辨狀之由、入夜舉燭之間、

辭書持來、令若狹掾爲衡書之、亦差人奉左府、令申依病難堪、辭申官職之由、使者歸來云、左府甚重御座、存給可難云々、心神彌迷、不能加署辭書、仍令人書名字、差小舍人貞正令獻、深更歸來云、職事之人、忽不被候、仍付讚岐介、至光、令奏了、

十六日、去夜惟弘一人看病、惟弘、日者此曉爲見風出、東簀子、還入暫凭脇息之

間、心神不覺、引寄惟弘枕膝間、已以悶絕、如夢又非覺、心中省有強力者、引出自膝下二寸、引出腸、々所遺腹中僅二寸許、此腸被引出了、命已可絕、于時不動尊三字、籠此二寸腸中、此字初雖最少、漸々增長、滿于腹中、即此腸又還入、不覺心

悶絕
不動尊ノ
加護ヲ夢

辭書ヲ上
ル

諷誦ヲ行
觀修ニ十
戒ヲ受ク

悶絕四五
度

熱散ジ瘡
癒ニ

沐浴
辭書ヲ返
シ給フ

中奉念不動尊、無極悲泣、強力者已在自年少之時、奉憑此明王、其畫像、造次安
奉顯令相傳其不捨離身、本誓不誑、授是驗之也、此間宅中起者、惟弘只一人、并
孟光而已也、內外云、令行數寺、諷誦、祈乞救命之外、敢無他計、此間大僧都觀修徒步
來臨、授十戒、初五戒已不覺、次五戒漸覺、授了、讀前日願書、祈禱懇切、戒願有感、
僅以蘇生、夜漸明、僧都歸、參左府、我與僧都師弟之契、非今生之事、加以僧都驗
德甚明之由、孟光與惟弘、感悟無極、午刻許、右中辨說藤原孝來、訪病惱、中珍慧院
源兩闍梨來、訪兵部大輔、又來、又靜昭闍梨來、民部大輔被來、
十七日、此曉又悶絕四五度云々、甚依不覺、不知度數、只圓緣供奉相副、又無他
人、
十八日、熱散瘡愈、
廿三日、己卯、病後初浴、
廿六日、壬午、藏人主殿助泰通來、返給先日所上辭書、仰云、病愈之由云々、早參
從事者、
八月二日、戊子、浴、
三日、己丑、沐、

病後ノ參
東三條院
ニ參ル
東宮ニ參
ル

石清水八
幡宮等ニ
賽ス

詔

四日、庚寅、於西對物忌、教靜上人來、授戒於女人、
十四日、庚子、病愈之後、今日參內、諷誦三箇寺、清水、廣隆寺、祇園、麻布各端令順朝祈願、令奏
平返、佐カ反先詣左府、令內藏頭陳政、申今日始參內之由、中參院御方、令啓今日
初參入由、又參東宮、出自中御門、賴貞後車、
十五日、詣左府、中謁觀修大僧都、又詣修理殿、今日令安藝守季隨後車、病後
庭弱、獨不能乘車也、
十月十九日、自今日移宿道貞朝臣宅、

〔權記〕長保元年八月十四日、甲子、退出三條、去年大病之時、雜色所立願、今日

賽八幡、賀茂、松尾、稻荷、祇園、北野、奉幣十列、長木机

十八日、甲御惱、仍リテ、東三條院、內裏ニ參入アラセラル、參子

〔小右記目錄〕御藥事 長德四年七月十八日、主上有御藥、仍女院入內事、

二十日、丙御惱ニ依リテ、大赦ヲ行フ、
〔日本紀略〕院一條 七月廿日、丙子、詔大赦天下、大辟以下常赦所不免者皆赦

除、依天皇不豫也、

〔小右記目錄〕御藥事 長德四年七月廿一日、依御藥事、有赦令事、

長德四年七月十八日、二十日

長德四年七月二十日

一四二

〔諸道勘文〕

五四十

勘申彗星年々事略○中

長德四年正月廿六日丙戌寅時彗星見東方長四尺許、

同年七月一日(廿九)天皇煩皚瘡仍有大赦○中略

右依仰大略勘申如件、

長治三年三月四日

大外記中原朝臣師遠

右近衛大將藤原道綱上表ス、

〔公卿補任〕

六

大納言正三位藤道綱

右大將春宮大夫七月廿日辭大將、

不許、

〔伏見宮御記錄〕

權記一

九月廿三日候内頭(藤原正光)中將被示云右大將表可返遣之

由奉勅已了須早詣彼殿也而日者脚下聊有所勞不能著襪爲之如何若差地下中少將遣之如何報云已奉綸命給了猶自相扶可被參向地下中少將爲中使年來所不見也先例無忽知之人歟尋被行許也晚景中將奏事由自赴彼第云々此夜亥刻大雷鳴一聲、

無品盛子内親王薨ス、

御皚瘡

辭表ヲ返シ給フ

中使

顯光室ト爲リ給フ

御周忌

御世系

〔一代要記〕

村上天皇

盛子内親王 配左大臣顯光生女御元子長德四年七月廿日薨

〔小右記〕

長保元年七月廿五日乙巳○中右府家周忌法事來廿七日可修可來問之由以左少辨朝經有消息令申物忌由

廿七日丁未右大臣内房周忌法事於雲林院修之七僧外囑六十僧或說云六十八僧云々依有無己之僧所加請也人々傾奇七僧無法服云々參議(實德)輔正一人參云々

〔本朝皇胤紹運錄〕

村上天皇

諱成明

〔尊卑分脈〕

藤原氏

盛子内親王 配左大臣顯光公女御元子母長德四廿薨

顯光

左右大臣從一位

〔榮華物語〕

重家左少將略○中 母親王内親王内親王

門のひろはたのみやすところのはらの女(盛子)五宮をそもちたてまつり給へ

長德四年七月二十日

一四三

長徳四年七月二十一日

一四四

る、その御はらに、女君(五十、延子)ふた所、を(前家)とこ一人そおはするを、年ころいかてそれは内東宮にとおほしなから、世中わつらはしうて、内にはおほしかけさりつ、

〔大鏡〕

中太政大臣兼通

顯七

この御北の方に、村上の先帝の女宮、ひろはたの宮す所の御はらそかし、その御腹に、男一人、女二人そおはしまし、をと君は重家の少將とて、心はへ有識に、よ覺へをおもくてましらひ給し程に、久しくおはしますましかりければにや、出家してう、せ給にき、女君(五十)ひところは、一條院の御時の承香殿の女御とておはせしかと、すゑには爲平の式部卿の宮の御子、源宰相頼定の君の北方にて、あまたの公達おはすめり、略、寛仁四年六月十一日ノ條ニ收ム、いま一所は、今の小一條院のまた式部卿の宮と申し、お

り、むこにとり奉らせ給へりし程に、略、寛仁三年四月十日ノ條ニ收ム、
○盛子内親王御著裳ノコト、康保二年八月二十日ノ條ニ、薨奏ノコト、
本年十月十日ノ條ニ見ユ、

二十一日、中大神宮以下諸社臨時奉幣、

〔御堂關白記〕

七月七日、癸亥、説孝朝臣來云、宣旨云、(公等)内大臣奉幣使行、而

使王不參
延引依リテ

有病申障、無他上卿、可行件事者、即申承由了、爲史守永外記代、使等事仰了、九日、乙丑、諸社奉幣、今日可立、而不參上卿一人、又加伊勢使王依病不參、他王依無延引、雖不候上達部使、以四位可被奉有定、

〔伏見宮御記録〕

利一

七月二日、

略

昨左丞相被申事等、

一々奏之、

略

中臨時奉幣日時并使等可令勘申事、略仰内大臣、々々被奏云、日者依有□定申事等、令召諸卿、略中右中辨示、感神院入諸社内、可被立奉幣使之由、爲御使詣左府可申、略下

日時勘申

九日、略中今日被立奉幣諸社使、左丞相被行辨説孝云々、十日、忠道朝臣來告云、昨日奉幣使依無王大、夫不被立、又公卿諸大夫一人不參、依被改後日云々、

十三日、略中來十四日御筥、可令所司遣寺事、明後日奉幣、依

〔伊勢公卿勅使雜例〕

中臣故障例

長徳四年七月廿一日、臨時奉幣、使中臣神祇少副佐俊、於離宮院依有所勞、以豐前掾大中臣惟朝立代官、外宮御祈部類同

二十五日、辛巳參議正四位下源扶義卒ス、

長徳四年七月二十五日

一四五

長德四年七月二十五日

一四六

〔公卿補任〕六 參議正四位下源扶義四、十左大辨、大藏卿、中宮權大夫、美作守、七月廿五日卒、

〔日本紀略〕院一條 七月廿五日、辛巳、參議正四位下左大辨源朝臣扶義卒、

〔伏見宮御記錄〕權利一 七月十日、略中檢校定文相加可奏也、而左大辨稱有惱氣、早不書出、不令奏也者、略

官歷

字八源叔

〔公卿補任〕六 參議正四位下源扶義 故入道左大臣雅信 四男、母元方卿

女、天延三十二、文章生、字源叔、學為先、教貞元二八十一藏人、廿七 二十四圖書

助、同三二四式部少丞、天元三正七從五下、三、十廿九遠江權守、同四十二十四

昇殿、同五正卅安木權守、十二月、昇殿、同六二廿六遷任河內守、與祐忠朝臣

所相替也、永觀二八九從五上、造宮賞、廿八日朱雀院殿上、寬和二十一十八正

五下、造豐樂院功、廿六日昇殿、永延元十一十一右少辨、同二正廿九左少辨、永

祚二八卅從四下、造宮行事賞、同日左中辨、九月一日昇殿、十五中宮權亮、新立

正曆二正廿七播磨權守、三月廿五藏人頭、四月廿六日從四上、治國、同三八廿

八內藏頭、十二月七日正四下、中宮三條新宮渡、御以家司有此賞、同四七八中宮權大夫、同五年

八月廿八日任參議、中宮權大夫如元、九月八日右大辨、同六年正月十三美作

守、長德二年八月廿八左大辨、同三年正月廿六甲子著座、七月九日大藏卿、

〔二中歷〕公卿歷 大辨 源扶義、文、右、左、

〔尊卑分脈〕源氏多

雅信 左大臣、贈正一位、

式文藏、扶義、近江、河內、安木、美作等守、中宮大夫、正三位、參議、左大辨、大藏卿、

扶義、母大納言光房女、或元方女云々、祖父親王爲、仍佐々木家系圖、以扶義爲

五藏頭、親、近江源氏、佐々木一流元祖也、

經賴、母源是、右兵衛督、臣女、

成賴、母源是、左近將監、佐々木一流祖也、

女子、東門院少將、

〔源氏系圖〕家○前田

雅信

扶義 母同、忠、女、

延尋 仁、大僧都、

〔桂林遺芳抄〕字事、上、古、 凡如漢朝、於字者、上置姓之一字、下置別字也、

聖朝御字者、略 中源扶義、字源敦等也、

一四七

世系

近江源氏

長德四年七月三十日 是月

一四八

〔續本朝往生傳〕 一條天皇者、略中時之得人也於斯爲盛、略中九卿則、略中左大辨扶義、

〔今昔物語〕 七十 冷泉院東洞院僧都殿靈語第四

今昔冷泉院ハヨリ南東ノ洞院ハヨリ東ノ角ハ僧都殿ト云フ極タル惡キ所也、然レハ打解テ人住ム事无ケリ、而ルニ其ノ冷泉院ハヨリ只北ハ左大辨ノ宰相源ノ扶義ト云ケル人ノ家也、略下

三十日、丙律師安眞寂ス、

〔僧綱補任〕 三興福寺本 權律師安眞 永延二年九月廿八日任、天台宗□□延

□□依崇福寺□功□□長德四年權少僧都、七月卅日入滅、

〔僧綱補任〕 乾德川昭武氏本 權律師安眞 天台宗延曆寺、永祚元年九月十八日任、崇福寺別當、年臘、故延曆寺座主大僧正大和尚弟子、近江國人、小槻氏、長德四年律師、七月卅日卒、

是月、入道從二位高階成忠薨ズ、

〔公卿補任〕 六正曆二年 非參議從三位高成忠 長德四七、入滅、七十三歲、

〔日本紀略〕 院一條 七月其日、入道從二位高階朝臣成忠薨、十六、

〔榮華物語〕 五らく のわかれ 上略、隆家、入京、成忠二位も、このころあかかさにて、いとふかくにて、ほとくしくさこゆれば、哀に覺さる、今は帥殿み

たてまつりて、しなんとそねかひさこゆれと、いかはとみえたり、中この程に、二位このかさにてうせにけり、いみしうあはれる事とも也、

〔公卿補任〕 六 非參議從三位高成忠 父母、寛和二年七月廿三日敍、前勞、學士元從四上、二階、永延元年七月十二日式部大甫、正曆二年七月廿二從二

位、去大甫、九月日改眞人爲朝臣、十月十一日出家、道觀、

〔一代要記〕 一非參議院 從三位高成忠 尹忠、藤原同月任、式部大輔、正曆二年七月十四日敍從二位、二階、依中宮外祖也、定子正曆三年九月十七日改眞人爲朝臣、依

皇后外祖也、七月十一日出家、法名道觀、年七十、長德四年七月入滅、年七十六、號二位新發、

〔二中歴〕 二儒職歴 學士侍讀 一條 高階成忠、永觀元、五

〔尊卑分脈〕 高階 良臣 宮内卿、正四下、

〔册〕 成忠 侍讀、一條、大和守、東宮學士、宮内卿、式部大輔、從二、正曆二九改眞人爲朝臣、同年十一日出家、道觀、長德四七薨、七十三歲、

長德四年七月是月

一四九

- 助順 内藏頭、正四下、
- 信順 左中辨、從四上、
- 明順 左中辨、正四下、
- 道順 右兵佐、木工權頭、
- 積善 左少辨、正四下、
金葉作者、
- 静昭 詞花作者、
- 女子 高内侍、後拾新古作者、
皇后定子、内大臣伊周公母、

〔榮華物語〕

三

さまゝのよろこひ

この中納言殿、才ふかう人にわつらは

しとおほえたる人の、國々あまたおさめたりけるか、をのこゝ女こともあ
またありける、むすめのあるかなかに、いみしうかしつき思ひたりけるを、
略○中（面識）先帝の御ときにおほやけみやつかへにいたしたたりければ、女な
れとまななといとよくかきければ、内侍になさせ給ひて、高内侍とそいひ
ける、○中（攝政藤原實子）北の方御ちゝぬし、二位になさせ給へれば、高二位とそよにはい
ふめる、年おひたる人のさえかきりなきか、心さまいとなへてならず、むく

性格

女子

高内侍

男國々ノ
守トナル

つけくかしこき人におもはれたり、そのをのことも、ひとつはらのほ、さへ
さくくにの、かみとも、たゝなしになさせ給へり、この人々の、いたうよ
にあひて、をきてつかうまつることを、人やすからすもと、やむ事なから
ぬおほんなからひを、こゝろゆかす申をもへり、

〔大鏡〕内大臣道隆 その關白殿、はらゝにをのこ子をんな君あまたお
はしましき、今の北の方は、大和守高階成忠のぬしの御娘なり、後のよは高
二ゐとこそいひ侍りしか、○中（ナシイ）二ゐの新發の御なかれにて、御そうは女も
みなさえのおはしましたる也、母うへは高内侍そかし、

〔江談抄〕

五

詩事 成忠卿高才人也事

又云、成忠者高才人也、儀同三司御亭、鬪文集二帖詩與六帖詩之日、二帖詩最
初、出天宮閣早春之詩、成忠難之云々、天宮閣者寺也、何最初出此詩、成忠卿有
相論之詞、以其同事量彼人才智者也云々、

〔古今著聞集〕

八 好色第十一

中（道隆）

關白高内侍に忍てかよひ給けるを、父成忠

卿うけぬ事に思ひけるに、或時出給けるをうかゝひみて、かならず大臣に
いたるへき人なりと相して、其後ゆるし奉りてけり、

成忠道隆
ヲ相ス

高才ノ人

長德四年七月是月

〔本朝文集目錄〕下 高階成忠

爲藤原隆家上一條天皇請歸京狀○長德二年十月七日ノ條ニ收ム、
供養延曆寺中堂願文○天元三年九月三日ノ條ニ收ム、

〔權記〕長保二年五月廿二日、戊戌○中今朝定澄律師來臨相逢、召仰勘解由判官行忠、自院請興福寺僧十五口、始自來廿六日、於長者殿爲消除御惱、可令轉讀大般若不斷經、（證子）先年院御惱之時、靜昭闍梨申行此事、高二位靈出來云、功德殊勝之由、其度御惱早平愈、仍今申行耳、

○成忠、皇太子上表ノ勅答ヲ作ルコト、康保元年十月三日ノ條ニ、實賴ヲ關白ト爲ス詔ヲ草スルコト、同四年六月二十二日ノ條ニ、同人ニ隨身兵仗ヲ賜フ勅書ヲ作ルコト、同年十二月十九日ノ條ニ、其辭表ノ勅答ヲ作ルコト、安和元年三月二十二日ノ條ニ、改元ノ詔書ヲ作ルコト、同年八月十三日ノ條ニ、節會等ノ停否ニツキテノ詔ヲ作ルコト、同年十月二十二日ノ條ニ、擬文章生詩ニツキテ召問セラル、コト、永祚元年十月二十七日ノ條ニ、道長ヲ呪咀スルコト、長德元年八月十日ノ條ニ見ユ、

前參議正三位藤原佐理薨ス、

〔公卿補任〕六 前參議正三位藤原佐理、五十七月日薨、

〔日本紀略〕院一條 七月其日、前參議正三位兵部卿藤原朝臣佐理薨、十五、

〔新札往來〕正三位前大宰大貳參議佐理卿、朱雀院御宇天慶七年誕生、一條院長德四年七月晦日薨、十五、

〔興福寺年代記〕佐理卿死、七月晦、天下疫病發死、

〔公卿補任〕六 參議正四位下藤原佐理、攝政太政大臣實賴公孫、左少將正五位下敦敏一男、母故參議元名女、天德五正七從五下、八、廿八日昇殿、應和元十一三侍從、同二八七右兵衛權佐、康保三正廿七右少將、廿三、同四正廿

近江介、九月一日東宮昇殿、十月十七從五上、十一月日昇殿、安和元十一廿三正五下、大嘗會悠紀國司、同二九二五位藏人、十月十九右中辨、天祿元十一廿從四下、廿七、十二月日還昇、同三十二二十五左中辨、四月廿八內藏頭、天延三正七從四上、十月十五日紀伊守、貞元二八二正四下、書殿門額賞、十月十七日任參議、天元二年正月廿九讚岐守、同四年十月四日可敍從三位、而讓男賴房敍從五下、同五年正月卅日伊豫權守、同六年正月廿七勘解由長官、永觀二年正

長德四年七月是月

月廿九日美作守、八月九日從三位書殿門額賞、永延二年正月廿九美作守、二月十九日丙午巳時著座、同三年十一月十八日辭長官、廿八日播磨權守、正暦元年正月廿九兵部卿、同二年正月廿七辭參議并卿、任大宰大貳、四月廿六皇后宮權太夫、同三年月日正三位、同四年月日止權太夫、長徳元年十月十八日止大貳、長徳四年正月廿五日兵部卿、

〔尊卑分脈〕

藤原氏
實類孫氏

敦敏

左少將、正五位下、

佐理

兵部卿、大宰大貳、能筆、號三跡其一也、
參議、正三位、母參議元名女、

賴房

從五位下、
母中納言爲輔卿女、

女子

中納言懷平室、

〔諱訓抄〕 納言以下

佐理スゲカ藤ヲ引キテ類ノ聚ト同ジ假ノ名本末今鏡メリ、

〔榮華物語〕

花ニ山ハ入ノ内ノ略爲光ノ女抵子テかノすけまさの兵部卿の御、

〔大鏡〕

太政大臣實類 敦敏の少將の子也、佐理の大貳よの手かきの上手、

世系
三跡ノ一

名ノ訓

妹

傳

伊豫三島社ノ額ヲ
書ス六波羅密寺ノ額ヲ
書ス

如泥人
道隆ノ東
三條第ノ
障子ニ歌
ヲ書ス

道隆女裝
束ヲ被ス

○中略、伊豫三島社ノ額ヲ書スルコトニ又おほかた是にそ日本第一の御手のおほえは、この後そとり給へりしか、六波羅密寺の額も、此大貳の書給へる也、されは此みしまのやしろのかくと、此寺のとは、同じ御手に侍り、御心はへそ懈怠し、すこしは如泥人とも聞えつへくおほせし、故中關白殿東三條作らせ給て、御さうしにうたゑ共か、せ給ひしきしかたを、此大貳にかけとの給はするを、いたく人さはかしからぬほとに、參りてか、れなは、よかりぬへかりけるに、關白殿わたらせ給、上達部殿上人など、さるへき人々あまたまいりつとひて後に、日高くまたれ奉り給り給ければ、すこし骨なくおほしめさるれと、さりとてあるへきことならねは、かきてまかて給ふに、女のしやうそくかつけさせ給を、さらてもありぬへくおほさるれと、すつへき事ならねは、そこらの人の中をわけ出られるなん、猶懈怠の失錯なりける、のとかなるけさともうちまいりて、か、れましかは、か、らましやはとそ見る人もおもひ、みつからもおほしたりける、むけのそのみちなへての下らうなとにこそ、かやうなる事はせさせ給はめと、殿をもそしり申人々ありけり、○中大貳の御妹は、法住寺のおとゝの御北方にて

長徳四年七月是月

一五六

消息

おはす、

〔藤原佐理自筆消息〕

御物室

召筆、左右馳求更無、一二管先所出來是也、不有如然之御用、若今明求得、追將經御覽耳、

〔佐理下同〕花押謹奉恩命、恐々戰々、抑彼箭事、一日以亞將返報、爲令御覽馳奉已了、而今有此命、驚怪不少計也、弊文落失歟、只今召問、可蒙處分、須彼緒風所陳、以件箭相替左衛門尉兼澄箭著用、若猶可然、闕自用返送云々、見其氣色、若彼親重朝臣箭侍歟、將稱難澁之由歟、承重命將進返之由執申也、返々參申侍、若遂無他箭、重案内耳、悉之謹狀、

卽刻愚奴花押

〔前山久吉氏所藏文書〕

同

〔佐理下同〕花押謹言、頭辨昨日參宮之由傳承侍、氣色如何、不審々々、〔花押〕申請雜事、被附彼貫主了云々、而昨從或人許告、未達天聽者、太所鬱奇也、此事本意、只遂奏聞、爲備後生之辨也、中間又被抑留、爲之如何々々、諸在參入之次、〔花押〕謹言、

三月九日

權大夫〔花押〕自筆書、佐理ノ

原寸

縦 〇・三二二
横 〇・四八八

此の願はるる
 侍者給に
 女はあつて
 難し
 一は、女は
 生かす
 左に
 本は
 お備は
 女は
 侍を
 三

松前消息

〔近衛文書〕

十

〔參議〕佐理卿松前消息

〔花押〕稽顙謹言、一日之後鬱積無極、抑來廿六日於松前可修少法事侍、依有遺命萬事儉約、濫好過差何以加之乎、於申事由所憚最多、然而非可招疎遠若有御暇令立過給歟、只以光臨可爲庄嚴也、且賜恩惠同可有其闕者、閭巷之說難知實不、會承案内、依籠時之比不能參聞、可如何侍乎、雖可申可蒙專一之恩由、至愚之身非無所憚、爲之如何、被作氣色乎、只隨便宜、可被進止者也、〔花押〕恐々謹言、

六月七日

藤原〔花押〕狀上

謹々上、僧都御房

〔與書〕以佐理卿真跡臨之、

元祿八年小春十七日

〔近衛家應〕〔花押〕

〔二中歷〕一十三能歷大貳藤佐理

〔夜鶴庭訓抄〕能書人々

佐理 左大辨、

長德四年七月是月

能書

兼明親王
及比行成
ト同等ノ
手書

佐跡ノ一
三賢ノ一
人末代ノ
模規

〔江談抄〕

二 兼明佐理行成等同手書事

兼明、佐理、行成三人等同之手書也、各皆様少相乖也、後人難決殿最歟、故源右(備房)相府云、行成卿世人謂劣於道風歟、信者、佐理、兼明等止奈牟世人稱ケル、

〔入木抄〕

入木道の一流、本朝は異朝に超たる事、

略上 佐理、行成は、道風か體をうつしきたる、野跡、佐跡、權跡、此三賢を末代の今にいたるまで、此道の規模として好む事、面々彼遺風を摸也、仍本朝の風は、不相替者也、

〔筆法才葉集〕

一文字ノ始ノ事

略上 三賢トハ、道風、行成、佐理ノ筆法是也、

〔尺素往來〕

道風、佐理、行成稱之三賢候哉、略上

〔愚祕抄〕

上 或人の筆體の事を出て侍る物に、皮、肉、骨の三體といふ事を

たて申たるに、古の三跡に、此三體をよせて、三得三失をあて、侍り、三跡とは、野跡、道風、行跡、行成、佐跡、佐理の三也、略中 佐理は、皮を存して骨肉の兩姿をわすれ侍る、をのゝ得てかく體は得なり、不得かたは失なり、略上

〔徹書記物語〕

下 一道風、佐理、行成をば、皮、肉、骨にあてたり、略中 佐理は肉

漢ノ書風

三跡ノ一
人書風

の體をかき、略中 伏見院は道風、佐理の筆體をうつしたまへり、略中 道風、佐理も、漢朝の風をつたへてならひたるなり、略下

〔麒麟抄〕

二 一四聲之字事、略中 上聲字、佐理卿御手也、字姿浮テ、ハハメキテタマハチ也、略下

〔才葉抄〕

(書通) 法性寺殿は、むかしの手書には、道風、佐理、行成、此三人を能書と宣り、此三人に三徳三失有也、略中 佐理は、やさしくしてよはし、やさしきは徳、

よはきは失也、略上

〔筆法才葉集〕

一文字不具ナル事不可有、篇小クシテ作大キニ、若シハ、篇大

ニシテ作小キ事ナリ、道風、佐理、行成ノ手跡ニハ不具ナル文字全ク無キナリ、

一文字ノ四病ノ事、略中 第三ハ、佐理ノ筆跡ハ極メテヤサシキ姿也、譬ヘハ、京女薦ノユ、シクイミシキカ如シ、略下

一三賢ノ筆勢事、佐理ノ筆勢ハ、文字ヲ同様ニ書テ、長ク一ナント書事モ有ナリ、サテ同様ニ大キニ長ク、是ヲ筆勢トハ云也、

〔麒麟抄〕

七 一筆ノ毛ノ事、略中 佐理者、眞ノ物ニ者、兎毛ヲ心ニモ上ニモ

書ノ徳失
優シク弱シ

不具ノ文
字無シ

筆勢

用筆

長徳四年七月是月

懸テ筆ヲ長ク好ミ結也。○下略

〔遊學往來〕下

安和冷泉院之御代、正三位兼左兵衛藤原佐理卿者、於永一字、成五形之圖、所謂雪中落巖點、牛片角折點、野口長立之點、半月雪出之點、遠山雪行之點等也、

八月十四日

權僧正

謹上 常住院式部法印御房

〔徒然草〕

一人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、横川の常行堂のうち龍華院と書けるふるき額あり、佐理、行成の間うたかひありて、いまた決せずと申し傳へたりと、堂僧ことごとしく申し侍りしを、行成ならば裏書あるへし、佐理ならば裏書あるへからすといひたりしに、○下略、全文ノ十二月四日、ノ條ニ收ム、

〔近衛文書〕

法性寺殿御消息

圓融院、佐理自筆法華經候之由、所聞候也、只暫可令借獻給、更不可及披露、一

永字ノ五點

書ニ裏書ナシ

筆跡法華經

見之後、早々可被返納候也者、依御氣色上啓如件、

六月晦日

謹上 法眼御房

〔靈山額本寫〕

先日以大僧正覺猷之本、令比較、定信之本無相違、抑僧正令語曰、此額仁康聖人五時講六枚額之中也、然者佐理手跡也、而伊房卿行成手跡所續之、此疑事歟、

保延二年十一月十壹日

教長

〔山槐記〕

永曆元年十二月五日、己酉、天晴、未刻、向右大臣亭、○中被取出手本一合、被見予、神妙物等也、○中 佐理詩清書、○下略

〔實隆公記〕

十六 延徳二年閏八月十五日、乙丑、天霽、竹園古筆櫃一合、返上之目錄注左、隨分至寶也、○中略

一裏 佐跡四卷、此内寫本一卷、

〔伯爵松平頼壽氏所藏詩懷紙〕

暮春同賦、隔水花、光合應教一首、絕句、倭漢、任爲、體、

長徳四年七月是月

五時講ノ額ヲ書ス

詩清書

佐跡四卷

詩

長德四年七月是月

右近權少將佐理

一六二

花脣不語偷思得，隔水紅櫻光暗親。兩岸芳菲浮浪上，流鶯盡日報殘春。

〔直物抄〕次參議置笏，頗引寄筓，以右手巡々引廻之置前，放重召名等。

佐理抄

佐理抄，當年召名猶可放籤云々，爲（藤原）輔文範未說。

〔參議要抄〕（年中）佐理抄云，直物勘文返上大臣，又爲輔中納言說，去年除日

先放出之，後奏之。

〔江談抄〕（雜事）佐理生靈惱行成事

佐理ノ靈
行成ヲ惱
マストノ
說

次談話及古事。前奧州云，佐理卿平生時，行成卿可書進某所額之由，蒙勅命，不

被奏先達候之由，欲書進之間，佐理生靈來而惱行成，及數日而痛惱云々，予謁

主殿頭公經之次，語此事，公經答云，佐理存生之間，按察大納言未曾一度不被

書額歟云々。

小藏親王生靈煩佐理事

前中書王隱遁之間，佐理度々依勅宣，被書無止之勅書等，然間依小藏親王生

靈常以煩給，是奧州僻事也云々。

〔新猿樂記〕太郎主者能書也，略中佐理之一墨之樣，皆悉莫不習傳，略下

佐理一墨
之樣

兼明親王
靈佐理
ヲ惱マ
トノ說

芳艷浮浪之流鶯
畫日報殘春

着春因賦落花先合意

致一首

他句の作
傳漢任意

高定權少將佐理

花唇不語偷思得語

水紅櫻 少時晴 親直若

芳艸浮浪上流 鷺

畫日 報 破 止

暮春月賦陸水花光合應

教一首

絕句四律
倭漢任意

為權少將佐理

花脣不語偷思得語

水紅櫻花暗親面春

芳艸浮浪上流鸞鳥

畫日報殘年

自署及
花押

〔花押彙纂〕

部フ之 藤原佐理

〔参考〕

○佐理内裏ノ殿舎門等ノ額ヲ書スルコト、貞元二年七月八日ノ條ニ、
僧齋然佐理ノ筆蹟ヲ宋主ニ贈ルコト、天元五年十一月是月ノ條ニ、圓
融寺供養ノ御願文ヲ清書スルコト、永觀元年三月二十二日ノ條ニ、大
嘗會主基ノ御屏風ヲ書スルコト、寛和二年十一月十五日ノ條ニ、勅旨
ニ依リテ、筑紫ヨリ御手本ヲ上ルコト、正曆二年正月二十六日ノ條ニ、
僧仁康ノ河原院五時講ノ願文ヲ清書スルコト、同年三月十八日ノ條
ニ、宇佐宮神人ニ訴ヘラル、コト、同五年十月二十三日ノ條ニ見ユ、

Handwritten signature in cursive style, likely reading '藤原佐理' (Fujiwara no Satoru).

長徳四月七月是月

○伯爵酒井忠正氏所藏文書
丹波守藤原爲雅宛消息

長德四年七月是月

一六四



○赤星鐵馬氏舊藏文書
十月廿五日消息



○伯爵松平直亮氏所藏文書
五月十九日書狀



○帝室御物
消息



○帝室御物
消息



○田中文書(山城)
正曆三年九月廿日大宰府符

書道系統

〔曼殊院文書〕

城○山

一手跡習學系圖

村上天皇

佐理

行成

忠通

教長

〔弘法大師書流系圖〕

舉時

從四位下、兵庫頭、
道風子、

佐理

正三位、
三木、

行成

道長

長德四年七月是月

一六五

運筆

公任
具平親王
昭平親王

〔入木道傳流〕

佐理卿より六條宮具平親王、岩倉宮昭平親王、法成寺關白道長、大納言公任卿、權大納言行成卿等に傳へらる。○上略

〔玉章祕傳抄〕

下 一 佐理卿ハ筆ヲ少シ横ニシテ、サキト腹トニテ交テ、任筆緩々ト書ハ爲本、

一 三跡 書様ノ事○中略

一 佐理眞ニハ赤兔ノ毛ヲ心ニ少シ延テ、細ク長毛ニテ結也、少シ堅ニ打立

テ、捨所ニ中ノ筆ニ捨ヘシ、○以上、鳥羽問答抄同ジ、玉行ハ秋ノ二毛ヲ心ニカケテ、上

毛ハ冬毛ノコマカナルヲカケテ可結也、面筆ニ立テ留所ヲハ、中筆ニ可

留草ヲハ以冬毛ツヨクユワセテ、キリ々々ト筆愛ト可書、

一 ○中略 血脈ニ云、本尊漢、王義之、蒼頡梵雲、入、梵王、所生、釋迦、日本、小野道

卿、佐理卿、以上十一人、奉加弘法大師號十二人也、

〔觀鷺百譚〕

四 第七十八 和朝額字佐理神妙

筆勢大師ノ如シ

用筆

〔米庵墨談〕

二 諸體用筆可擇

佐理筆、不可說候者歟、其勢偏如（空海）大師御手蹟、及神感之人也、○上略
道風、佐理、行成、三蹟用筆ノ結様ノ傳ヲ見ルニ、眞筆ハ雀頭、行筆ハ鷄爪、草筆ハ柳葉ノ形ニテ、剛柔三體ニ從ヒ、家々ノ工夫ニテ、少シノ違ヒアリ、

〔古筆家祕書〕

名上代人

參議佐理卿

延喜二十一年、合運、（天慶）生ルト傳、一條院長徳四月、薨、五十五、凡七百餘年、

通シ切

七寸二分、歌二行、三行、（古今）

通シ類裏筋佐理

七寸二分、飛雲、（タテスジ、朱墨）

イロ紙

七寸三分、題一字、歌二行、

卷物切

墨字、（朱書）絹地、五色、燒唐紙、

ヨセ紙

六寸五分、凡十行、

牛小四半

七寸五分、八行、

榮紋唐紙

七寸四分、歌二行、書作者、八行、

眞名

八寸三分、七八字一行、（頭書）公夏、（韻書）四行、

長徳四年七月是月

佐理切

ウズミ
タテスチ、金銀スナコ、古今戀一、
○ギンヌナコ、歌二行、
紙五寸七分、幅六分餘、

〔新撰古筆名葉集〕上

參議佐理卿

通シ切

卷物アリ、通シ古今ノ歌二行、書、繼合、砂子、香ウシスアリ、

筋切

卷物四半、形、古今ノ歌二行、書、飛模、雲、砂子、立ニ、銀、クニテ、筋アリ、通シ目、

四半

古今、

同

淺黄、帛、金、砂子、少アリ、哥、

同

二行、書、歌、仙、家、集、カ、未、詳、

同

家、集、哥、二、行、書、

同

繼合、帛、空、目、雲、帛、白、帛、金、銀、砂子、

卷物切

墨、字、草、書、五、色、帛、燒、唐、帛、絹、地、

〔集古浪華帖〕三

贈常禪師詩

恩命帖 理○帝室御物佐、消息ニ同ジ、

女車消息 同ジ、伯爵酒井忠正氏所藏、文書、佐理消息ニ、

〔群書一覽〕

法帖類 集古法帖 五帖 三

藤佐理書 十二行、尺、履、草書、四行、書

海陽泉帖 二帖

參議佐理卿の行草なり、海陽泉、曲石鼻、望遠亭、石上閣、同前海陽湖、同前、同前、

夕陽洞、清泉銘、遊海門、峽等の題あり、卷末に納涼、七夕等の題の歌あり、

耳比磨利帖 二帖 上

佐理卿書 祭之事 同上

恩命帖 一帖

參議佐理卿の消息なり、文中に、謹て恩命を奉すといふことあるを以て、恩

命帖と稱す、一接八行草書百六十餘字、帖末に、香果藏の三字あり、眞蹟は

浪華の賈人某か珍藏するところ也、

白詩二首 一帖

柳原家藏佐理卿の草書なり、はしめに昭國閑居の四字の題あり、その料紙

古代の詩箋と見えて、四圍に龍を畫き、中に藻間の遊魚、鴛鴦等を畫けり、

長徳四年七月是月

一七〇

跋に曰、右白樂天の昭國閑居、及び酬吳七見寄の二詩、皆文集第六卷に見えたり、眞蹟舊殘破の餘を輯めて以て卷を成す、詩もまた錯置多し、今ことごとく原本にしたかふといふ、井上清風謹刻、

詩一首 一葉 佐理卿書略○中

已上二十種、白川忍齋藏板の墨本なり、

〔續群書一覽〕七帖之類 一御手鑑 一帖 古筆了意撰

佐理卿

法華經ノ

〔佐理寫妙法蓮華經方便品〕文○公爵近衛

此經卷雖爲上古筆、筆者不知由仰也、

右者、照高院御門跡御所持佐理之眞筆也、依御許借寫之畢、

延寶四辰年季夏下旬 中原次左衛門

重經(花押)

〔近衛文書〕

〔佐理卿消息二行、不慮得之珍重、元祿十年閏月初日〕此文近衛家照

〔觀瀾閣寶物目錄〕古筆書畫十冊百五 舊錦囊

消息斷片
絹地切

歌切

七夕撫子
合摸本

長恨歌ノ
摸本

藤原經尹
拜領ノ消

參議佐理卿筆 絹地一行、極了瑣、穩便、

〔群鳥蹟目錄〕武 藤原佐理 歌切 あらひとの云々、一枚、

〔好問堂儲藏書目〕墨帖類 佐理書七夕撫子合一卷 摸本、

〔好古小録〕書畫 佐理卿書

一士人長恨歌ノ摸本雙鉤ヲ藏ス、卷尾ニ、源相公ノ藏本ヲ以寫ス、花押有、原本ヲ以摸セシ者ナラン、其體李邕ニ肖テ、今世ニ存スルモノト同シカラ
ス、摸手タクミナラスシテ、其神彩猶存ス、況ヤ眞蹟ヲヤ、

〔道風佐理行成三蹟〕集○朝陽閣

近曾屬閑暇、向西郊別墅、秋之爲氣、誠以蕭條、西有紅錦繡之山、南有碧瑠璃之水、庭上有兩三叢之蘭菊、門前有數十頃之田園、加之誦堂、舞閣之基、弋林、釣渚、館、省、吞如、雲夢之者八九矣、登山臨水、暫以徘徊之間、武衛相公、源羽林、藤給事中、侍中、尚書等、不期來會、七賢林之曩跡、興有餘、欲罷不能、終日遊蕩、乘月歸洛、事起倉卒、不啓案内、仍勒子細、粗達上聞之狀如件、○本文ノ前ニ、小野道風ノ蹟ヲ収ム、共ニ略ス、

長徳四年七月是月

一七一

妻妾方子四等無服、妻妾父母五等無服、妻妾前夫

夫方姑夫三等無服、夫前妻妾子三等無服、夫姪三兄弟姊妹妾四等無服、婦舅□等無服、

假寧令云、凡職事官遭父母喪並解官、自餘皆給假、夫及祖父母、養父母、外祖父

母卅日、三月服廿日、一月服十日、七日服三日、凡無服之殤義云、未成人死曰殤也、注云、生三月至七

歲、本服三月給假三日、一月服二日、七日服一日、凡師經受業者義云、私喪、給假

三日、凡改葬一年服給假廿日、五月服十日、三月服七日、一月服三日、七日服一

日、

又云、聞喪舉哀其假減半、謂假有官人、遭祖父母喪、本假卅日、若在遠有乘者入

假限謂一日入假限、給二日之類、

儀制令云、凡太陽虧有司預奏、皇帝不視事、百官各守本司不理務、過時乃罷、義

假令日蝕在申者、皇帝二等以上親及外祖父母、右大臣以上、若散一位喪、皇帝

不視事三日、國忌日、三等親、百官三位以上喪、皆不視事一日、

喪葬令云、服紀者叔父三月、舅一月、說者云、問、縱遭父喪未服闋間、重遭母喪何

服、答、重遭父母之喪、更二年不可服、縱父喪經二三月之後、又遭母喪、隨母計耳、

又云、居重喪間、遭輕親喪者、不可更著、若在服末遭者、若居輕服間、遭重喪者、須

喪葬令文

解釋

更著服滿其限、

案之法令之意、舉重明輕、傍親之服若是重疊、更不著服、依後滿限耳、假令外

舅先薨則一月、叔父後薨服已三月、其喪在同時、依一滿兩限耳、

假寧令、遭喪給假、三月服廿日、一月服十日、說者云、問、縱祖父母喪其假卅日也、

未訖間、又遭養父母喪、其假重給哉、答、從後日更計始耳、重不可給六十日、

案之、遭喪之假、令條之限、外舅十日、叔父廿日、其喪御假、又是同時須依多限、

被請廿日至于彼十日、自滿此限內矣、

長德四年七月廿七日

左衛門權佐惟宗允亮

假寧令文

解釋

長德四年八月一日

八月丁亥朔

一日、丁亥天台座主權僧正暹賀寂ス、

〔日本紀略〕院一條 八月一日、丁亥天台座主權僧正暹賀入滅、年八十三、號本覺坊

〔歷代編年集成〕一條七 天台座主權僧正暹賀 近江國人、或駿河國人、慈

惠和尚入室弟子、正曆元年十二月廿三日補、長德四年入滅、八十一、號本覺坊座主、

官歴

〔華頂要略〕天台座主記二 第二十二權僧正少僧都暹賀本覺 治山八年、駿河國

氏、慈惠大僧正弟子、運正曆元年庚十二月廿日座主宣命、年七勅使少納言藤

原時方、同廿三日到來、同二年辛卯十二月廿三日轉大僧都、不經權、越少同四年

巳、八月一日慈覺門人等、切拂千手院房舍、併追却門徒一千餘人、其後智證

門人等、各占別所不住叡山、同五年甲午十一月五日任、權僧正、年八十一月七日

忽持院燒亡、以前年舍利會長德四年戊戌八月一日入滅、年八

〔僧綱補任〕寺本興福 權律師暹賀 寬和二年三月十一日任、天台宗、延曆寺、

內供基增已講入室、上二以永延元年三月十日轉任權少僧都、永祚元年五月七

日轉任權大僧都、正曆二年九月廿一日轉正、同三年十月二日拜天台座主、同

五年十一月五日轉權僧正、長德四年八月一日入滅、山座主治九年、上三

〔僧綱補任〕乾 德川昭武氏本 權律師暹賀天台宗 安和二年三月十日任、

不詳、年五十五臘三十七、或不歷律師云々、少僧都良源弟子、又基增已講

弟子、承平元年四月十四日得度受戒、安和元年三月十九日依增恆奏、爲元慶

寺阿闍梨、年月日補內供奉十禪師、天元元年律師、同二年律師、權歟、寬和二年

八月廿日任權少僧都護持勞、永延元年、或本今年三月永祚元年五月七日轉

少僧都、正曆元年十二月廿九日任延曆寺座主、同二年十二月廿三日任大僧

都、七十同五年十一月五日任權僧正、長德四年八月一日薨、八十號本覺房座

主、

〔師資相承〕乾 三種悉地古印信

玄昭

暹賀權僧正、座主、慈惠弟子、駿河國人也、基增弟子、本覺房、長德四年八月一日入滅、八十一、

天台國教菩薩戒相承

智證

尊意

長德四年八月一日

法系

長徳四年八月一日

一七八

暹賀僧正

教圓大僧都 七十入滅

明快大僧正

〔諸嗣宗脈紀〕

天下台宗

良源

暹賀

〔日吉山王利生記〕

三

比叡山に暹賀、聖教とて、二人の明哲侍けり、兄弟とそ聞ゆる、共に智行優長の人なりけり、幼にしては駿河國にそすみける、やとのあたりちかく社の有けるに、神子ともあつまりて、神樂なとしけるを、兄弟つれつゝ見けるに、大なる蜂二來て、此小生のうへに飛まはりければ、かたへの人々はらひのけんとしける程に、巫託宣して云、蜂は山王の侍者也、ゆめくゝいとふ事なかれ、この二人は則叡山にのほりて、徳をひらくへき器なり、神明かつく侍者をさしくして守らしめ給ふ也、されは今もつゝしむへき事あるゆへなりとそ、父母これを聞て、すなはち叡山へのほせてける、兄は暹賀とて、第廿二代の座主也、智行共に兼て、八十五歳までそお

傳
幼時駿河
に住ム

神巫ノ託
宣ニ依リ
テ出家ス

はしける、弟も聖救僧都とて、時の名徳なりけり、略ス、○繪

〔本朝高僧傳〕

淨慧二之六

江州延曆寺沙門暹賀傳

釋暹賀、姓藤氏、其父母家於江州志賀縣、賀幼穉時、與弟聖救、見群童舞樂於山、王神壇、皆大蜂飛來、停兄弟之頭、傍人以扇拂之、神巫託宣曰、莫拂、莫怖、蜂者山王之使令、而此二兒、佗日登山、可成大法之祥也、父母信神巫之言、遂使二兒、投座主慈慧之室、剪髮納戒、暨歷一紀、博究顯密、名敷輦下、親本覺院、普誘來學、正曆元年、敕任延曆寺座主、年已七十八、管領八載、解印歸院、長徳三年八月朔日、寂於舊院、春秋八十有五、

本覺院ヲ
創ム

十四日、庚子左大臣道長病ム、

〔伏見宮御記錄〕

權利一

八月十四日、庚子、病愈之後、今日參内、○中先詣左府、

令内藏頭

陳原

申今日始參内之由、面謁、坐籠中、候其外、被示雜々事、又被示所惱于今

未愈、仍欲上表、必可令留給之由可奏、即自上東門參内、候御前、奏大臣令申之

旨、仰所申雖切、非可忽收、此次被仰雜事、臣多能直言、輔導不逮、是所羨也、此外

所被仰祕事不書、爲庶幾溫樹不語也、

十五日、詣左府、傳申昨繪命、

長徳四年八月十四日

一七九

上表ノ旨
ヲ行成ヲ
シテ奏セ
ム

勅許ナシ

長徳四年八月二十日 二十六日

卅日、參左府、宰相中將被參會、披陳雜事、

○三十日、左中辨藤原行成道長ニ雜事ヲ披陳スルコト、便宜合致ス、

二十日、丙午大風、諸司多ク顛倒ス、

〔日本紀略〕院一條 八月廿日、丙午自卯至亥時大風、宮中諸司多以顛倒、武德

殿、御書所顛倒畢、

〔諸道勘文〕五十四

勘申彗星年々事、○中

同八月廿日、亥時大風、宮中諸司多以顛倒、○中

右依仰、大略勘申如件、

長治三年三月四日

大外記中原朝臣師遠

〔山槐記〕 治承二年正月七日、壬寅、○中彗星年々、○中

八月廿日、大風、

二十六日、壬子美濃國ノ解文ヲ奏ス、

〔伏見宮御記録〕權利一 八月廿六日、初奏文、美乃國進召

權少僧都雅慶ヲシテ、法務ヲ兼ネシム、

武德殿
御書所

召絹十疋
解文

寛朝替

典藥頭

大辨ヲ競
望ス

長徳四年八月二十日 二十六日

卅日、參左府、宰相中將被參會、披陳雜事、

○三十日、左中辨藤原行成道長ニ雜事ヲ披陳スルコト、便宜合致ス、

二十日、丙午大風、諸司多ク顛倒ス、

〔日本紀略〕院一條 八月廿日、丙午自卯至亥時大風、宮中諸司多以顛倒、武德

殿、御書所顛倒畢、

〔諸道勘文〕五十四

勘申彗星年々事、○中

同八月廿日、亥時大風、宮中諸司多以顛倒、○中

右依仰、大略勘申如件、

長治三年三月四日

大外記中原朝臣師遠

〔山槐記〕 治承二年正月七日、壬寅、○中彗星年々、○中

八月廿日、大風、

二十六日、壬子美濃國ノ解文ヲ奏ス、

〔伏見宮御記録〕權利一 八月廿六日、初奏文、美乃國進召

權少僧都雅慶ヲシテ、法務ヲ兼ネシム、

〔僧綱補任〕○三 興福寺本 權小僧都雅慶 八月廿六日兼法務、

〔東寺長者補任〕一 權少僧都雅慶 八月廿六日兼法務、寛朝替、

〔東寺文書〕○觀智院三 正法務、兼一長者、

大僧正雅慶 寛朝僧正弟子 同八月廿六日法務、

二十八日、甲寅小除日、

〔典藥頭補任次第〕

丹波宿禰重雅 一條 長徳四年八月廿八日任之、

滋秀 滋秀 長徳四年七月日卒、歷頭卅三年、

〔清少納言枕草子〕○宮内省圖書寮本 あはれなるもの ○本文

宣孝、八月廿七日、兼山城守、

〔日本紀略〕院一條 八月廿七日、癸丑、小除日、

〔伏見宮御記録〕權利一 八月十六日、道長詣左府申雜事、被示大辨競望之人事、申

云、中辨轉大之時、不必依位階、或亦依任日加之、行成藏人頭有勞、然則任參議、亦以有先例、欲兼任大辨、權辨朝臣若申可依位階之由、欲申此旨、抑受領之吏、去任二年之中、不勘公文之輩、不可敍用之由、當時新制也、伴朝臣去任之後、于

長徳四年八月二十八日

今三年、又任中無所勤仕、納官之事未濟、已多留國之事、已無沙汰云々、而遷任官、殊私之恩也、今依無事勤、不可居此官、況與藏人頭競望之事、何有許容哉、彼若強有所申者、以此旨欲愁申、命云、所申尤可然也、亦被示受領并供奉諸司等、闕、早可被補之由可奏云々、

道長ノ不

廿七日、早旦參内、雨、今日有小除目事、申刻爲御使詣左府、仰可被行除目案内、并檢非違使可補事等、被奏云、重痾之後、心神不覺、雖恐勅旨難申、理非々々之間、只在叡慮、此次被示事甚多、歸參比至陽明門、秉燭依甚、雨執笠著深沓、病後、庭弱不可堪、相扶參著、奏事由衣裳悉濕、心神甚惱、爲休息退下宿所之間、於小板敷、謁宰相中將、藏人右中辨、(兼)依召參御前、承除目之事、仰民部卿、以正五位

丹波重雅ハ當時ノ名醫

藤原典雅御禮ノ拜

下大炊權頭賀茂朝臣光榮爲頭、(兼)從五位上權醫博士丹波宿禰重雅爲典藥頭、(兼)從五位上針博士菅原朝臣典雅爲造酒正、(兼)從五位上右衛門權佐藤原朝臣宣孝兼爲山城守、從四位下藤原朝臣典雅爲攝津守、(兼)從四位下佐伯朝臣公行爲播磨介、(兼)從五位上左大臣申、從五位

大炊寮造營ノ功

御厨子所別當

成功

位上刑部權少輔藤原朝臣光尹爲土左守、(兼)右衛門大志石生光明任左衛門大志、又以左衛門大志石生光明、府生粟田豐理、(兼)從五位上右衛門少尉藤原行正、府生林重親、(兼)從五位上日仰云、主殿助藤原泰通爲御厨子所別當、

九月一日、(略)中詣相府、(略)中依得閑暇、申承雜事、亦被示前美濃守共政朝臣令申云、奉公之後、殊無過失、爲吏數國、年過六旬、但前任之間、鎮纏身病留國、納官之事、其雖成其勤、心神乖和之中、未勘畢公文、抑任播磨時、造皇嘉門、伴門與武藏國、可造之由、元所被支配也、播磨之分、成勤蒙賞畢之、而武藏不堪之替、亦蒙宣旨、不日畢功、未預其賞、又造宮之時、作弘徽殿、依有所申、未賜其賞、依伴兩事、將敍一階、若宿痾不侵餘命、可存者、且可致勤公、且可期朝恩、而病在續憊、命待時刻、往日之勤、不可空棄、羨戴紫綬之恩、將爲黃壤之責任、國之事者、已依究濟、預放還了、猶可有事、求令所司勘申入物、可決真偽云々、伴朝臣村上御時、補藏人、爲進士、亦所經吏部、廷尉、朝家顯要、共當其選、一府都督、數國刺史、其所經歷、非無治迹、仕朝年老、臨病命危、其所申請、最可哀憐、但許否之間、可隨勅定、即參入奏聞、仰云、伴朝臣所申懇切、尤可許容、造殿門功、又不可空棄、然而任國公文、

長德四年八月二十八日

二八四

早不勘濟之輩不可敍用之由、當今所仰下也、雖有舊績、其奈新制何、
 十九日、○中略、季御讀經ノコトニカ、ル、九月二十六日、條ニ收ム、此間到於壁後、下宣旨三枚於民部卿、
 修理職申請造職料、任先日宣旨、以綾成光預榮爵狀、又東寺申作料、依先日宣
 旨、被成給大和明賢爵位記狀文、丸部守忠名簿、殿女給所爵弘徽并（養子）可令候位記、
 右中辨示云、民部卿被奏典藥頭重雅、造酒正典雅、大炊頭光榮等兼字、依參議
 不候、不被令書付之由、依令問給、即奏此事、有例之內、故中納言（藤原綱）納言（中）為非參
 議大辨候除目之由、私記也、注仰云、無大辨之時、中辨掌同大辨、令行成奉仕者、說
 孝即奏云、右大臣仰行成朝臣、依宰相不參、可候御讀經定之由、然而申有所勞
 不堪之由、被免之了、仰云、到于御讀經定文枚數已多、書間有程、伴除目尻付只
 三字許、不可經程、於相扶可奉仕之由、可仰者、予應仰赴陣、右中辨以勅命仰戶
 部、々々奉仰之後、即令召外記、又移南座如例、外記參入、即仰去月廿八日除目
 可進之由、此間右中辨仰史元倫、令儲候硯、外記為成進除目、退歸之間、元倫置
 硯於宰相座如例、次召余、々把笏著座、戶部示云、依宣旨、去月廿八日除目、重雅、
 典雅、光榮等兼字可付、即進而賜除目退座、書付三人兼字、亦進而奉之、欲還座、
 戶部開見之後、予揖起而退出、民部卿即參進弓場殿、被奏除目云云、此間佇立

邊云、戶部退改座之間、與兵部大輔退出、此夜雨、

廿四日、罷出、○中略參左府、○中略又申任所吏國平罷下任國之間、受領任符、可令

奉親（小槻）加署之由、依有許容仰下、

廿五日、參內、西二刻、民部卿於弓場殿、被奏任符七枚、山城守宣孝、攝津守典雅、

土左守光尹、日向守忠信、長門介中原朝臣致明等任符、仰云、令捺印付奉親宿禰、

〔小右記目錄〕

京官除目事（長德四年）同八月廿八日、小除目事、檢非違使宣旨事、

〔古事談〕

王道后宮 一條院御時、經六位史敍爵之者、其名相尹、春除目、望申

播磨國、但沙汰之外也、除目始テ、執筆人可任播磨國之人ヲ雖書付、其字一切
 不被書付、其時奇怪之事有議定、伴國所望人ノ申文ヲ皆取集テ、次第雖被書
 其名、尚不被書、伴相尹之時、鮮被書其名字云々、是以觀修僧正為成就所望、令
 修聖天供之靈驗云々、或說云、長德四年八月廿五日、以外記巡、佐伯公行任播
 磨守云々、伴公行元播磨國之生云々、（與脫力）

前石清水八幡宮別當法橋朝鑿叔ス、

〔僧綱補任〕

○德川昭武氏本 法橋朝鑿 長德元年十月廿一日敍、行幸賞、

今年十月七日補八幡別當、寺務三年、同四年正月廿一日辭退、八月廿八日入滅、

長德四年八月二十八日

一八五

長德四年八月三十日 是月

一八六

〔石清水祠官系圖〕

良常 第一代俗別當

朝鑒

圓融師主清昭

應和三年權都維那寺任、貞元三年十二月廿一日少別當寺任、永觀三年七

月四日補權別當官符、長德元年十月七日別當官符、同月廿一日拜堂、同日

行幸敍法橋、同四年正月廿一日辭退別當職、權別當、康平依、蒙齋務宣旨也、同年八月廿八

日入滅、寺務三年、

覺命 權寺主、寺任、少別當、

喜秀 五師行事、權都維那、寺任、三綱、

三十日丙辰、冷泉上皇御所御觸穢、

〔伏見宮御記錄〕權記 八月卅日、中一院有觸穢、尋問其由緒、參此殿之人

可爲兩人云々、

是月、駒牽、

〔樗囊抄〕人駒引不參 康平六八十六、參議不參、長德四、略、中、例、

參議不參

世系

大僧都聖寂寂ス、

〔皇代曆〕二書 一條天皇 大僧都聖寂 長德四年八月日卒、八十西塔真如

房、横川、號安養坊、暹賀座主舍弟云々、樗嚴院檢校、

〔僧綱補任〕寺本 權律師聖救 天元二年十一月廿一日任、天台宗延曆

寺、同年擬講也、右京人、王氏〔朱書下同〕七十一、同四年十月廿二日轉正、七十三上、永延

元年三月十日轉任權少僧都、正曆四年十二月十七日轉任權大僧都、同五年

十一月五日轉正、長德四年八月一日入滅、九十上、三、

〔僧綱補任〕乾 德川昭武氏本 權律師聖救天台宗、延曆寺、 天元二年十二月廿一

日任、三會年六十九、臘四十五、僧正良源弟子、安和二年講師、但依病辭退、私師

基增已講、暹賀座主舍弟也、西塔真如房是基增住房也、承平三年五月廿三日

得度受戒、天祿五年二月十九日依座主良源奏、爲延曆寺阿闍梨、天元三年任

權律師、同四年八月五日轉律師、永延元年三月十二日任權少僧都、正曆四年

十二月十七日任權大僧都、任且、同五年十一月五日轉大僧都、長德四年八月

一日辭退、同月日卒、生年九十、

〔法中補任〕樗嚴院檢 聖救僧都 真如房、西塔基增已講入室、慈惠大師御

長德四年八月是月

一八七

安養坊

官歴

八月一日
寂ストノ
説

良源ノ弟
子

長徳四年八月是月

弟子、駿河國人、西塔院主也、治六年、

〔諸嗣宗脈紀〕天下 天台宗

良源

聖救

〔日吉山王利生記〕三

比叡山に暹賀、聖救とて、二人の明哲侍けり、兄弟と
そ聞ゆる、共に智行優長の人なりけり、幼にしては、駿河國にそすみける、○
略、本月一日、暹賀、兄は暹賀とて、第廿二代の座主也、智行共に兼て、八十五歳
示寂ノ條ニ收ム、弟も聖救僧都とて、時の名徳なりけり、○繪略ス、

九月丁巳朔盡

一日、霖雨ニ依リテ、一條堤崩壞シ、鴨河橫流ス、

〔伏見宮御記録〕權利一

九月一日、雨、午時許詣左府（道長）門（上東）策、依霖雨一條堤壞、鴨

河橫流、入府如海、被示云、霖雨之事、可有御祈、又防鴨河使無勤之由、可被誠仰
歎、伴堤事、宣旨下後、不被修固、今年自春災害連々、民庶患疫、棄忌萬事之間、自
然懈怠也、然而不動（勤）之由、不可不誠、即參陣外云々、招藏人、頃之内記藏人（藤原）中尹
出來、先觸依穢不參入之由、次示左大臣令奏之旨、仰云、院穢連々不絶、聞食奇
不少、堤事早可令誠仰、御祈事日者有所思食、爲令祈申、令召祭主永頼（大内臣）、而申觸
穢由不參入、隨亦令召他中臣官人示、申障無參、仍于今所遲引也、今須重令召
官人祈申、

十二月廿五日、下給宣旨十三枚、今日鴨河堤覆勘也、自陣腋與左中辨（高階信實）以下、率
外記史等、出自陽明門、至洞院東路北行、自上東門東行、至萬里路、更北行、自辰
橋路、出鴨下御社西堤下、自堤上南行、至六條以南、更還著官行事所、（以後事）
注、相尋可法、

廿九日、參左府覽鴨河○中覆勘文、○中命云、可奏、

長德四年九月三日 九日 十五日 十七日

一九〇

三日、御燈、

〔日本紀略〕院一條 九月三日、戊午御燈、

九日、節會ヲ停ム、

〔日本紀略〕院一條 九月九日、甲子、無節會、

十五日、大宰府、貴賀島ヲシテ、南蠻ヲ捕進セシムルノ由ヲ奏ス、

〔日本紀略〕院一條 九月十五日、庚午、大宰府言上、下知貴賀島、捕進南蠻由、

十七日、前齋宮樂子内親王薨シ給フ、

〔日本紀略〕院一條 九月十七日、壬申、前齋宮樂子内親王薨、年四十七、村

〔一代要記〕齋宮 樂子内親王 帝一女、天曆九年七月爲齋、康保四年

退、長德四年九月十六日薨、年四十七、

〔小右記目錄〕親王女御薨事 長德四年九月廿五日、前々齋宮逝去事、

〔權記〕長保元年九月廿一日、與左四位少將同車詣大雲寺、今日故樂子内親

王御周闕也、中書王經營此事給、奉書經外題願文、右兵衛督、憲定、右源中將、頼
左馬頭、相尹、四位少將、明理、權左中辨、說孝、參會、民部大輔爲紀朝臣、讚岐介重

二十五日

薨去説

御周忌

藤原行成

御經ノ外

題等ヲ書

光朝臣等雖來詣、依布衣不就座、事了歸洛、參内宿侍、

〔本朝皇胤紹運録〕

村上天皇

諱成明、

樂子内親王 齋宮、長德四十九薨、四十一

〔榮華物語〕

月一 麗景殿の女御、おとこ七宮、女六宮生れ給にけり、

天皇ノ諸皇子ノ

コトニカハル、

〔齋宮記〕樂子内親王 天曆第六皇女、在

〔皇代曆〕二 齋王 村上天皇 樂子内親王 帝第六女、薨卅七、

○薨奏ノコト、十月十日ノ條ニ見ユ、

十九日、權少僧都雅慶ヲ金剛峯寺座主ニ補ス、

〔東寺長者補任〕一 權少僧都雅慶 九月十九日、補金剛峯寺座主、

〔勸修寺長吏次第〕三代大僧正雅慶 同九月十九日、補金剛峯寺座主、

季御讀經、復任除目、

〔伏見宮御記録〕權利一 九月十九日、參内、右中辨說、左大殿門只今被參可被

長德四年九月十九日

一九一

御世系

御讀經定

也、依有仰事、遣召宰相了云々、此間右大臣被參、頃之左大臣被參於北陣、次右大臣於殿上被召仰云、御讀經事欲定申、參議一人不參入、汝可候者、即申雖所勞侍相扶可候之由、即候御共、赴左近陣、立留壁後、令右中辨申所勞侍不能候座之由、已有可許、仍還候殿上、頃之右中辨來示云、右大臣令奏給云、所勞更發不堪暫候、御讀經事大納言定申、非無先例、可被仰民部卿藤原朝臣歟云々、略、小除日ノコトニカ、ル、八月二十八日ノ條ニ收ム、說孝即奏云、右大臣仰行成朝臣、依宰相不參、可候御讀經定之由、然而申有所勞不堪之由、被免之了、仰云、到于御讀經定文、枚數已多、書間有程、略、下

御讀經發願

復任勘文

除目ヲ奏ス

廿六日、季御讀經發願也、行事民部卿、依一上御障、此卿奉右中辨說孝也、昨依勅藏人右中辨說孝、仰民部卿可行復任事之由、因今日御讀經發願以前被申行也、先召外記被問季御讀經發願日行復任之例、登時外記史管日記奏覽、依有先例、令外記獻可復任勘文、次召硯、先例奏後、若外任者之言朝臣被問先例云々、奏後、若可有除目之時、還即戶部就弓場殿被奏勘文、取之、次還座令右衛門督書之、後、今日初參、仍不書云々、此間左大臣被參、民部卿猶在座令書了、亦參御所、令奏除目、復座令問二省候否、無可參之者云々、次

十禪師仁宗ノ解文

御讀經結願

申文ナシ

余令將曹兼時改置膝突下、奉宣旨一枚於左大臣、內藏寮申公也、次說孝依勅仰諸卿云、長門國司不進季御讀經如何、可行平其旨定申、左大臣、民部卿、右衛門督、右大辨被定申云々、次大臣退於壁後、今招出右大辨、被仰月來久不參入、今日依吉日初參也、御讀經間不可候之由、即退座御宿所、仍參候被定仰、以勘解由判官行忠、民部丞貞、陰子致孝、宗忠死、可爲勸學院之由、亦下給興福寺申釋迦堂十禪師仁宗文、內給、下小槻大夫、宿禰、此寺文書長者下給、多是上宣也、然而伴十禪師文、依御願請蒙天恩、隨內給也、大臣今夜初候宿給、廿九日、略、中季御讀經結願、未一刻平中納言參入、結願刻限午申時也、右中辨依勅、申刻可打鐘之由、仰中納言、今日參候近衛次將者、四位少將一人、明理也、其外皆有障不參、仍左將一人候南殿、衆僧參上、此間御前僧等徘徊弓場殿、此依出居不候、不能參上也、仍更召四位少將、在南殿也、令候出居僧侶參上、平中納言一人候南殿、左兵衛督、高遠、一人候御前、結願事訖無申文、去長德二年、事未始前、於壁後、謁納言奉問云、御讀經結願之日、必可申卷數、而大辨不參之時、申文如何、納言驚召外記問先例、外記申去二年無申文之由、愚案先例、此日大辨雖不參、只行事辨先申事由、可令申也、而納言無案、外記、違例之例、所不被行也、

〔西宮記〕 九月 季御讀經 長徳四年九月二十九日、季御讀經結願也、平中納言參上南殿、左兵衛督被候御前、無申文、去二年例云々、
二十七日、未定考、

考定記

〔伏見宮御記録〕 權記一 九月廿七日、早朝參御宿所、退出、今日定考也、件事去月十一日也、然而右大辨依假不參之間、不被行、假後昨初參内、其後被行也、子細注別、見孝定記中、

二十九日、酉醍醐天皇國忌、是日、禁色雜袍ノ宣旨ヲ下ス、

〔伏見宮御記録〕 權記一 九月廿四日、罷出、教忠、則隆雜袍、說孝禁色宣旨下、廿九日、國忌、可參宰相、皆有障云々、○中又下禁色雜袍宣旨、三日目錄、

是月、花山法皇ノ前女御婉子女王薨ズ、

〔日本紀略〕 院一條 九月其日、前女御無位□子女王卒、年二十七、華山院女御、爲平親女王、
〔爲頼朝臣集〕 をなしころ、をの宮の中納言、きたのかたにをくれてのたまへる、

よそなれとおなし心そかよふへきたれもおもひのふたつならねは
返し

ひとりにもあらぬおもひはなき人もたひのそらにやかなしかるらむ

世系

〔本朝皇胤紹運録〕

爲平親王 一品、式部卿、號染殿、式部卿、

婉子女王 寛和女御、後右大臣實資公室、母同憲定、公高、明、

〔帝系圖〕

爲平親王

恭子 齋宮、寛和二ノ、

女具平親王室、

女母高明親王室、

女花山院女御、

〔榮華物語〕

ころの齋宮にては、式部卿の宮の女御の御をとうとのなかのみやそおは

します、

〔大鏡〕

くつおれてもおはしまして、猶すゑの世に花山院のみかとは、冷泉院のみ

こにおはしましては、御をいそかし、その御時にむすめ奉りて、御身つからも

妹姫宮

後實資ノ
室トナル

つねにまいりなとし給けるこそ、さらてもありぬへけれ、よの人もいみし
うそしり申けり、さりととも御つきなとのおはしまさは、いにしへの御本
意のかなふへかりけるとも見ゆへきに、御門出家し給ひなとせさせ給て
のち、またこのいまのをの、宮右大殿(實資)の北の方にならせ給へりしよ、いと
あやしかりし御事共そかし、その女御殿には道信の中將の君も、御せうそ
くきこえ給ひけるに、それはさもなくて、かのおとゝにまいり給にければ、
中將君申給ふそかし、

うきは身にしむ心ちこそすれ

とは、いまに人のくちにのりたる秀歌にてはへめり、

〔小右記〕

長保元年七月三日、癸未、拂曉向禪林寺、故女御周忌法事日也、源相

公、右兵衛督、右源中將早來、堂東妻接假庇、羞食(所令)、四品五品來會、上達部殿

上人諸大夫多在俗客所之由云々、早朝先送法服七僧(凡僧)、紫甲、奉圖阿彌陀

淨土、奉書銀字法花經具經等、紺紙水精軸、納紫檀篋(以蘇木潤色)、未刻許打鐘、諸僧

入堂、入禮著座、申終事訖、

七僧

御周忌

七僧

講師 前律師嚴久

呪願 律師慶圓

三禮 律師珍覺

讀師 阿闍梨院源(法性寺)

唄 阿闍梨仁儁

散花 阿闍梨證空

堂達 内供阿闍梨覺緣 此外囑請六十僧、

請僧布施

僧綱 各米卅石、 凡僧 各廿石(以上七僧)、 題名僧 各二石、

分經僧二口 各石米、 濫僧供 五石(以檢非違)、

粥時ノ人々

粥時人々

平中納言(兼世) 右衛門督(高遠) 左兵衛督 近江守則忠 左馬頭通任

攝津守棟世 奉職朝臣

諷誦ノ所々

諷誦所々

式部卿宮(爲平) 二百 北方 百端、 余(實忠) 二百 中務 客、 卿北方 百端、

右兵衛督(兼世) 卅手端、 布 名香、宮君、左府妾妻、

願文(式部權大輔) 匡衛作之、

入禮人々

長徳四年九月是月

請僧ノ布

粥時ノ人

諷誦ノ所

願文

入禮ノ人

長德四年九月是月

一九八

上達部(管原輔正)大輔(藤原忠實)源相公督左兵衛督位散三殿上人九人 地下四位七人 五位三十人

今日堂童子用五位酉刻許歸家右兵衛督源亞將依親己者不束帶在余同所

十三日癸巳今日故女御周忌日仍於禪林寺修諷誦布五(尊子)宮被修念佛

十四日甲午拜翁如例但今年加故女御々打筥

十五日乙未止故女御々飯增加乳母及女房等食但自進物所御菜少々朝臣可送女房由令仰之

石卒都婆

九月廿八日丁未略○中來月十日故女御改葬事可行其料石卒都婆造立今日

令給料物三石招禪林寺師申合女御改葬雜事

十月九日戊午今夜李部大王被度天台山西脚隨願寺明日故女御改葬依有方忌下官相從依可忌避

禪林寺ニ
改葬ス

釘貫工

十日己未今夜故女御改葬地鎮事仰奉平宿禰(小相)以身代令行石卒都婆今曉令運禪林寺件事委附彼座主珍覺律師以僧二口令親行納骨壺草等(籠力)付高昭送彼寺守隆朝臣高昭等爲令見改葬事所差遣也但不染穢氣色只籠二口僧仍二口僧供料造釘貫工及夫食新同送遣可修諷誦於禪林寺

十一日庚申拂曉自寺大王歸給候御供守隆朝臣高昭等申刻許從禪林寺歸申云依甚雨于今不參但去夜戌刻始行不及一時事了(地)也鎮釘貫等事如期令奉仕了者

實資ノ請
暇

十二日辛酉改葬暇可請七ヶ日然而近代(宋力)示此間出仕似不義仍請治病暇

〔權記〕長保元年七月三日略○中此日太皇太后宮大夫室家女御周閔法事於禪林寺修之云々

長德四年九月是月

一九九

長德四年十月一日 二日

十月 丙戌朔 盡

一日、丙戌、日食、地震、廢務、

〔日本紀略〕院一條 十月一日、丙戌、日蝕、

〔伏見宮御記錄〕權利一 九月廿九日、略中又明日可有日蝕、而中務省未申云

云、仍奏事由、明日可廢務之由、仰中納言、又仰大夫史、又納言、仰外記、國平朝臣

云、省解今日申外記、然而依官人不具、令追却了云々、史令官掌申大辨、明日廢

務之由、此夜宿侍、

十月一日、罷出、與藏人少納言詣左府、歸宅之後、亦詣內府、依召也、日蝕午刻、或

說不正見、復未可在未刻、其前有地震、

○地震ヲ奏スルコト、本月三日ノ條ニ見ユ、

二日、丁亥旬ヲ停ム、是日、諸陣ノ恪勤ノ者等ニ祿ヲ賜フ、

〔伏見宮御記錄〕權利一 十月二日、依可有句事、令召上卿一人、不參、依仰停止、

賜祿諸陣恪勤者有差、仰出納允政、以陸奧臨時交易絹、給府生以上、各一以諸

國所進、付給番長以下、

左大臣道長、宇治ノ山莊ヲ遊覽ス、

上卿不參
=依ル
陸奧臨時
交易絹

二〇〇

〔伏見宮御記錄〕權利一 十月二日、略中此日左丞相遊覽宇治山莊云々、

三日、戊子地震、天文密奏、

〔伏見宮御記錄〕權利一 十月三日、申刻天文博士吉昌朝臣令藏人右衛門尉

奏、去九月廿六日月與填星同宿、同日申刻蝕、酉刻復末、今月一日未刻地震、異

奏、○本月一日此日戊刻地大震、今夜宿侍、

〔本朝統曆〕七 十大、十五、月蝕、皆既、子四、寅五、

○月填星ト同宿スルコト及ビ月食ノコト、便宜合敘ス、

十日、乙未興福寺維摩會、

〔伏見宮御記錄〕權利一 九月廿四日、罷出、略中參左府、書維摩會廻文、依仰付

大外記、

〔維摩會講師研學豎義次第〕四年、戊戌、講師林懷、年四十八、藤卅四、宣正月九日請、伊勢

國渡會郡人、大中臣氏、母京戶宮仕女、眞喜、法相、去年十二月廿六日宣、興福寺、勢

僧正弟子、十二歲參入眞喜已講之許云々、研學、義慶、年三十一、興福寺、勢

使、藏人、辨、爲任、

〔三會定一記〕一 同四年、長德、勅使藏人辨爲任、喜多院大中臣氏、四十八、宣、法相、興福寺、豎義、義慶、廿八、次、

長德四年十月三日 十日

二〇一

月填星ト
同宿ス

月食

講師林懷

貴朝、東大

〔僧綱補任〕

〇三興福寺本

同四年、戊講師林懷、去年十二月廿六日宣旨、堅者

義慶、(朱書)法修、(朱書)廿七嚴瑠、東

結政、四品樂子內親王及ビ無品盛子內親王薨奏、

〔伏見宮御記録〕

權記一

十月十日、

略、中著結政、先是平納言就廳有政、右大辨

同著廳、晴儀、了就南所、此程事辨候申置、了入內如常、今日有內印、掌侍親子奏

之、中納言令右中辨說孝、奏故四品樂子內親王、無品盛子內親王薨奏、子四刻

服御錫紵給、(蓋野)昨大外記善言朝臣、申明日可薨奏、案內、仍示右、召光榮朝臣、

令申云、不可避院御喪日、依本條無所指之故、仍令右、今日刻限已至供御座、於

殿北廊、(惟也)掃部寮立廻御屏風二帖、時刻出御、兵部大輔實成朝臣供御帶、御直衣、

下襲、盛柳、即返給、須令候內藏寮、然而便置藏人所、

十二日、候內、除御錫紵給事、其所如一昨、但昆明池御障子北殿設御祓御座、宮

主候承香殿西庇、雨儀、

〔日本紀略〕

一條

十月十日、乙未、有薨奏、(可尋)誰人、

左大臣道長、紫野栗栖ノ競馬ニ臨ム、

應政 内印 御錫紵ヲ著ケ給フ 出御 御錫紵ヲ除キ給フ 雨儀

桃園ニ方遊ス

〔伏見宮御記録〕

權記一

十月九日、早朝從大僧都許被示送云、左府今夜爲違

方、可宿桃園給者、即報示、今日依日次不宜不參拂曉、可參之由、參內、候宿、

十日、鷄鳴詣桃園、早朝、(惟也)平納言被參、暫之、(惟也)紫野栗栖給、有競馬事、依命候車

後、暫之還給、(惟也)殿與藏頭同車、亦參內、

〇道長、方違ニ依リテ、桃園ニ徙ルコト、便宜合敘ス、

〔參考〕

〔拾芥抄〕

(中末)諸名所部二十

桃園(一條北)卿家、行成卿傳之、

十一日、(丙)殿上人等、醍醐寺ニ詣ス、

〔伏見宮御記録〕

權記一

十月十一日、殿上人々相共詣醍醐寺、

十二日、(酉)右近衛中將從四位上源宣方卒ス、是日、其七々日忌ヲ行フ、

〔本朝文粹〕

(十四)追善

願文下

爲右中將源宣方四十九日願文

江匡衡

女弟子敬白、妾五内如割、一心已迷、仰願大悲照我幽憤、所天故右親衛中郎將、器期青雲、名顯紫闈、居武官而威風遠扇、嗜文道而詞露自鮮、夙夜在公、非正不蹈、寢寐念佛、唯善是勸、而寢病無程、即世太速、天之與善、從茲難信、神之禍謙、又

長德四年十月十一日 十二日

二〇三

七々日忌ノ宣方室願文

佛像ヲ圖
繪シテ法會
ヲ行フ

藤原行成
宣方ノ巨勢
忌ニシテ
廣貴ヲシテ
テ不動尊
像ヲ畫カ
シム

宣方室ニ
贈ル

藤原顯光
ノ甲歌

藤原公任
ノ甲歌

長徳四年十月十二日

亦如何、妾追憶乎昔、莫不鎖魂、窓中堆詩書、舒卷罷而塵空、積臺上留絲竹、音曲盡而風獨悲、故劍在傍、撫秋水而流淚、虛弓倚壁、向曉月而斷腸、爰四十九日忌、景已至、松蘿之契、於今相違、菩提之飾、隨分欲訪、奉圖繪云云、迺於平生之舊寢、聊開供講之梵筵、簾帷不改、幡蓋惟新、合掌爲花、善心爲香、嗟呼北芒新墳、已見七尺之花樹、西方極樂、定登九品之蓮臺、既云香緣、何隔阿鼻、敬白、

長徳四年十月十二日

〔權記〕

長保元年八月廿三日、癸酉、略此日招采女正巨勢廣貴、示今日可奉

圖不動尊像之由、是則爲故宣方中將也、中將年來親昵相語人也、去年病疫夭亡矣、中將存日、送廣昏一張請予手迹、雖無臨池之妙、爲不乖彼雅意、將以下筆之間、年月自移、當彼逝去、仍尋平生歸依之尊像、奉令畫圖、聊亦欲注其趣、廿六日、丙子、（家）國平朝臣來、令廣貴圖不動尊像、自書由趣於尊像下、付惟風朝臣送故中將內方許其詞云、予與故右親衛源次將素友善焉、昔以色昏一枚授予、乞以手迹、劇務纏牽未及書之、去年仲秋、次將既殞、嗟乎哀哉、芳談猶留於耳中、花紙徒在篋底、夫不動明王者、大悲弘願之尊也、逝者平生常歸弟子、造次不忘、是大因緣也、非善知識哉、故令人圖形像於此昏、手自書由緒於其下、抑生々加

二〇四

護本誓是特請、當一周以導九品、昔季札心許劍懸徐栢之煙、今弟子淚零賤黠楚竹之露、德也不孤、廻向一切、于時長保元年八月廿六日、舊友某記此趣、令美濃守爲憲朝臣草之也、中心所思不叢睦、所謂書不盡言者歟、

〔拾遺和歌集〕

哀傷 右兵衛佐のふかた、まかりかくれにけるに、おやのも

とにつかはしける、

（顯光） 右大臣

こゝにたにつれ、となく郭公ましてこゝのもりはいかにそ

〔新古今和歌集〕

八傷歌 世中はかなく、人々おほくなくなり侍ける比、中

將宣方朝臣身まかりて、十月はかり白川の家にまかりけるに、紅葉の

一葉のこれるを見つけて、

前大納言公任○前大納言公

さはかもしかり方にし、河にわたり給ふる人、おほくなく、このりて後、神無

月のつこしかり方にし、河にわたり給ふる人、おほくなく、このりて後、神無

ひけて、常にもみつとあり歌、なとおほく給ひける源中納言○納言

〔前大納言公任卿集〕

をみにさゝれ給ひて、のふかたの中將のふくなるに、

長徳四年十月十二日

二〇五

長徳四年十月十二日

二〇六

雲の上の光もいか、遠ければ猶ほしかたし墨染のそて
かへし

晴すのみしくる、方を眺むれば光もくもる物にそ有ける

〔尊卑分脈〕

源宇多氏

重信 左大臣、正二位、
號六條左大臣、

宣方 從四上、左中將、
母左大臣高明公女、

親方 右兵衛佐、從五下、
母元信女、

世系

〔清少納言枕草子〕

○上 宮内省圖書寮本

とは、かん院の左大將の女御をそきこゆる、その御かたにうちふしといふ物のむすめ、左京といひてさふらひけるを、源中將かたらひてなんと人々わらふ、宮のしきにをしまいしにまいりて、とき／＼はとのゐなともつかうまつるへけれど、さへきさまに女はうなともてなし給はねは、いのみやつかへおろかにさふらふこと、とのゐ所をたにたまわりたは、いみしうまめにさふらひなんといひゐたまへれば、人々けになといらふるに、まことに人はうちふしやすむところのあるこそよけれ、さるあたりには、

宣方ト清少納言ヲ語ラフ

宣方ノ不平

清少納言ノ非難

しけうまいり給なるものと、さしいらへたりとて、すへて物きこえし、かた人とたのみきこゆれば、人のいひふるしたるさまにとりなし給なめりなど、いみしうまめたちてえし給を、あなあやし、いかなる事をかきこえつる、さらにきゝとかめ給へきことなしなといふ、かたはらなる人をひきゆるかせは、さるへき事もなきをほとほりいて給やうこそはあらめとて、はなやかにわらふに、これもかのいはせ給ならんとて、いともものこと思たまへり、さらにさやうのことをなんいひ侍らぬ人の、いふたににくき物をといらへてひきいりにしかは、後にもなほ、人にはちかましきこといひつけたりとうらみて、殿上人笑ふとていひたるなめりとの給へは、さてひとりをうらみ給へきことにもあらざるにあやしといへは、そののちはたえてやみ給にけり、

〔清少納言枕草子〕

○中 宮内省圖書寮本

心ちよけなる物

○上 藤原清少納言ト藤原齊信

三月二十三日、長元八年、みなねてつとめて、いとくつほねにおもたれは、源中將の聲にて、こゝ草のいほりやあると、をとろ／＼しくいへは、あやし、なとてか人けなきものはあらん、玉のうてなともとめ給はまじかはい

宣方清少納言ヲ訪フ

長徳四年十月十二日

二〇七

宣方昨夜ノ顛末ヲ語ル

人々清少納言ヲ試ム

宣方ノ賞讃

らへてましといふ、あなうれし、しもとありけるよ、うへにて尋んとしつるをとて、夜へありしやう、頭中將のとのゐ所にすこし人々しきかきり、六位まであつまりて、よろつの人のうへ、むかし今とかたり出ていひしついでに、猶此ものむけにたえはて、後こそ、さすかにえあらね、もしいひ出る事もやとまでと、いさゝかなにも思ひたらず、つれなきもいとねたきを、こよひあしともよしとも、さためきりてやみなむかしとて、みないひあはせたりし事を、たた今は見るましとていりぬと、どのもつかさいひしかは、又をひ返して、たゝ手をとらへて、どうさいせさせず、こひとりてもてこさすは、文を返しとれといましめて、さばかり降雨のさかりにやりたるに、いとく返りたり、これとてさし出たるか、ありつるふみなれば、返してけるか、とてうち見たるに、あはせてをめけは、あやしいかなる事そと、みなよりてみるに、いみしきぬす人を、猶えこそ思ひすつましけれとて、みさわきて、これかもとつけてやらむ、源中將つけよなど、夜更くるまでつけわつらひてやみにし事は、行前も語り傳へき事なりなど、なんみなさためしなど、いみしうかたはらいたさまていひきかせて、御名をは草のいほりとなんつけ

二十二日、御修法、

たるとて、いそきたち給ひぬれば、○下略、橘則光、清少納言ヲ訪フコト、ニカ、ル、長元七年是歳ノ條ニ收ム、

〔伏見宮御記録〕

權記一 十月廿二日、京官除目議、○中今日饗、依當御修法間、

可設精進、而用魚味誤也、

○御修法ノコト、始終詳ナラズ、

二十三日、京官除目、

〔公卿補任〕

參 議正四位下藤公任 十月廿三勘長官

從三位藤懷平 十月廿三日任、

前中納言從三位藤隆家 十月廿三兵部卿

參 議從四位上源俊賢 勘長官、伊豫權守、十月廿六日辭長官、任修理大夫、三十九

〔公卿補任〕

六 寬弘元年 參議正四位下藤正光 (長徳) 同四十廿二大藏卿

〔公卿補任〕

六 寬弘二年 參議正四位下源經房 (長徳) 同四十廿二左中將

〔公卿補任〕

六 寬弘五年 參議正四位下藤實成 (長徳) 同四十廿二右中將

〔公卿補任〕

六 寬弘六年 參議正四位下源頼定 長徳四十廿二右中將

長徳四年十月二十二日、二十三日

長德四年十月二十三日

二一〇

〔公卿補任〕

長和二年

參議正四位下藤公信

同四十四廿三右兵衛佐、

〔公卿補任〕

寬仁元年

參議正四位下藤資平

十月廿三日侍從、

〔公卿補任〕

寬仁三年

參議正四位下藤經通

同四十四廿三右兵衛權佐、

〔公卿補任〕

寬仁四年

參議正四位上藤廣業

同四十四廿三近江權大掾、

〔辨官補任〕

○柳原家記
錄六十所收

左大 辨正四位下藤忠輔、

五、十月廿三日轉、○公卿補

右大 辨從四位上藤行成、

七、十月廿三日轉、○公卿補、長德三年十月二十
二、一代要記、同、十月二十

十六日、
作九、

左中 辨

高信順

十月廿三日轉、

權左中 辨正五位下藤說孝

十月廿三日轉、

右中 辨

藤爲任

十月廿三日轉、

左少 辨

源道方

十月廿三日任、○公卿補

〔外記補任〕

二

權少外記菅野重忠

十月廿二日少外記、

慶滋爲政 長德四年月日方略試、同年十月廿二日任、

方略試

〔除目大成抄〕

當十職 秋京官
長德四春 宮內丞源道濟、

春秋共任例、
秋 彈正忠藤正直、

〔除目大成抄〕

臨時給 外國一
臨時給 內給

同四

甲斐權少目正六位上六人部宿禰茂

興、臨時給、
臨時內給

正六位上六人部宿禰茂興

望諸國目、甲斐權少、

長德四年十月二十七日

〔除目大成抄〕

更任 春外國二
更任 三重更任

長德四秋

土佐權少目正六位上東部宿

禰材君、故太政大臣任、而不給任符秩滿、仍更任、

秩滿、隔人更任也、私案、

可勘合不

故太政大臣家

正六位上東部宿禰材君

右去天元四年給、以伴材君任土佐權少目、而依身病不赴任之替去、年
以日置久忠改任、亦稱非本望、不給任符秩滿、仍以材君可被更任之狀、所請

長德四年十月二十三日

二一一

臨時內給

更任

長德四年十月二十三日

如件

長德四年、
長德四秋

〔除目大成抄〕

七局 春京官二
忠、右廳直
史生、直

長德四秋 大舍人少屬正六位上海宿禰繁

〔除目大成抄〕

七連奏 春京官二
連奏 春京官二
道連奏

長德四秋 主計寮

少允正六位上御船宿禰昌光

大屬 丹生宿禰益光

少屬 船 宿禰理遠

〔除目大成抄〕

八課試及第 春京官三

無尻付例

長德四秋 少外記慶滋為政、

課試無尻付例

長德四秋

少外記慶為政、
治部丞菅師長、
權本波本
大攝攝丹
兼津

〔魚魯愚抄〕

七兼國勘文 兼國自解

從五位下行造酒正源朝臣重誠惶誠恐謹言、

課試及第

主計寮

昇殿

御匣殿別當

請殊蒙天恩准先例被兼任備中前備後等國權介闕狀、
諸司長官兼國例、○中

藤原遠理 長德四年十月任雅樂頭、○中

治安二年正月廿二日 從五位下造酒正源朝臣賴重

〔中古歌仙三十六人傳〕

大江匡衡

長德四年
十月廿三日昇殿、

〔清少納言枕草子〕

○宮內省圖書寮本

はるかなるもの○本文
略ス、

〔清少納言枕草子〕

○宮內省圖書寮本

〔清少納言枕草子〕

○宮內省圖書寮本

たのもしき物○本文
略ス、

源成信

兵部卿致平親王男、母左大臣雅信女、長德四年十月右中將、元民部

大輔、

〔伏見宮御記錄〕

○權利一

十月十日、○中 今日下給御匣殿別當藤原尊子申請

預伴美子文、仰云前日令信經仰下、是前別當時事也、隨別當請補之、仍停前日

所下、重更所下給也、件宣旨可仰內藏寮也、

廿二日、京官除目議、行事藏
人廣業藏人中書承勅召公卿、今日饗、依當御修法間、可設

精進、而用魚味誤也、

長德四年十月二十三日

長德四年十月二十三日

二二四

廿三日、丑刻除目了、轉任右大辨、左中辨勞三年、于時年廿七、年未及卅、任大辨者、貞信公、廿一、八條大將、年廿而已也、夜奏慶、亦啓東宮、亦詣左府、亦詣新宰相殿、申御悅由、廿五日、參皇后宮、依召參內府、亦參太皇太后宮、歸宅之後、權左中辨爲慶賀來、同車詣左府、參內、

廿八日、癸丑、略、○今日民部卿被下除目云々、

〔日本紀略〕院一條 十月廿二日、丁未、京官除目、

竟

廿三日、戊申、同竟、

〔小右記目錄〕京官除目事 同十月廿二日、除目議事、

同廿三日、除目、

同廿六日、除目下名、公卿不參、延引事、

同廿八日、除目下名及五箇日事、

〔敍位除目執筆抄〕同四十二京官、廿三日、入眼、執筆、右大臣顯光公、左大臣兩日參入、

〔除目大成抄〕所々藏人、春京官三 長德四秋、主計少屬正六位上酒部公方光

東三條院應藏人

東三條院應藏人正六位上酒部公方光誠惶誠恐謹言、

酒部公方光ノ申文

延引

下名

執筆

請被殊蒙天恩、因准先例、依年勞恪勤、并任主計主稅屬等闕狀、

身勞十三箇年

右方光謹檢案內、從宮初之時、忘私勵忠、專載星霜、夙夜奔營、恪勤之節、頗勝傍輩、于茲居院宮藏人史生者、不經幾年、遷拜諸司主典、蹤跡寔存、近則御宮初史生、竹田利成、任內藏屬、日置利正、任修理屬、當院之今、藏人大春日理忠、掃部屬、以往之例、不違毛舉、仍每有其闕、謹經上奏、而天聽難通、宿望未遂、獨非後輩之愁、兼有失先蹤之慙、望請殊蒙天恩、因准先例、年勞恪勤、被拜任件闕、將勵奉公之節、方光誠惶誠恐謹言、

長德四年十月廿二日 東三條院應藏人正六位上酒部公方光

〔政事要略〕六十九、致敬拜禮、下馬事、九、兵部卿座次事

獄令云、流移人至配所、六載以後聽仕、義解云、謂仕者仕官、即所貫及京師皆聽通仕、說者云々、流人至配所、六載以後聽仕、此是任意之德、聽名例律云、犯八虐、故殺人、反逆緣座獄成者、雖會赦、猶除名、疏云、如特奉鴻恩、總蒙原放、非常之斷、人主專之、官位勳位、並合如初、式部式云、前參議以上、被召見參及預朝參者、致仕者在本位見任上、以理解者在同位下、選敍令云、長上官以理解者、後任日聽

長德四年十月二十三日

二二五

藤原行成
令宗允亮
ヲシテ藤
原隆家ノ
申次ヲ勤
申セシム
ノ條及ビ
式

允亮ノ見解

通計前勞其考解及犯罪解者不用此例義解云其以理解官總有七色致仕考滿廢官省員充侍遭喪患解是也又式部式云非執政二位者列中納言之下三位參議之上三位者四位參議之上

三位參議ノ下四位參議ノ上ニシテ列スベシ

案此等文被流移可仕官之期章條云其特奉鴻恩蒙原放之輩官位合如初爰兵部尙書坐事貶謫矣但帶本位而赴配所降特勅而歸京師即拜當職亦聽昇殿若依經中納言欲序行列則非致仕以理解之者更爲除兵部卿欲定座次亦是犯罪并前勞之類也疑已縱橫事難評議然猶盡理不可點今逢非常之斷霑當時之恩豈拘尋常之法論往日之咎哉抑雖有官未任公卿准據式條可謂非執政三位也仍須列三位參議之下及四位參議之上

長保三年二月廿六日藏人頭者右大辨藤原朝臣（兼力）行成示云兵部卿藤原朝臣（隆家）依奉射危等殊有所念謫出雲權守（停權中納言謫件官位猶帶從三位）爰召還之後任兵部卿兼聽昇殿座次如何者以此文奉之

二十四日（西）弓場始

〔伏見宮御記錄〕

（利一）權記

十月廿四日早朝詣（公等）內府參冷泉院詣內府詣東

（三）修

出御

院參華山院東三條院亦詣（直長）左府（此殿去夜申悅了）次參內弓場始也納言以上一人不參入（忠輔）夜左大辨參入頃之宰相中將修理大夫參入（源俊實）昨今陣物忌座當人不參雖參不著陣座被候殿上仍出御之後不待召出自無名門著座（晴）應召（階）上參進（階）新任中將（賴定）實成雖未著本陣座候出居辨（孝）爲所掌限三度無中科者此夜宿侍先例近衛兵衛佐等後也而依可然人不候以藏人的著之例被相定所奉仕也

僧綱召權大僧都穆算ヲ園城寺長吏ニ補ス

〔僧綱補任〕

○三興福寺本

權大僧都實因（長德四年）十月廿四日轉正

觀脩 同日轉正

小僧 都穆算 十月廿四日轉任權大僧都

權律師尊叡 十月廿四日任天台宗延曆寺

（朱書下同）深覺（冊四）同日任眞言宗東寺雅慶僧都入室右大臣師輔息男（守朝已講弟子）清範（冊七）同日任已講勞法相宗興福寺播磨國人大和氏

〔東寺長者補任〕

長久四年

長者前大僧正深覺 長德四年十月廿四日任

權律師（元內供）東大寺別當（仁）次第等（諸院家記）同

長德四年十月二十四日

治二箇月

〔園城寺長吏次第〕第十二穆算 大僧都餘慶弟子長德四年十月任之、

〔寺門高僧記〕一 穆算大僧都寺一乘 長德四年十月補長吏時大僧都治二箇月

〔小右記目錄〕五京官除日事 同廿三日略○中次僧綱召事、

〔伏見宮御記錄〕利一權記 十二月十四日略○中先日所任僧綱內供等宣命未讀、

須給官符、

二十九日甲寅前大僧都覺慶ヲ天台座主ニ、阿闍梨院源ヲ法性寺座主ニ補ス、

〔日本紀略〕院一條 十月卅日乙卯宣命以前大僧都覺慶爲天台座主、

〔伏見宮御記錄〕利一權記 十月廿九日甲寅略○中依召參院略○中又命云令朝經

朝臣申法性寺座主可補院源之由去秋所被仰下今可令候官符之由而被仰以前大僧都覺慶可補天台座主院源事依有僧都實因之略申事相定可被下之由抑此事先日承仰已了而今爲仰下內々令申事由之處仰旨如此若有難澁御氣色歟有事次見氣色可示了之更不具記即參內申院御消息仰云尤可然事也早可仰下者也即奏只今上卿不參右大將藤原朝臣候院使可仰歟仰云有便之事也依請亦仰云暫可候者因仰祇候畫御座奏左大臣令申之旨仰旨相違

實因ノ愁申

東三條院ヲ御消息ヲ奏ス

天台座主宣命

事之案内實因之怨只以不補也院源宣旨已而無由還亦不被仰下者爲覺慶失本意爲院源極恥辱之趣也仰云爲聞所申所令仰也山座主事令達可仰他上之由如何事哉奏云內大臣已參入被仰下有何事哉法性寺事初已被仰案內今朝遣仰之旨異於先日之趣如此數日延引者必可被補者雖經暫間結鬱無端還亦結鬱不被採用遂可成恨之者暫間係念爲公私共無益事也早可被仰下一定歟仰云覺慶讓狀已收了收其狀何有任他人乎但實因愁申之旨非無由緒歟爲聞食定申旨令仰相定可下之由也今大臣令申之旨可然可以院源補法性寺座主覺慶辭讓替之由可仰下即奉勅命略○中今日以前大僧都覺慶爲天台座主、

卅日乙卯略○中內大臣於弓場殿令權左中辨說孝奏天台座主宣命未被奏之前大臣於陣腋被示云例宣命不奏草此宣命同不可奏申云此可謂例宣命猶可奏草也大臣不承引給還宅檢先例康保三年秋御記云奏草仰云依案所申相合愚者一得歟此夕參院、

〔座主宣命〕第廿三 覺慶大僧正 長德四年十月廿九日補

宣命云 使少納言源伊賴 或本兼親、

長德四年十月二十九日

二二〇

天皇 我詔 無別事、

〔華頂要略〕

天台座主記二

第二十三前大僧都覺慶東陽

治山十六年納

言伊望孫、大和守從四位下平朝臣理善、子師主慈念、僧正、慈惠、大僧正、受法弟子、長德四年戊戌十月廿九日座主宣命、

年七、勅使少納言藤原兼親、同十一月到來、於東陽房受印鑑、

〔僧綱補任〕

〇三興福寺本

大僧都覺慶 十月廿九日拜天台座主、

〔門葉記〕

〇八十一山城 雜決六

法性寺座主次第

院源 閣梨、長德四十卅日、

〇歷代編年集成、皇代曆、法中補任、僧官補任、東寺文書等、異事ナキヲ以テ略ス、

結政、是日、美濃ノ解文ヲ奏ス、

〔伏見宮御記録〕

權利一

十月廿七日、壬子、物忌不出門戶、只相逢外宿人、招光

榮朝臣、令擇可參結政日、云、明後日甲寅吉也、

廿九日、甲寅、已刻就結政、官掌近吉供火鑪、左少史元倫申文三枚、甲斐、越中、山、國、申、鈞、文、少

外記爲成、申馬料文、訖之間、權左中辨說孝、訪來、右大史守永申文始例、史生明義取署於

季祿文、有頃官掌作法如例、余起座出立如例、依晴、儀也、宰相中將自左衛門陣下、立

申文

馬料文

季祿文

羞饌

屏下如例、參內之後、更與權辨著南所、源少納言、伊頼共著、羞饌如例、立箸之後、登時置箸、亦參內候御前、次奏美濃國絹解文、

東三條院、一條院ニ遷御アラセラル、是日、同院別當ヲ補シ、左大臣道長

ノ室倫子ヲ從三位ニ敍ス、

〔伏見宮御記録〕

權利一

十月廿九日、甲寅、〇中依召參院、仰云、年來御座左大

臣土御門家、亦月來御此一條、依有先例、欲給爵賞於大臣室家之由可奏、又給

三位階如何、其由同加用意可洩申者、依不知御名、詣彼殿案內、丞相命云、名倫

子元從五位上、〇中即參內、申院御消息、仰云、尤可然事也、早可仰下者也、即奏、

只今上卿不參、右大將藤原朝臣候院使可仰歟、仰云、有便之事也、依請、〇中先

參院、奏御返事旨、大臣室可敍從三位之趣也、仰云、此趣可仰左大臣、承此仰之間、大臣被參、

便申事由了、院亦被仰云、猶罷彼家可仰者、仍詣彼殿、令右近權中將成信、傳申

北方、成信傳被悅申之由、又有祿物、女裝束、亦參院、令啓仰了之由、近江介則忠、

示云、被補院別當者、即令啓慶由、一兩卿相被參、此夜遷御一條院、依家主、卿君、

臣所買進也、直八千石云々、月來御座左大臣一條第、大臣聊設酒饌羞、參入卿相以下亦供

御膳、紫壇地臺、平中納言陪膳、殿上人傳供、又有御送物、御念珠管、余執、御裝束

長德四年十月二十九日

二二一

東三條院
倫子ノ奏請
シ給フ

一條院ヲ
八千石ニ
テ買フ
道長饗饌
ヲ設ク
御送物

長德四年十月二十九日

二二三

新宅作法
打攤

管二合、教忠朝臣、兼銀手洗瑠璃水瓶、爲盛朝又有大破子二懸、各納綿遷御有新宅作法、余供御膳今夜饗諸司儲之、有碁手、紙左大臣以下打攤之戲
事了各退出、

〔中右記〕 永久二年二月十一日、略中女加階超越例、

鷹司殿、

〔長德四〕同年十月廿九日敍從三位、

〔台記別記〕 三 久安四年八月五日、庚申、略中今日夫人幸子敍從三位、略註

長德二年十月廿九日、鷹司殿敍從三位之例也、

十一月 丙辰 朔盡

三日、戊午結政、

〔伏見宮御記錄〕 權利一 十一月一日、丙辰、略中又參衙、〔參衙〕權辨亦參、〔清原〕史元倫申文

二枚、略下

申文
官掌以下
祿ヲ給フ

三日、今日官掌以下、依例可給祿、辰刻許詣左府、〔參長〕參內之間、結政了、辨候出官掌、〔召力〕申時之程也、仍立留、此間小雨、〔忠輔〕左大辨、〔爲臣〕右中辨、今日初參、出立用晴儀次第入內、

辨候申直、〔辨〕右中頃之右大史守永欲申文、左少史元倫來、取左大辨前床子、更立

余前、〔行成〕退復本座、次守永來搢笏、寄置申文於床子、却座、次不取上文、乍置床子、引

展懸、〔行成〕搢遣三枚書於端方、隨見了置之、左方乍三枚見了、推卷置床子、〔取返本〕乍立結申、隨許、

白床守永來搢笏、寄取文、少退拔笏還本座、床下搢笏、置文床子、〔取返本〕乍立結申、隨許、

稱唯、而置文、如此三度了、卷文、〔多米〕執副笏居床子、登時還南、以右史生川清澄爲廳

直史生之由、左大辨相共定之了、〔多米〕國平朝臣奉仰、〔書左大辨〕以笏給官掌、參上殿

上、〔或置〕依召參朝、于飯御座供奉御理髮、依召詣左府、歸宅與右中辨同車也、〔日〕

著座、〔殿〕東面、〔對座〕西上、又官掌辨候等給座、〔官掌座〕東廊西面、〔廊南〕二獻汁杓、三

廳直史生
ヲ補ス

長德四年十一月三日

二二三

長德四年十一月三日

二二四

獻立箸主計頭忠臣勸盃之間北座第一左大史奉親宿禰起座退下長押下、人
云、希有事也、勸盃左中辨右衛門權佐、宣孝、左兵衛權佐、能通、等來、又有兩大夫、
四巡之間、給新官掌四人、各白絹一疋、五辨候二人、亦各一疋、辨候官掌退出、頃
之、史等退出、次東令大夫逢、聊羞酒秉燭事訖、各退出、

四日、己未、參內府、略、中次參結政、史不參、仍參內、次亦參內府、今朝依有可必參
還之命如、但不著殿上人座、故中納言常被示非參議大辨不立衆之由、仍不著
也、歌舞之間、還參內秉燭之後、使參弓場殿、有可出御前之仰事、此間供夕膳、待
撤御膳、即垂御簾、藏人泰通奉仰、召使實成朝臣、入自仙華門、候長橋、敷、舞人
陪從立仁壽殿、砌內歌舞、求子之間、賜衝重於使、豫仰泰通令設也、予勸盃、泰通
取酌舞了之間、大藏卿給御衣於使、々給之拜舞而退出、
五日、庚申、參結政、無史入內、略、頃之亦參結政、史奉親宿禰一人參、仍亦不著
退出、參院、詣彈正宮、左府、歸宅、又參內、宿侍、

十四日、參結政、今夕亦參內、
十五日、自內參結政、平中納言著應、右晴儀也、左少史元倫申文五枚、大宰府申
與權少貳紀朝臣定興解由文、神護寺年、文、伊豆班符文、神祇官申春日社

預殖栗時正讓文、同官申伊勢鈴鹿郡野邊社文、文東收後、奉親宿禰置可申南
文三枚、予未參前左大辨爲著廳先令結、而今予後來、仍又欲結之、右中辨爲任
被氣色不更結、共是先例也、廳事了上卿著南官掌作法如例、起座出門、先揖外
記史、次向坤方、斜行到左衛門陣、北架南與架午頭、去東一許丈立留、遙揖辨、立
樹下也、入內著陣腋床子、即亦參殿上、罷出詣藤相公御許、兵衛佐初參樂所、相
共參左府、次參內候宿、

十六日、自內欲著結政、々々了入內、
十九日、略、中參結政、今日左少辨道方朝臣初參、左少史延、
之、次左大史國平朝臣、又執文刺、
政就、
以初稱文刺之文申左少史、仰延政天文、
例可申之由、
廿六日、自內參結政、史奉親宿禰一人參、仍不申文、詣左府、
廿九日、參結政、無人、仍參內、
○四日以後結政ノコト、便宜合敘ス、

長德四年十一月三日

二二五

五日、庚申、平野祭、春日祭、御物忌、

〔日本紀略〕院一條十一月五日、庚申、平野、春日祭、

〔伏見宮御記錄〕權記一十月卅日、乙卯、參左府、奏可參春日祭氏人交名、即給

爲義朝臣、遣召外記重忠、爲給件差文也、

十一月一日、丙辰、早朝、史元倫申春日祭屋形車、

四日、己未、參內府、令右藤中將爲春日祭使、仍爲□申參向也、

五日、庚申、略中依御物忌、不參殿上、略中今日平野祭、使阿波權守濟政、去夕不

籠御物忌、仍宿侍人木工權頭近信、御禊間候庭中座、平中納言參、奏宣命、給使、

六日、自內退出、晚景參內府、訪祭使還饗事也、入夜使歸、歸二條、新少將來宿、

廿三日、御物忌也、

廿四日、依御物忌、不御中院、

〔春日祭歷名部類〕長德四年同年十一月五日、庚申、祭、

○二十三日、二十四日、御物忌ノコト、便宜合致ス、

筑前觀世音寺、雜事三箇條ヲ大宰府ニ申請ス、

〔觀世音寺文書〕○內閣文庫所藏

春日祭ノ屋形車
春日祭使
平野祭使
祭使還著

兵馬所ノ三佛常燈料田押領
ヲ判斷セ
トヲ請フ

大貳藤原文章
大宰府牒
兵馬所請文

政所院料
秣田畠

〔下〕大帳所兵馬可勘申

觀世音寺牒 大府 衙

雜事

一請被判斷三佛常燈料田柒町佰捌拾步、號兵馬田取妨事、

左郭九條十二防四段〔坊下同〕 廿二條三防八段 三防內三段

右郭十六條八防三段 廿條三防七段百八十步 七防八段 廿一條二

防八〔段脱カ〕 三防八段 六防八段 廿二條二防八段 三防八段

右去天延三年十月十一日大貳藤原朝臣〔國基〕御施入并府牒文〔常脱カ〕住大悲觀音

并新造藥師、十一面延命等四體尊像常燈分、施入如件、寺察之狀、自明年春

執行奉宛、庶幾至于盡未來際、常念挑此燈明者、又同年月廿四日兵馬所進

府符請文、去十月廿日符〔符〕到來、伴田觀世音寺常住大悲觀音、并新造藥師

十一面延命四體尊像等常燈分料、以今月十一日施入已下所宜承知、自來

天延四年春不可領知、但政所院料、先年所割度秣田十町、秣畠等、依停止、彼

院如本猶所之可領也、其內十六條八防三段、廿一條二防八段、六防八段、廿

二條二防八段、三防八段、并四町三段、在此施入之內、除此之外、既可返領、所

長德四年十一月五日

八日、亥檢非違使別當藤原公任、法師某濫行ノコトヲ奏ス、

〔伏見宮御記録〕權記一 十一月八日、昨今物忌也、惟風朝臣來云、藤中納言息

藤中納言
息ノ法師
藤原濟信
ノ牧童
關亂ス

法師狂惡者也與宰相中將宅牧童相鬪、童被疵北走、法師追之、入中將宅、童北而去、

法師走上廊、更追中將、于廊中將也則光朝臣慮外來會捕法師、即令忠親朝臣送

九日、伊勢例幣、

〔日本紀略〕院一條 九月十二日、丁卯、伊勢例幣延引、依上卿不參也、

延引
八省院行
幸

十一月九日、甲子、奉遣伊勢例幣、天皇行幸八省院、

〔伏見宮御記録〕權記一 十一月一日、丙辰、略中平中納言參內、權左中辨仰納

言云、去九月例幣延引、于今令擇申其日、

九日、早朝參內、行幸八省也、依去九月例幣延引、今日被奉遣也、未刻出御南殿、

御輦候日華門不進、尋問其由、依左次將不候也云々、有勅、宰相中將供奉、新任

少納言朝典、昨日初參、欠日也、今日候、人奇之、此夜宿侍、

十六日、辛未丹生、貴布禰二社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕院一條 十一月十六日、辛未、奉遣丹貴二社幣使、

霖雨

〔伏見宮御記録〕權記一 九月一日、雨、略中即參陣外云々、招藏人、頃之內記藏

人、中尹出來、略中次示左大臣令奏之旨、仰云、略中又仰云、日者霖雨久以不霽

計也、秋收定不快、歟、因例欲奉使於丹生、貴布禰社、十一日被立之例、可令勘申、

承仰罷出、詣相府申其由、

十一月一日、丙辰、略中平中納言參內、權左中辨仰納言云、略中略、伊勢例幣日

ハ、ル、本月九日、亦為祈年穀、去秋欲奉幣於丹生、貴布禰、同可令擇申納言、即仰

辨云々、召陰陽寮參院、

後院預及ビ修子内親王別當等ヲ補ス、

〔伏見宮御記録〕權記一 十一月十六日、略中結政了入内、仍不著、勅云、主殿助

藤原賴明、蔭孫同貞光為藏人所雜色、中務少錄尾張如時為出納、以菅原為職

臣、左大為後院預、以內藏頭陳政朝臣為修子内親王別當、此由先仰左大臣可仰

下、略中即仰國平朝臣後院預、修子内親王一宮別當等事、次詣新宰相殿、次參院、此間左府

參中宮給云々、仍亦參職御曹司、中宮御次參內、次左府出給候御共、此夜歸三

條、

廿五日、略中以右近府生下毛野公奉為御鷹飼之由、依勅仰出納允政撰朝臣

藏人所雜
色

道長中宮
ニ參ル

御鷹飼ヲ
補ス

長德四年十一月十七日 十九日

不勤事之替也、

十七日、壬申吉田祭、

〔日本紀略〕院一條 十一月十七日、壬申吉田祭、右馬寮神馬俄斃、仍以左馬寮

行之、

十九日、甲戌左大臣道長ノ男鶴君通、二童殿上ヲ聽ス、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十一月十九日、○中道長詣左大臣殿、鶴君以可昇殿、依相

府命、書名簿二枚、一枚東宮料、一枚內料、即給予爲奏聞也、大臣參內給、候御共、即奏名簿□下給、

即下出納允政、令權左中辨藏人付簡、小舍人蔭、藤原朝臣賴通、

〔中右記〕嘉承二年四月十日、

長德長德四年宇治殿童殿上時名簿書樣行成書之、

蔭孫藤原朝臣賴通、

故前太政大臣孫、

長德四年月日

〔尊卑分脈〕藤原氏 賴通公傳 正曆三辰、一誕生、長德四八、昇殿、童、

〔日本紀略〕院一條 十一月廿一日、丙子園韓神祭、

二十一日、丙子園韓神祭、

〔日本紀略〕院一條 十一月廿三日、戊寅鎮魂祭、

二十三日、寅鎮魂祭、

〔日本紀略〕院一條 十一月廿三日、戊寅鎮魂祭、

御前試、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十一月廿三日、○中御前試、丑刻事了、

二十四日、卯新嘗會、

〔日本紀略〕院一條 十一月廿四日、己卯新嘗會、依御物忌、不幸中院、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十一月廿四日、依御物忌、不御中院、

二十五日、辰豐明節會、

〔日本紀略〕院一條 十一月廿五日、庚辰節會、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十月四日、被定仰可獻五節舞姬人々、乘紙筆隨被定

仰書了入筥柳、奏覽如例、訖亦給出納允政、亦各□、

可獻五節舞姬人々

殿上、則忠朝臣、伊祚

則忠近江介當任、伊祚教信信乃、

長德四年十一月二十一日 二十三日 二十四日 二十五日

右馬寮ノ
神馬斃ル

童殿上ノ
名簿ヲ奏

名簿

賴通ノ誕
生

御物忌ニ
依リ中院

舞姫ヲ獻
ズベキ人

定文

長德四年十一月二十六日 三十日

二三四

內大臣

中納言平朝臣

長德四年十月四日

定文之體如此

十一月四日、中略參內、中略勅云、良岑氏子爲五節師、即給名簿、々々注從五位下良岑朝臣氏子、長德四年十一月三日、依宣旨仰其人云、今夜退出、

十日、伊祐朝臣參北陣、令藏人泰通奏依觸穢不可奉五節之由、即差泰通、仰遣左大臣第、以兼資朝臣、可令奉舞姬之由、又仰兼資朝臣云々、

廿二日、昨今依勸學院物忌不出門戶、晚自內有召參入、此夜五節參入、內大臣、馬權頭、式部丞泰通□事之、

廿五日、節會無御出內大臣爲內辨、小忌左大辨一人也、上卿有障不參、內大臣付藏人權辨被奏外任奏、又令余奏大歌、別當不參、以大納言源朝臣、令奉仕之、

□見參目錄、國栖見參宣命等源大納言付內侍令奏、內大臣有所勞、田給也、子三刻事了、
二十六日、辛巳、東宮鎮魂祭、

〔日本紀略〕院一條 十一月廿六日、辛巳、東宮鎮魂祭、
三十日、酉、賀茂臨時祭、

試樂

御馬御覽

御視

舞人藤原經通昇殿ヲ聽ス
宣命
御神樂

神樂ノ藝
木工竿師
依リテ

〔日本紀略〕院一條 十一月廿九日、甲申、賀茂臨時祭試樂、

卅日、乙酉、賀茂祭、

〔伏見宮御記錄〕權記 十一月廿九日、中略參內催試樂事并御覽御馬、○中略

余候東欄、先取、毛御覽了、於殿上尻付之後、令下給試樂、不被仰一舉、只次第舞也、藤宰相、左兵衛督、左大辨被參、事了白地罷出、亦歸參、

卅日、賀茂臨時祭也、經通兵衛佐於宿所裝束、依相公被示、令儲碗飯、依勅雖遣召、納言以上皆申障不參、仍有勅、仰藤相公可奏宣命之由、有例也、御視了所司鋪設并居衝重等如例、□以下就座、一巡藤相公、舞人、大藏卿、陪從二巡左□

□下官、一兩巡後、重舞人座余、泰通六位、陪從座中尹六位、訖給挿頭、使以下退去、入御、此間勅經通免昇殿、次亦出御、歌人等不待召歌○此間、闕進立架邊、非

例也、次仰一舞、宣孝、駿河舞後奏宣命、次求子、事了與相公同車見物、亦還參內、

子二刻使等歸參、有御神樂事、依承事、□年例、召輕服、成信中將、道方辨等、應召參入、經通昇殿事奏下、依相公被示也、

十二月二日、參結政、○中略歸宅、藤相公被過、依右兵衛佐昇殿之慶也、
〔小右記目錄〕四 臨時祭 賀茂 同四年十一月廿九日、臨時祭試樂、木工竿師

長德四年十一月三十日

二三五

長德四年十一月三十日

依神樂藝被轉任屬事、
同十二月臨時祭宣命參議令奏事、

十二月丙戌朔

二日、丁亥結政、東宮管絃ノ宴ヲ催シ給フ、是夜、強盜、宣耀殿ニ入ル、

〔伏見宮御記錄〕

權記一

十二月二日、參結政、詣入道中納言御房、申少將明

□（略）

祭使事、歸宅、（中略）入夜、左少辨來臨、同車參內、次□（中略）次參東宮、有絲竹之興、盃

東宮宣耀
殿ニ遷御

酌無算、及深更□或云、宣耀殿有偷兒、取女房等衣裳、儲君驚□遷御彼殿、宮臣

等皆候御共、尋問盜人五人□西面北戶、其所爲盜強云々、于時丑二刻也、即參

御所、奏案内、且遣召檢非違使、又令取諸陣見參、令問諸衛直官人等、

五日、自内著結政、出宣陽閣之間、結政了、左大史奉親宿禰以下入内、即立加著

強盜ノ嫌疑者ヲ放

陣腋罷出、（中略）次詣内府、與藤中將同車、亦參内、

六日、左近案主代秦武扶依盜嫌疑候獄所、而依内大臣被申、奏事由免給其假、

右衛門尉行正奉勅命仰別當云々、罷出參院、左大臣被候、亦候御共、參殿、次歸

宅、

九日、（中略）參結政、參内罷出、詣宰相殿、奉謁北方、

十日、大雪、參結政、官吏掌等不參、

十五日、依召候御前、奏雜事之間、時刻推移、光景既傾、仍不參結政、

官吏掌不

長德四年十二月二日

長德四年十二月三日 九日 十日

二三八

十九日、參結政、今夕參宿參內府、

廿二日、參結政之間、比至左衛門陣之內結政訖、大辨以下入內、白地罷出、

〔日本紀略〕院一條 十二月三日、戊子、去夜東宮女御宣耀殿御在所、城子所有強盜、

〔百練抄〕一條 十二月三日、強盜入宣耀殿御息所、希代事也、

三日、戊子天智天皇國忌、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十二月三日、略今日國忌也、

九日、甲午位祿官符請印、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十二月九日、早朝召保實給祿、白掛位祿官符爲令請

印、命村外記守成、亦依左府仰、信濃權介景盛計歷宣旨、令傳大外記、中原致時朝臣、又

明經得業生貞清、中原儒牒早可成之由、示送博士致明朝臣許、是致時朝臣所示也、

○位祿官符請印ノ日詳ナラズ、姑ク茲ニ揭書ス、

十日、乙未御體御下、

〔日本紀略〕院一條 十二月十日、乙未、御體御下奏、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十二月十日、略仍直參內、時辰三點頃之、召辨候連

瀧、仰參由、至未三刻、上卿不參、召外記重忠問上卿參否之案内、皆有障云々、即

計歷宣旨
儒牒

中院ニ御
セズ

十一日、丙申月次祭、神今食、御物忌、

〔日本紀略〕院一條 十二月十一日、丙申、月次祭、神今食、

〔伏見宮御記錄〕權利一條 十二月十一日、候內、依御物忌、不御中院、

十六日、略雖御物忌、依覆推、略下略、官奏ノ

十七日、略今日主上御物忌、不渡御、略下略、修子内親王御

廿一日、略依御物忌、僧等候宿、略下略、御佛名ノ

〔御堂關白記〕十二 長和四年十二月十一日、丁亥、略中入夜外記、元規來申、

神今食申可參、高麗左兵衛督由、而只今申觸穢由不參者、仰云、入夜有障、以宰相行

例如何、申云、去長德四年春宮大夫宰相時、一人行之者、

○十六日以後ノ御物忌ノコト、便宜合敘ス、

十三日、戊戌元日侍從及ビ諸卿分配等ヲ定メ、諸社御讀經ノコトヲ僧綱等

ニ令ス、

長德四年十二月十一日 十三日

二三九

長德四年十二月十四日 十五日

二四〇

〔伏見宮御記錄〕權記一 十二月十三日、候内、左府被參陣、中元日侍從、中并諸卿分配等被定申、諸社御讀經法華經、事奉綸旨、遣仰諸僧綱等許、等、在別、可注

東三條院、内裏ニ御幸アラセラル、

〔伏見宮御記錄〕權記一 十二月十三日、略中、西刻與式部丞泰通參院、今夜戌刻參内給也、左府候宿給、

十四日、己未、位記召給、

〔伏見宮御記錄〕權記一 十二月十四日、位記召給也、自内參官、平中納言、左大

辨著廳、予還參内、罷出詣左府、有被奏事等、略中、東寺申大和明賢位記、付奉京

兆弘徽殿女御被申丸部守忠位記、付内藏頭、令傳奉内府、此夕與右中辨同車

參内、

十五日、庚子、冷泉院御佛名、是日、左大臣道長、讀經ヲ行フ、

〔伏見宮御記錄〕權記一 十二月十五日、略中、晚自内參左府、今日御讀經始也、

次亦參内、爲左府御書奉院也、與内藏頭同車、次亦參冷泉院御佛名也、事未了、與成信、中將同車歸參内、

道長書ヲ
東三條院
ニ上ル

結願

阿闍梨ノ
宣旨ヲ奏
ス

十八日、略中、次詣左府、御讀經結願也、了退出、

十六日、辛丑、除目、直物、官奏、是日、諸寺ノ別當、阿闍梨等ヲ補ス、

〔伏見宮御記錄〕權記一 十二月十三日、候内、左府被參陣、即阿闍梨宣旨六

枚被奏、今日有復過今日可下給、被仰依請、

十六日、候内、左府自去夜候宿給、是依可有官奏直物等也、今日於陣被定申雜

事、有陣申文、任大辨後、今日初候申文、左少史元倫申文三枚、伊豆鈎文、伊豫鈎

等、此間左大辨暫立壁後、予見申文、了史還南、更持文判渡北之後、予起座、

子立敷政門北腋、新宰相加北座之後、進就陣、之後共有揖、因大臣端笏申

文上目、予稱唯、後右願、史進候小庭、大臣目、史稱唯、參進奉文事等如例之、史退

出、予起座退、前、次左大辨就床子、元倫亦候奏、覽上文十三枚、雜書二枚、

可候文十一枚、雖御物忌、依覆推申輕由、奏、後上御簾、只卷御座間也、但奏

勘解由長官、右金吾、被示、主典等或煩身病、或亦城外使府公事、念忙異於他處、

然而依無勘署之人、殆可蒙懈怠之責、以諸司官人等、申可堪事之者、可被遷任

之、可經奏聞者、大舍人屬竹田宣、官奏後、有直物、除目事、亦被定諸寺別

當、左大臣被奏直物勘文、入筥、仰云、任勘文可削改、此次奏勘解由長官申旨聞

長德四年十二月十六日

二四一

御物忌

諸國申文

內給文

長德四年十二月十六日

二四二

食了次內給文二枚、公卿給二枚、人々申文等下給、亦被仰以景齊朝臣任太皇太后宮亮、物部利孝任木工屬、知神樂者也源雅通任右近權將監、之方由、以故左大臣先下直物後、亦給公卿給文之次、仰此事削改、舊召名并今日除目等被奏、即被仰可下給之由、除目、太皇太后宮權亮藤景齊、少進同時正、兼博士日下部保賴、木工少屬物部利孝、造酒令史御使惟用、主水令史大宅茂永、齋宮大允坂合部貞親、修理大屬伴諸兼、兼竿師高橋康樹、勘解由主典竹田宣理、右近權將監源雅通、又仰云、昨日下午給諸寺別當文等定申、次以權律師深覺欲補東大寺之事、同可定申其可否、以權律師深覺為東大寺別當、僧松興為元興寺別當、別當廣隆寺治者僧輔靜為藥師寺權別當、僧喜朗為新藥師寺別當、法橋上人位觀教為崇福寺別當、大僧都實因為極樂寺座主、又以忠連、光休、蓮舩、以上覺慶解文順朝、教靜、庄命、以上歡修解文并為延曆寺阿闍梨、兼摠為元慶寺分、明普、尋圓為慧心院分、梵昭為積善分、寺脫力件事子細見目錄、式部丞泰通、藤原來廿五日可著座之由、仰云、十七日可著、

廿一日、中伊勢大神宮司千枝事宣旨下、又右衛門志縣犬養為政、檢非違使宣旨下、

諸寺別當ヲ補ス

極樂寺座主 諸寺寺分

大神宮司

佛師康尙

廿四日、退出、招佛師康尙、示土左講師宣旨下之由、院別當行忠、持來內藏文利返上藤原文利位記、即參長者殿、申文利位記返上之由、命云、可給實文利、又伊勢大宮司公忠辭替、可補千枝宣旨被下、又被仰官符出來者可給前典侍之由、道長件宮司依故二條關白申、給將來宣旨已了、隨則彼後家取公忠辭書令奏之處、宣旨下者、任本宣旨可給任符於彼家也、而以典侍有所愁申、不給本家、更給他入之事、甚不當之由、有事次申左府、又右衛門志縣犬養為政使宣旨事、可仰他上者、其次種々雜事申承甚多、

〔小右記目錄〕

五京官除目事

同十二月十六日、有直物并仗議事、

〔正倉院文書〕

一東南院文書 一權第二卷

太政官牒東大寺

傳燈大法師位尋覺

右左大臣宣奉勅件人宜補彼寺別當、平崇秩滿之替者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀故牒、

長德四年十二月十六日

正五位下行左大史兼和泉守多米朝臣國平牒

右大辨從四位上藤原朝臣

長德四年十二月十六日

二四三

深覺補任ノ官牒

長德四年十二月十七日

二四四

深覺ハ平
崇秩滿ノ
替

〔東大寺別當次第〕

五十四

權律師深覺 長德四年十二月十六日、官符還著、平崇秩

滿替寺務半年、

元長保

任中補律師、

藥師寺別
當

〔東寺文書〕

甲號外

二十八

藥師寺別當次第

大法師權別當

輔靜 長德四、治、

左大臣宣准興福寺例、
十八年、四任長任別當、

○大神宮司大中臣千枝、右衛門志縣、犬養爲政、佛師康尙等ノ補任、便宜合敘ス、

十七日、壬、脩子内親王御著袴、

〔日本紀略〕

一條

十二月十七日、壬寅、若宮御著袴、諸卿參登華殿、

〔伏見宮御記錄〕

權記

十一月十六日、

略

○中入内、

略

○中又内親王可著袴日、令

登華殿ニ
テ行ヒ給
日時勘申
内親王内
裏ニ參入
シ給フ

勘申來月十七日可旨、其間事相定可申之由、同仰大臣者、即詣彼殿申仰旨、
十二月十六日、略○中此夜女一宮自式御曹司參内殿上人候御共、輦車、入自朔
平門、藏人行之、(推中)中納言被候御共、
十七日、亥一刻女一親王於登華殿御著袴、年三、南廂有上達部并殿上座、東實

御物忌ニ
依リテ出
御ナシ

道長御裳
ノ腰ヲ結
ブノ酒ノ興
祿

子敷備高麗疊、今日主上依御物忌不渡御、差藏人右中辨爲任、遣仰左大臣許、
可參之由、又仰左右馬寮、以各一足、(正方)可充引出物料之由、左大臣結、亥二刻有御
著袴事、左大臣入簾内、結御裳腰、是前於東簀子、以衝重羞大臣以下、聊有歌酒
之興、大臣依有氣色、參入簾内、結腰了退出、有祿、即給御馬二疋、左近將監尾張
右近將監藤原殿上人等又給祿、先是刻限之前、爲任御使、持參小御裝束二具、
基類率右御馬給祿、事了人々退出、子刻一宮參上院、(餘子)上御廬給、

○枕草子勤物、異事ナキヲ以テ略ス、

大法師明觀ヲ醍醐寺座主ニ補ス、

〔醍醐寺座主讓補例〕

第十一代座主大法師明觀 寺務二

長德四年十二月十七日任座主、

〔醍醐寺座主次第〕

(朱書)

第十一

大法師明觀

定額僧、眞言宗、元泉僧都入壇、資、觀理

僧都弟子、天曆七季癸丑誕生、延喜第

十宮二世

佐忠王、

長德四年十二月十七日任座主、

(朱書)廿六日イ

年四十六、

(朱書)廿一年イ

藤寺務廿年、

略

○中以前十代各即世

以後、根本僧正一門之内、定額六口中、不問顯密、簡定器量、所被撰補也、明觀號
御齋所座主、或說二世佐忠王云々、

長德四年十二月十七日

二四五

醍醐寺新要錄

十五 座主職部 一期居寺務事

第十一大法師明觀 長德四年十二月十七日任座主四十六

寅云明觀以下被讓補座主於嫡資於師資者為檢校職矣卅六

二十日、乙東三條院、内裏ヨリ退出アラセラル、

伏見宮御記録

利一 十二月廿日、早朝退出、今夕參宿、丑刻院出給、

○東三條院、内裏入御ノコト、本月十三日ノ條ニ見ユ、

二十一日、丙御佛名、是日、荷前使ヲ發遣ス、

日本紀略

院一條 十二月十三日、戊戌、荷前使定、

廿一日、丙午、發遣荷前使、

伏見宮御記録

利一 十二月十三日、候内、左府被參陣、○中 并荷前使事、○

被定申、

十八日、早朝定申御佛名導師等、定額芳慶、慶算、聖胤、了下、出納允政、御佛名來

廿一日也、

廿一日、御佛名始也、依御物忌、僧等候宿、行事方弘、初夜御導師芳慶、後夜慶算、慶算泰通仰之、今日有荷前事、

御佛名ノ
導師ヲ定ム
御佛名始

荷前使定

東三條院
御佛名

法華八講

結願

東三條院御讀經

日本紀略

院一條 十二月廿一日、丙午、○中 東三條院、修法華八講、

伏見宮御記録

利一 十二月廿二日、○中 午刻參院、自昨有御讀經、釋經也

廿五日、○中 次參院、御讀經結願、僧等給祿、

廿九日、○中 參内、○中 令行正奏大般若經一帙新書寫、是依院仰、從去廿一日、

所令奉仕也、仰付出納允政、

律師濟信ヲ東寺ニ長者ニ補ス、

〔東寺長者補任〕一 律師濟信 真言院、真言宗、東大寺、十二月廿一日加任、

五、四、十

〔仁和寺御傳〕濟信大僧正 長徳四戊戌年十二月廿一日加任二長者、

二十二日、丁未復任除目、

〔日本紀略〕院一條 十二月廿二日、丁未復任除目、

二十五日、庚戌著欽政、

〔西宮記〕臨時十一 同四年十二月廿五日、著欽、今日風雪不止、陰晴不定、仍

著欽四十人

借人家爲饗所、見參官人云々、著欽四十人、左七人、右三人、

東三條院ノ殿上ニ於テ、左大臣道長ノ男巖君宗親ノ著袴ヲ行フ、

〔伏見宮御記録〕權記一 十二月廿五日、○中次參院、○中次參内候宿、此院殿

倫子明子ノ懷妊

上有碗飯、巖君若君著袴云々、左大臣息子、宮君腹、左府參給、

〔榮華物語〕見はてぬゆめ 中宮大夫殿は、（倫子）つちみかとのうへも、宮の御か

たも、（正曆二年）こそよりたゝならずみえさせたまへは、左大臣とののは、さきのやうに、

いかにくゝとおほしいのらせ給、（倫子）みやの御方にも、（盛明）みやおはしまして、さる

へき御いのりのことをきて覺したり、○中（道長）大納言とののは、土御門のうへも、

宮の御かたも、みなおとこ君をそうみたてまつらせ給ける、とのゝわかき

へり、

○頼通、頼宗誕生ノコト、便宜合敘ス、

二十六日、辛亥前下野守平維衡、散位平致頼ト鬪争ス、是日、陣定ヲ行ヒ、伊

勢國司ヲシテ、二人ノ上洛ヲ促サシム、

〔伏見宮御記録〕權記一 十二月十四日、○中（道長）詣左府、有被奏事等、○中又五位

以上不可畿外之由、法條所制也、而前下野守維衡、散位致頼等、率數多部類、年

來之間、任伊勢國神郡爲國郡多有事煩、致人民之愁云々、仰大神宮司并國司

等、可令追上之旨等也、歸宅、

廿六日、候内、左大臣於陣被定申雜事之中、伊勢國維衡、致頼等合戰事、可召國

司、重可遣召維衡、致頼之由、宣旨下、即仰國平朝臣、以左右衛門番長堪事之者、

可爲使之由、

廿九日、參左府覽略、○中伊勢國司辨申維衡、致頼等合戰狀文等、命云、可奏、

〔今昔物語〕三十 平維衡同致頼合戰蒙答語第十三

長徳四年十二月二十六日

二四九

國司ノ申文ヲ奏ス

番長ヲ遣ス

神郡ニ住シテ横暴ヲ爲ス

倫子明子ノ懷妊

著欽四十人

長徳四年十二月二十二日 二十五日

二四八

五、四、十

〔仁和寺御傳〕濟信大僧正 長徳四戊戌年十二月廿一日加任二長者、

二十二日、丁未復任除目、

長德四年十二月二十六日

二五〇

致頼ヨリ
挑戦ス

今昔前ノ一條院天皇ノ御代ニ、前下野守平維衡ト云フ兵有リ、此レハ、陸奥守貞盛ト云ケル兵ノ孫也、亦其ノ時ニ平致頼ト云フ兵有ケル、共ニ道ヲ挑ム間、互ニ悪キ様ニ聞ルカス者共有テ敵ト成ヌ、其ノ領各一國ニ有テ、致頼進テ維衡ヲ罰シテ合戦スル間ニ、其ノ多ノ子孫從類并ニ郎等眷屬等、互ニ射殺ス者其ノ員有リ、然トモ勝負無禁シテ、○下略ニ維衡、致頼ヲ左衛門弓場ニ拘十七日ノ條ニ收ム、

○維衡ヲ淡路ニ移シ、致頼ヲ隱岐ニ配流スルコト、長保元年十二月二十七日ノ條ニ見ユ、

課試、

〔公卿補任〕

寬仁四年 參議正四位上藤廣業

〔長德四年〕十二月廿六日課試及第、

〔本朝麗藻〕

贈答部

感勘解由藤相公賢郎茂才蒙課試之給旨、聊呈鄙懷、

源孝道

相公本是道英雄、材幹森然、文亦工、棘路今歡名已列、李門昔恨業猶空、魚疲逆浪鱗、雖泥風拂、重霄翅自冲、泗水慕龍情未忘、尼山砥憤志應同、宜誇仙桂連枝、月將扇儒林、累葉風、七八廻間科第思、賢郎二人累應茂才之舉、舍弟侍中尙書右少丞、長德四年登科、茂才蒙此宣

藤原廣業
課試ニ及
第ス
源孝道之
ヲ祝ス

云云 三千徒裏拔群躬、非唯明主用君器、定識素王酬文功、大項稟賢苗不秀、公孫弘智文初通、豈如才子專天爵、漸近年丁選帝聰、萬里青雲雙脚下、一家榮耀孔懷中、獨慙詞苑爲奴僕、兼歎更途作老翁、驥歷縱無驚塞偶、若俱得遇誠馳忠、

○課試ヲ行フ日詳ナラズ、姑ク及第ノ日ヲ以テ、茲ニ掲グ、

大春日淑孝、檢非違使廳ニ、櫟井永國、橫領ノ馬ヲ糺返セラレンコトヲ請フ、

〔北山抄裏文書〕

○公卿三條
公輝氏所藏

大春日淑孝解申請檢非違使廳裁事

愁狀

右馬、以十一月上旬、依武重語所請預也、隨則加勞乘□之間、以彼月十五日、相會河內前守景齋朝臣私宅之□、永國申云、依舍兄內匠允菅原永頼示、先日雙六□物可辨事、已有其數、未致其物、然則以件乘馬□辨牽云々、淑孝答云、至于此馬、左近衛武重也、爲□飼所請預也者、然而不理此詞、暗所取領也、仍觸此由於武重先了、其後雖經數日、件永國無心□度、方今案物情、博奕之道、縱雖可有

淑孝秦武
重ノ馬ヲ
預ル

永國馬ヲ
雙六ノ負
牽ク代ニ

長德四年十二月二十六日

二五一

長徳四年十二月二十九日

二五二

其辨、(以下三十九字略)徵償者也、望請廳裁、被糺返件馬、省武重之責、仍注事狀以解、

長徳四年十二月廿六日

大春日淑孝

二十九日、寅追難、僧綱召、是日、雜事ヲ奏ス、

〔伏見宮御記録〕

利一

十二月廿九日、寅參左府、覽鴨河并法隆、藥師等寺覆勘

文、中等、命云、可奏、申云、日者所勞侍、昨夕不參内、今日猶難堪、此文書等早

爲令覽、相扶所參候也、亦命云、猶相扶參腋陣邊、可令候宿人傳奏、即參内之間、

自院有召、即參、有被仰雜事、參内、令右中辨奏左大臣令申事等、仰云、暫可候、中

略、又付右中辨、令奏慶算申法橋文、佐渡國申被盜去調物文、伊賀國司申明年

以後二ヶ年、別納租穀爲築垣料文、式部大輔申給忠貞學問料文、但馬守生昌

申重任文等、佐渡文、學問料文宣旨下、罷出、中晚景亦參内、先詣左府、次參内、

催追難事、依仰令問懈怠之由、依僧綱召事、依可改作宣命所遲之也者、平中納

言自南廊更還入、令改宣命奏之、下給、僧正觀修、大僧都明豪、少僧都穆算、權信、丑二刻追難了

罷出、

〔僧綱補任〕

三興福寺本

權大僧都觀脩 十二月廿九日任權僧正、

覆勘文

別納租穀
學問料

宣命

長徳四年十二月二十九日

二五二

其辨、(以下三十九字略)徵償者也、望請廳裁、被糺返件馬、省武重之責、仍注事狀以解、

長徳四年十二月廿六日

大春日淑孝

二十九日、寅追難、僧綱召、是日、雜事ヲ奏ス、

〔伏見宮御記録〕

利一

十二月廿九日、寅參左府、覽鴨河并法隆、藥師等寺覆勘

文、中等、命云、可奏、申云、日者所勞侍、昨夕不參内、今日猶難堪、此文書等早

爲令覽、相扶所參候也、亦命云、猶相扶參腋陣邊、可令候宿人傳奏、即參内之間、

自院有召、即參、有被仰雜事、參内、令右中辨奏左大臣令申事等、仰云、暫可候、中

略、又付右中辨、令奏慶算申法橋文、佐渡國申被盜去調物文、伊賀國司申明年

以後二ヶ年、別納租穀爲築垣料文、式部大輔申給忠貞學問料文、但馬守生昌

申重任文等、佐渡文、學問料文宣旨下、罷出、中晚景亦參内、先詣左府、次參内、

催追難事、依仰令問懈怠之由、依僧綱召事、依可改作宣命所遲之也者、平中納

言自南廊更還入、令改宣命奏之、下給、僧正觀修、大僧都明豪、少僧都穆算、權信、丑二刻追難了

罷出、

〔僧綱補任〕

三興福寺本

權大僧都觀脩 十二月廿九日任權僧正、

少下同シ 都穆算 十二月廿九日轉正、

權小僧都明豪 十二月廿九日轉任權大僧都、

權律師濟信 十二月廿九日轉任權少僧都、

〔僧綱補任〕

乾德川昭武氏本

少僧都信慶 十二月廿九日轉、

〔東寺長者補任〕

一 律師濟信

眞言院眞言宗、東大寺、中同廿九日任權

少僧都、今年仁和寺別當、三僧如元、

〔御室相承記〕

濟信大僧正

同月廿九日任權少僧都、年四

〔日本紀略〕

院一條

十二月廿九日、甲寅、任僧綱、以大僧都勸修爲權僧正、

〔歷代皇紀〕

僧正一條 天皇裏書

權觀修 元大僧都、五十六、長徳四年十二

月廿九日任、

是月、禁中及ビ所々ニ雪山ヲ作ル、

〔清少納言枕草子〕

中宮内省圖書寮本

物のあはれしらせかほなる物

しはすの十よひの程に、雪いみしうふりたるを、女官ともなとして、えんに

いとおほくをくを、庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、さふらひめし

て、おほせ事にてといへは、あつまりてつくる殿もりの官人の御きよめに

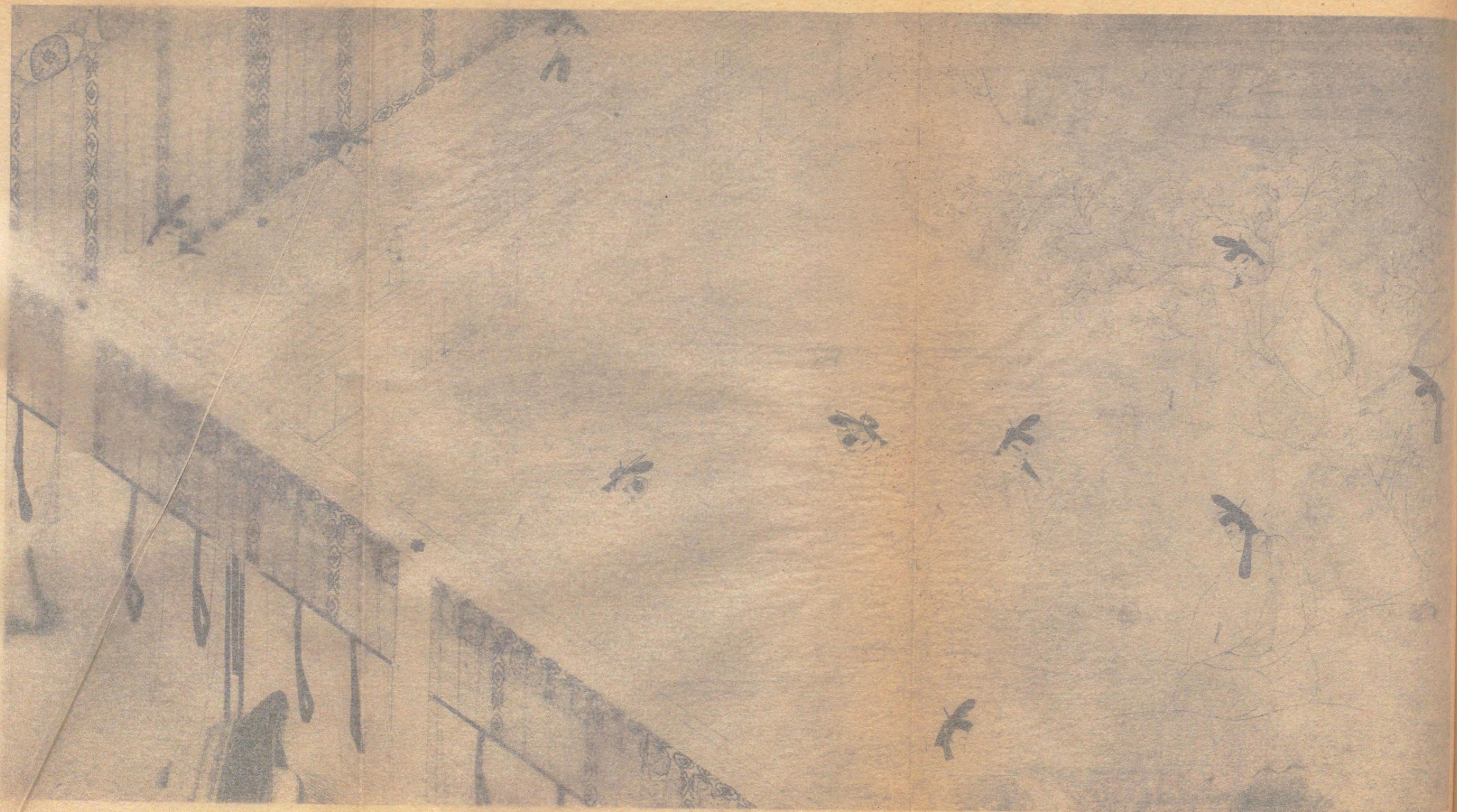
長徳四年十二月是月

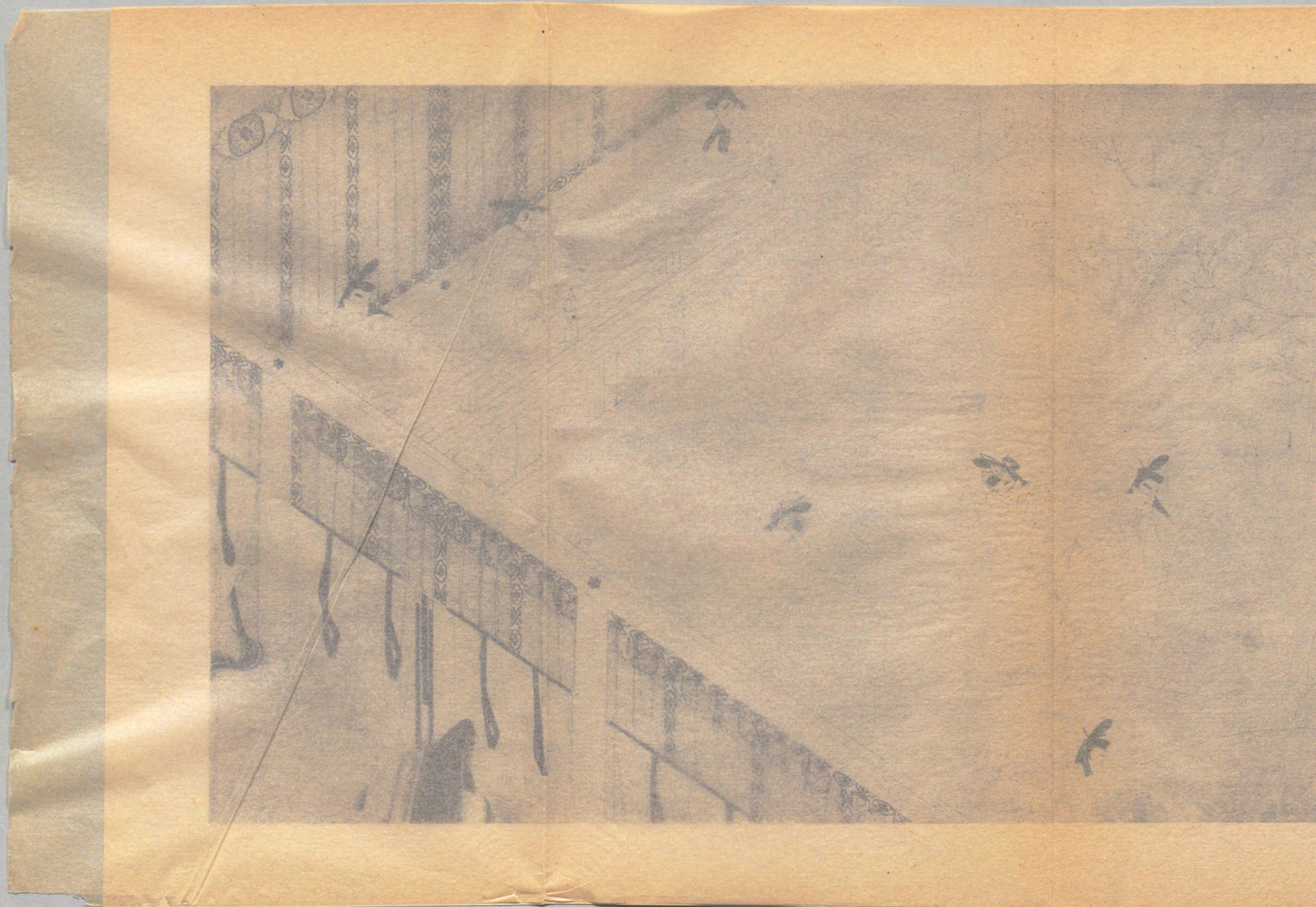
二五三

中宮雪山
ヲ作ラシ
メ給フ

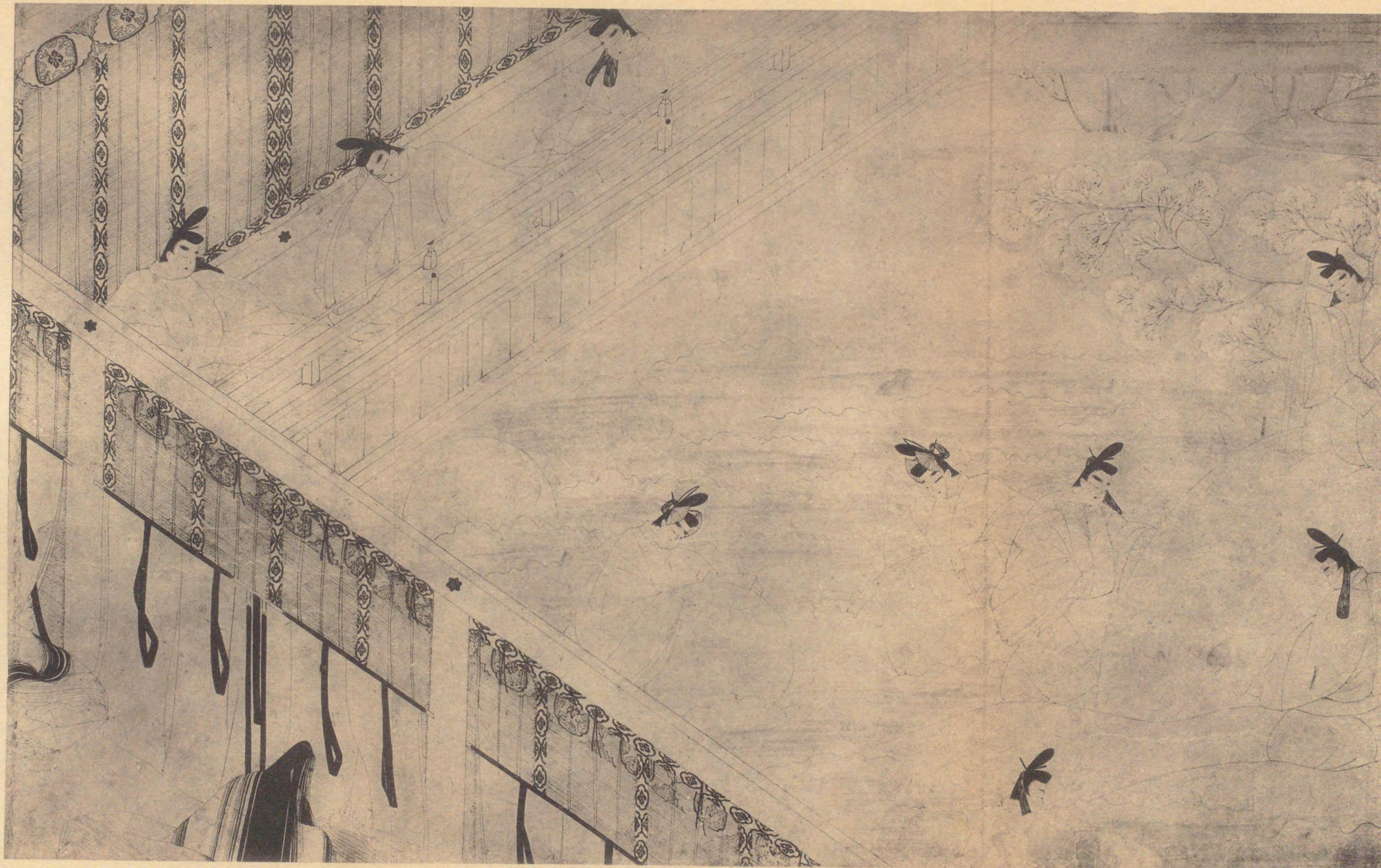
參たるなとも、みなよりていとたかうつくりなす、宮つかさなともまいりあつまりて、こと加へけうす、三四人まいりつるとのもつかさのものとも、廿人はかりになりけり、さとなるさふらひめしにつかはしなとす、けふこの山つくる人には、日三日たふへし、まいらさむ物は、又同しかすと、めむなといへは、聞つけたるはまといまいるもあり、さと遠きはえつけやらず、つくりはてつれば、宮つかさめして、きぬふたゆひとらせて、えんになけいたしたるを、ひとつとりにとりて、おかみつゝこしにさして、みなまかてぬ、うへのきぬなときたるは、さてかりきぬにてそある、これいつまでありなむと、人々にの給はするに、十日はありなむ、十よひはありなむなと、たゝこの頃の程を、あるかきり申すに、いかにとはせ給へは、む月の十よひまては侍なむと申を、おまへにも、えさはあらしと覺しめしたり、女房はすへてとしのうち、つこもりまてもえあらしとのみ申に、あまり遠くも申つるを、けにえしもやあらざらん、ついたちなとそいふへかりけると、したに思へと、さはれさまてなくとも、いひそめてむことはとて、かたうあらかひつ、いつかのほどに、あめふれと、きゆへきやうもなし、すこしたけそおと

女房等
山消失ノ
期日ヲ申
ス
清少納言
ノ奉答









勅使

御前ノ壺
春宮弘徽
殿京極殿
作ル雪山

晦日頃ノ
雪山

りもてゆく、しら山の観音、これきこえさせ給ふなといのるも物くるをし、
さてその山つくりたる日、御つかひにしきふのせうた^{未補藏人不審、于時式丞藤泰通、}たか参たれば、し
とねさしいたしてものなといふに、けふ雪の山つくりせ給はぬ所なんな
き、御前のつほにもつくりせ給へり、^(春宮)春宮にも、^(義子)こきてんにもつくりられたり、
京^(道長)こく殿にもつくりせ給へり、けりなといへは、

こゝにのみめつらしとみる雪の山とて、こゝにふりにける哉
とかたはらなる人していはすれば、度々かたふきて、返しはつかうまつり
けかさし、あされたり、みすのまへにて、人にをかたり侍らんとて、たちき、
うたいみしうこのむと聞くものをあやし、おまへに聞めして、いみしうよ
くとそ思ひつらんとその給はする、つこもりかたに、すこしちいさくなる
やうなれと、猶いとたかくてあるに、ひるつかた、えんに人々いてゐなとし
たるに、ひたちのすけいてきたり、なといひさしう見えさりつるにとと
へは、何かは心うき事の侍しかはといふ、何事そととふに、猶かく思侍しな
りとて、なやかかによみいつ、
うら山しあしもひかれすわたつ海のいかなる人に物たまふらむ

長徳四年十二月是月

常陸の介
雪山ヲ踏
ミ荒ス

正月元旦
ノ降雪

齋院ヨリ
中宮ヘノ
御消息

長徳四年十二月是月

二五六

といふを、にくみわらひて、人のめも見いれねは、雪の山にのほり、かゝつら
ひありきていぬるのちに、右近の内侍に、かくなむといひやりたれば、なと
人そへては給はせさりし、かれかはしたなくて、雪の山までのほりつたひ
けんこそ、いとかなしけれとあるを又わらふ、さて雪の山つれなくて、とし
も返ぬ、長保元年正月一日、乙卯、雪降、ついたちの夜の夜、雪のいとおほく降たるを、うれしくも又ふりつ
みつるかなとみるに、これはあひなし、はしめのきはをおきて、今のはかき
捨よとおほせらる、つほねへいとくおるれば、さふらひのおさなるもの、
ゆの葉のことくなるとのみきぬの袖の上に、あをきかみの松につけたる
をおきて、わなゝきいてたり、それはいつこのそとへは齋院(遷)よりといふ
に、ふとめてたうおほえて、とりて参りぬ、またおほとこのもりたれば、まつ
御帳にあたりたる御かうしを、こはんとかきよせて、ひとりねんしあく
るいとおもし、かたつかたなればきしめくにおとろかせ給て、なとさはず
る事その給はすれば、齋院より御ふみのさふらはんには、いかてかはい
そきあけ侍らさらむと申に、けにいとかりけりとて、おきさせ給へり、御
ふみあけさせ給へれば、五寸はかりなるうつちふたつを、うつえのさまに、

かしらなとをつゝみて、山橋ひかけ、山すけなとうつくしけにかさりて、御
ふみはなし、たたなるやうあらむやはとて御覽すれば、うつえのかしらつ
ゝみたるちいさきかみに、

山とよむをの響を尋ねれば、いはひのつえのをとにそ有ける

御返かかせ給ほと、いとめてたし、齋院には、是よりきこえさせ給ふも、御
返もなを心ことにかきけかし、おほう御ようゐ見えたり、御つかひにしる
きおり物のひとへ衣、すはうなるはむめなめりかし、ゆきのふりしきたる
に、かつきてまいるもをかしう見ゆ、そのたひの御返しを、しらすなりにし
こそくちおしう、さてその雪の山はまことのこしのにやあらんと見えて、
さえけもなし、くろうなりて、みるかひなきさまはしたれとも、けにかちぬ
る心ちして、いかて十五日まちつけさせむとねんする、されと七日をたに
えすくさしとなをいへは、いかてこれ見はてむと、みな人思ふ程に、俄にう
入内事無所見、若密儀歟、七日中納言實資卿、正三位、拜賀参式御曹司、已無人、令啓直罷出、外人猶存御
ちへ三日入らせ給ふへし、いみしうくちおしこの山のはてをしらてやみ
式御曹司之由歟、なん事とまめやかに思こと、人もけにゆかしかりつるものをなといふを、
御せんにもおほせらるるに、おなしくはいひあてて、御覽せさせはやと思

御返書

中宮内裏
ニ参入シ
給フ

長徳四年十二月是月

二五七

ひつるにかひなければ、御物のくともはこひ、いみしうさはかしきにあはせて、こもるといふもののついちの程にひさししてゐたるを、えんのもとちかくよひよせて、此雪の山いみしうまもりて、わらはへなとにふみちらさせす、こほたせてよくまもりて、十五日までさふらへ、その日まであらは、めてたきろく給はせむとす、わたくしにも、いみしきよろこひいはむとすなとかたらひて、つねに大はん所の人、けすなとにくまるゝを、くた物やなにやと、いとおほくとらせたれば、うちゑみて、いとやすき事たしかにまもり侍らん、わらはへそのほりさふらはんといへは、それをせいしてさかさらんものを申せなと、いひきかせていらせ給ぬれば、七日までさふらひて出ぬ、そのほともこれかうしろめたければ、おほやけ人すましおさめなとして、たへすいましめにやる、七日のせくのおろしなとをさへやれば、おかみつる事なとわらひあへり、さとにても、まつあくるすなはち、これを大事にてみせにやる、十日の程に、五日まつはかりはありといへは、うれしくおほゆ、又ひるも夜るもやるに、十四日よさり雨いみしうふれば、これこそきえぬらむといみしう、いま一日ふつかもまち付てと、よるもおきぬて

十日頃ノ
雪山
十四日夜
ノ降雨

十五日早
朝清少納
言ノ用意

雪山ノ消
失

いひなければ、聞人も物くるをしとわらふ、人のいていくに、やかておきぬてけすおこさするに、更におきぬは、いみしうにくみはらたちて、おきいてたるやりて見すれば、わらうたのほとなはへる、こもりいとかしこうまもりて、わらはへもよせ侍らす、あすあさてまてもさふらひぬへし、ろく給はらんと申すといへは、いみしううれしくて、いつしかあすにならば歌讀て物に入てまいらせむと思ふ、いと心もとなくわひし、くらきにおきて、おりひつなとくせさせて、是にそのしろからむ所いれてもて、きたなけならんところかきすててなといひやりたれば、いとくもたせつる物をひきさけて、はやくうせ侍にけりといふに、いと淺ましくおかしうよみてて、人にもかたりつたへさせむと、うめきすんしつるうたも、あさましうかひなく成ぬ、いかにしてさるならん、昨日までさばかりあらん物の、夜のほとにきえぬらん事といひくんすれば、こもりか申つるは、昨日いとくらふなるまで侍き、ろく給はらんと思ひつるものをとて、手をうちてさはき侍つるなといひさはくに、内よりおほせ事あり、さて雪はけふ迄ありやと仰事あれは、いとねたうくちをしけれと、としのうちついたちまてたにあ

中宮ニ啓ス

中宮ノ御返事
中宮ノ御悪戯

らしと、人々のけいし給しに、昨日の夕暮まで侍しは、いとかしこしとなむ思ふ給る、けふまではあまり事になむ、夜の程に人のにくみて、とり捨て侍とけいせさせ給へなときこえさせつ、廿日まいりたるにも、まつこの事をおまへにてもいふ、みなきえつとて、ふたのかきりもてきたりけんほうしのやうに、すなはちもて来しか、淺ましかりしこと、もののふたにこ山つくりて、しろきかみに歌いみしうかきて、まいらせむとせし事なとけいすれは、いみしくわらはせ給、こせむなる人々もわらふに、かう心に入て思たる事を、たかへつれば、つみうらん、まことは四日の夜、さふらひとをやりてとりすてしそ、返事にいひあてたりしこそ、いとおかしかりしか、その女おきて、いみしう手をすりていひけれとも、おほせ事にて、かのさとよりきたらん人にかくきかすな、さらはやうちこぼたんなどいひて、左近のつかさのみなみのついひちなとにみなすててけり、いとかたくておほくなんありつるなとそいふなりしかは、けに廿日もまち付てまし、ことしの初雪も降そひなまし、うへもきこしめして、いと思ひやりふかくあらかひたりなと、殿上人ともなとにもおほせられけり、さてもその歌かたれ、今はかくい

ひあらはしつれば、おなし事かちたるなりと、おまへにも仰られ、人々もの給へと、なせうにか、さはかりうき事を聞なからけいし侍らむなと、まことにまめやかにかうんし心うかれは、誠に年頃は、おほす人なめりとみしを、是にそあやしとみしなと仰らるゝに、いとくつらく、うちもなきぬへき心ちそする、いてあはれ、いみしくうき世そかしのちにふりつみて侍し雪を、うれしとおもひ侍しに、それはあひなし、かきすてよと仰事侍しよと申せは、かたせしとおほしけるなゝりとて、うへもわらはせ給ふ、○久原文庫本、細川侯爵家本ヲ以テ校正ス、

〔禁祕抄〕

下雪山 凡如此事、上古不見、自中古事也、事始大略一條院御時以後也、清少納言記在其子細、○上略

〔河海抄〕

九權 ひと、せ中宮の御前に雪の山つくられたり、世にふりたることなれと、

枕草子云、○中略此雪山長徳二年後、長保二年の前の事也、此物語寛弘の事なれは、一とせといふ此事歟、○下略

〔公事根源〕

十月 初雪見參

一條院ノ御時ヨリコノカタ、雪山トイフコトアリ、清少納言記ニミエタリ、ソレハ所衆瀧口ナト、大内ニテ(符)參テ、藤壺ニ雪山ヲキツキシナリ、雪不足ナル時ハ、所々ノ御願寺ニオホセラレヌレハ、執行法師コレヲタテマツリケリ、略上

陸奥守從四位上藤原實方卒ス、

〔中古三十六人歌仙傳〕藤原實方 (長徳) 四年十二月卒、

〔尊卑分脈〕藤原氏 實方陸奥守 長徳四十一年十一月十三日於任所薨、

〔中古三十六人歌仙傳〕藤原實方 左大臣師尹公孫、侍從貞時男、母左大臣

雅信公女、天祿三年正月廿四日任左近將監、故左大臣給 四年正月七日敍

從五位下、最平 天延三年正月廿六日任侍從、天元元年二月二日任右兵衛權

佐、五年正月七日敍從五位上、正月三十日兼備後介、永觀元年十一月廿日敍

正五位下、宇佐 二年二月一日任左近少將、寛和元年正月廿八日兼播磨權介、

二年七月廿二日敍從四位下、少將 三年七月十六日任右馬頭、正曆二年九月

廿一日任右近中將、四年正月七日敍從四位上、五年九月八日轉左近中將、長

徳元年正月十三日兼陸奥守、

陸奥ノ任
所ニテ卒
ス
官歴

賀茂祭使
トナル

〔千載和歌集〕十六 雑歌上 まつりの使にて、神たちの宿所より、齋院の女房に
つかはしける、 藤原實方朝臣

ちはやふるいつきの宮の旅ねにはあふひそ草の枕なりける

〔前大納言公任卿集〕實方の少將祭の使せしに、貝を花にいれたりし扇を、

やり給ふとて、

扇をは猶床しとそ思ひこし今日はかひあるしるし也けり

かへし

争てかはかひのありとはみえつらむ袖の浦にもよせしと思に

〔實方中將集〕建治本 〇宮内省圖書寮所藏 りむしのまつりのまひ人にて侍し

に、齋院の人のもの見くるまのまへを、わたり侍しほとに、ふといひか

かり侍し、

ゆきすりにみつる山井のころもてを

といひ侍しかは、

めつらしとこそ神はみるらし

中將に侍し時、りんしのまつりのつかひに、いて、侍しに、みはしめて

賀茂臨時
祭ノ舞人
トナル

賀茂臨時
祭使トナル

侍し女のいひて侍し、
おとにきくこやすへらきのみかさもり

といひて侍しかは、
いとしもこひによるはもえねと

〔古事談〕

王道后宮 一條院御時、臨時祭試樂、實方中將依遲參、不賜插頭花、
逐加舞之間、進寄竹臺許、折吳竹枝插之、優美之由、滿座感歎、依之試樂、插永用

〔尊卑分脈〕

師藤原孫氏

定時

侍從、從五上、
歌人、

實方

陸奥守、此國司之時、有余五將軍合戰、右近中將、正四下、
母左大臣雅信公女、略中歌人、

朝元

從四下、陸奥守、

賢尋

貞敏

義賢

長快

賀茂臨時
祭試樂
吳竹ノ枝
挿頭ト

世系

こそ君ノ
死

女子

白川院女房、少將内侍、
母輔親卿女、

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

こそきみといふこなくなりて、七月

八日、あさほらけに、

たなはたのけさのわかれにくらふればなをこはまさる心ちこそすれ

おなしころ、このなき人を、なきねのゆめにみて、

うたゝねのこのよのゆめのはかなきにさめぬやかてのうつゝともかな

ほとへて、なにはへゆく道にて、なからののはしにて、

おやもこもつねのわかれのかなしきはなからへゆけとわすれやはする

〔撰集抄〕

八 中務元輔實方兼方忠岑歌之事

ムカシ殿上ノオノコトモ、花見ントテ、東山ニオハシタリケルニ、俄ニ心ナ

キ雨フリテ、人々サハキ給ヘリケルニ、實方中將木ノ本ニ立寄テ、

櫻カリ雨ハフリキヌ同クハヌルトモ、花ノカケニカクレン

よみ人しらすトアリ、

ト讀テ、モリタル雨ニ、サナカラヌレテ、裝束シホリ侍ル、此事興アルコトニ、
人々思アハレケリ、又ノ日、齊信ノ大納言、主上ニカ、ル面白キ事ノ侍リシ

長徳四年十二月是月

二六五

櫻狩ニ驟
雨ニ遇ヒ
ズテ歌ヲ詠

藤原行成
ノ批評

殿上人ト
山里ニ杜
鵬ヲ訪ヌ

探字ヲナ
ス

花山院ニ
祇候ス

堀河院ニ
御子日ノ
參ズ

長徳四年十二月是月

二六六

ト奏セラル、ニ、行成ソノトキ藏人頭ニテオハシケルカ、歌ハオモシロシ、
實方ハオコナリトノタマヒテケリ、此コトハヲ實方モレ聞給ヒテ、深ク恨
ヲフクミ給フソト聞侍ル、

〔實方中將集〕

○建治本
宮内省圖書寮所藏

四月つこもりに、殿上人々、山里に、ほ

と、きすたつねに、

みやこ人まつほとしるくほと、きすつきのこなたにけふはなかなむ

殿上に、これかれ、もしひとつを、たむゐのやうに、さくりどりて、あと、

いふもしを、

あきの、にしめゆふはきのつゆしけみたつねそいつるさをしかのあと

〔實方朝臣集〕

八月はかり、月あかきよ、花山院のひか歌よまんとて、

秋のよにやまほと、きすなかませは

さねかた

かきねの月やはなとみえまし

〔實方中將集〕

○建治本
宮内省圖書寮所藏

ほりかはの院の御ねのひに、

むらさきのくものたなひく松なればみとりのいろそことにみえける

堀河院ニ
祇候ス

〔實方中將集〕

○建治本
宮内省圖書寮所藏

ほりかはの院にて、御ひやう風のう

しろに、こまの命婦の命婦、からこまのゐたるに、かみから、やまふきの

花を、なけとらせ給へるに、うへのおはしますと、こゝろえて、

やへなからいろもかはらぬやまふきのこゝのへになとさかすなりにし

御かへし

こゝのへにあらてやへさくやまふきのいはぬいろをはしる人もなし

また御かへり

ゑしかゐしひたきに見ゆるはな、れはこゝろのうちにいへておもふも

うへの御

みかきよりほかのひたきのはな、れはこゝろとめてをる人もなし

〔實方中將集〕

○建治本
宮内省圖書寮所藏

ある女に、さねかたの兵衛のすけと

なおりて、こと人のきたりけるに、き、つけてをんなにやる、○建治本

と、女のきたりける兵衛のすけとなのりて、こ

たれならむいかてのもりにこと、はんしめのほかにてわかなかりけん

おなし女にやるふみを、こまの命婦にみせて、さるやくなきことをい

實方ト小
馬命婦

長徳四年十二月是月

二六七

ふなといふをきして、

こまにやはまつしらすへきまこもくさまこと、思ふ人もこそあれ

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

東宮にさふらひける、おほんあふき

に、くらはしやまをかけりけるに、ほととぎすのとひわたりたるかた

あるところに、人々みな、歌つかうまつりけるに、

さつきやみくらはしやまのほととぎすおほつかなくもなきわたるかな

東宮の殿上にて、としのはしめのかむしに、やみはあやなしといふ事

をたいにて、

にほひさへにほはさりせはむめのはなをるにもいかにもうからまし

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

東宮にて、九月はかりに、きぬたの音をきして

よむ、

あきの夜のよかせをさむみわきもこころもうつ手にめをさましつゝ、

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

しらかはとのにて、いはのうへの松

を、

いにしへのたねとしみれはいはのうへの子日のまつもをいにけるかな

東宮ニ祇候ス

白川殿ニ祇候ス

白川とのにて、しかのねをきして

うきよには山のあなたのゆかしきにしかのねならすいやはねらるゝ○圖書寮本

方朝臣集、初句ヲ、
月夜にはニ作ル、

春たつゝとめて、しらかはとのにて、

吹風になみの心やかよふらむはるたつけふのしらかはのみつ

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

關白殿の春花みにおはするときして、よみて

たてまつりける

はるくれとはるにしられぬむもれ木は花みる人をよそにこそきけ

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

おなしころ(道兼力)あはたとのにて、

このはるはいさやまさとにすくしてむはなのみやこはをるに露けし

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

右大臣、そらゆく月のとあれば、

ちぎりあらはたひのそらなるほとはかりすくる月日も心あらなむ○外二首略ス、

〔榮華物語〕

一月宴

宰相(源時)の御をいの實方の侍従も、この宰相をおやにした

てまつり給ふ、○下略

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

大將殿(源時)ふしきこえ給事やありけむ、

長徳四年十二月是月

二六九

實方ト關白

實方ト藤原道兼

實方ト藤原濟時

しはしみえ給はぬ、しらかはとのへわたり給とて、いさなひ給けるに、
しらかはにさそふ水たになかりせは心もゆかすおもはましやは

〔實方中將集〕

○宮内省圖書寮所藏

内よりまかて、(藤原)きんたうの中將と

もるともに、つちみかとにたちて、うしを、そくゐてきたれば、たちわ
つらひて、冬の事なるへし、きんたう、

○歌

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

山里に郭公の聲をかむとて、殿上人のさるへ

きかさりものかたりけるに、歸きて、又日、頭中將のもとより、ある人を
おもひかけて、いひたりける、○建治本實方中將集、殿上のこれかれ、山

山かつにほのかたらひしほと、きすなくねさ、つとつたへさらめや
かへし○建治本實方中將集、詞書、関ク、中

ことわかぬそらねときけはほと、きすたれにかいか、いか、かたらむ○建治

二句、三句、関ク、五句、ワ、い

か、い、こ、た、へ、む、=、作、ル、

〔前大納言公任卿集〕

郭公、聲まれなりといふ題を、

實方中將

里わかぬ空音と聞けは時鳥誰にか如何いは、答へむ

とあるに、

郭公飽てややまむ待ちきつる今朝の寢覺の只一聲を

〔實方中將集〕

○宮内省圖書寮所藏

つねまさ中將のもとに、とのゐ物あ

るやるとて、

かへさむとおもひもかけしからころもわれたにこふるをりしなれば

〔實方中將集〕

○宮内省圖書寮所藏

みちのふの中將のあしるにさそひ

ければ、たうしむかり給よりは、せんしやうこのみ給なんあやしきと

て、○實方朝臣集、世中の人、いみしう道心ありしころ、三位中將のものと
より、うちかはに、いさとあれは、建治本實方中將集、あきみちつな

の中將のきみを、あしるにさそひければ、たうしむかり給

うちかはのあしるのひをもこのころはあみたほとけによるとこそきけ○圖書

本實方中將集、三句、ワ、か、は、な、み、も、=、作、ル、
本實方中將集、三句、ワ、か、は、な、み、も、=、作、ル、

かへし、みちのふ

ひをのよるうらならずともにしかはのあみたにあらはいほもすくはむ○建治

實方トつ
將れまさ中

實方ト藤
原道信

實方ト藤
原公任

中將集、初句ヲなみのよるニ、三句ヲつみもすくはんニ作ル、

おなし中將、○實方朝臣集、とのゐるところにて、まくらはこわすれたる、かへすとて、

あくまでもみるへきものをたまくしけうらしまのこやいか、におもはむ返し

たまくしけなにいにしへのうらしまにわれならひつゝをそくあけ、んたち返やる、

おそくてもあくこそうくれたまくしけあなうらめしのうらしまのこや

道のふの中將、はなもとにもみむと、八月はかりにちきりけるを、かの中將なくなりける秋、

見むといひし人ははかなくさへにしをひとりつゆけき秋のはなかな○今昔物語同

あるところより、夜ふけてかへりて

たけのはにたまぬくつえにあらねともまたよをこめてをきにけるかな

おなしところ、十月ついたちのよ、いきたれば、みちのふの中將よへ

よりありける、夏なをしきたりけるをみてなるへし、（五）身にちかきなをたのむとも夏ころもきのふきかへてきたりましかは

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

正月一日の日、たち花の枝に、雪のふりかゝり

たりけるを、三位中將（道信）のもとにやる、○建治本實方中將集、むつきのふ

リかゝれる

ときはゝるはなはさ月の花からも鳥のこゑにやけさはわくらむ

かへし○建治本實方中將集、返しノ下、

ほとゝきすなくへき枝とみゆれともまたるゝものはうくひすのこゑ

〔實方中將集〕

○横本

ゆみのけちに、またらまくに、ゆきの

ふりかゝれるを、みちのふ、○みちのふ、建治本實方中將集、入道中納言ニ作ル、

まつかたのまたらまくなるゆきみれば

とあるに、

しりへのやまそ思ひやらるゝ

〔實方中將集〕

○縦本

おなしき道信の中將の、おもしろき

さくらにさして、

すみそめの衣うき世の花さかりをりわすれてもをりてけるかな
かへし

あかさりしはなをやはるとこひつらむありしむかしをおもひいてつゝ

〔實方朝臣集〕

道信中將りうしのまつりのまひ人にて、もろともにもありしを、ふたりなから、四位になりての年のまつりに、

古のやま井の水にかけみえて猶そのかみの事そこひしき

かへし

古の衣の色のなかりせはわすらるゝ身となりやしなまし

〔小大君集〕

又みちのふの君、實方の君に、三月中のほと、

散残る花はありやと打群れてみ山隠れに尋てしかな

かへし

また散ぬ花もや有と尋見むあなかま暫し風に知すな

〔萬代和歌集〕

雜歌一 道信朝臣と世のはかなき事なといひて、又の日、雉

をつかはすとて、

實方朝臣

たつきしのうはの空なる心にものかれかたきは世に社有けれ

かへし

道信朝臣

人はいさ心もしらすたつきしのかりのこの世はしはしはかりそ

〔續詞花和歌集〕

物名 内にていみしくしみける夜、道信朝臣、かくいひけ

れは、ずゑをつける、日、權大納言中將なとして、かくいひ霜こほたりける

いひける=作ル、

藤原實方朝臣

あしのかみ膝よりしものさゆる哉こしのわたりに雪や降らむ

〔實方中將集〕

建治本 〇宮内省圖書寮所藏 ゆきふれるあした、こき殿のきたお

もてに、左京の大夫道なかのきみ、

あしのかみひさよりしものきゆるかな

とあれは、

こしのわたりにゆきやふるらむ

實方ト藤原宣方

實方ト藤原道長

十月つこもりかたに、信方(宣下同)の中將に、女子とも、〇横本、神な月ついたち、いつとなくしくれふりぬるたもとにはめつらしけなき神無月かな

たいの御かたの、少納言きして、

おほそらのしくるゝたにもかなしきにいかになかめてふるたもとそは
この人うちになふらふとて、

いてたちてともまつほとのひさしきはまさきのかつらちりやしぬらむ
返し

いそかすはちりもこそすれもみちするまさきのかつらをそくゝるとて

信方中將と、こうちて、かちたりけるに、まけ物、かの中將のをこそせさり
ければ、こひにやるとて、

かすゝにこのまけものを立てしかなこふにはあらすてうちならはむ

〔道綱母集〕

○宮内省
圖書寮本

さねかたの兵衛佐に、あはすへしとき、給ひて、少

藤原

將にそ、おはしけるほとのことなるへし、

かしはきのもりたにしけくきくものをなとかみかさのやまのかひなき

かへし

かしはきもみかさの山もなつなればしけれとあやな人のしらなく

かへりことするを、おやはらからせいすとき、て、まろこすけにさし
て、

實方
藤原
道綱

うちそはみきみひとり見よまろこすけまろは人すけなしといふなり

〔實方朝臣集〕

白川殿にて、道つなの少將、せきとふしたるによりて、

いかてかは入のかよはんかくはかり水ももらさぬ白河のせき

おなし少將とふして、さうゝしくもあるかな、女かたをきたるとこ

ろやとて、人やりたるに、かへりて、あなはらいたとの給ひつる人の、御

聲なんしつるといへは、

その原やいかにやましく思ふそやふせやといふも處やはなき

女、たちかへり、

何とてか人をもさらに恨むへきもにすむ蟲をしらは社あらめ

〔實方中將集〕

○建治本
宮内省
圖書寮所藏

はしに、人のあからさまに、ふしたり

けるを見て、權少將、

うたゝねのはしともこよひ見ゆるかな

といへは、

ゆめちにわたすなにこそありけれ

つゝきみのうまれたまひけるに、七夜のよきつけ、よなかにいひ
をこせける、
中將道つな

しらすしてなぬかゆくまでなりけるかすまさるなるはまのまさこを
かへし

これやこのあまのすむてふはまひさしなぬかゆくまのなにこそありけれ

〔實方中將集〕

横本

○宮内省圖書寮所藏

〔あるころ〕

おなしとところに、十月のついたちの

よいきたれば、みちつなの中將そまつよりありける夏のなをしをき
たりけるをみてなるへし、

みにちかき日をたのむとかなつころもきのふはかへてきたらましかは

おなし女、さうしをへたてゝ、ものいふに、これあけ給へといへは、さら
ぬものをといへは、いらへに、

しまのこかこゝろゆるさぬたまのはこあくれとあかぬものにそありける

おなし女にたひくゝやるに、かへり事なければ、

みつかきのかきのみたゆるたまつさはみのゝをやまのかみやいさむる

〔實方中將集〕

建治本

○宮内省圖書寮所藏

〔宣讀巻〕

おなしおほんかたに、せきこゝのへ

といふわらはの、こなたかなたのとくちにあて、人ともいふを見て、
こゝのへはせきのこなたにあるものをせきのあなたのこゝのへやなそ

ゑもんのかみ、かすならぬ身は、心たにとあるを、

つゝきにし人のいのちのなからへはうらみられてもよおやつくさむ

實方ト六
條少納言

五節所にて、まかてなむと、いひありけは、六條の少納言、
くものうへを月よりさきにいてつるは

とあれは、

ふしみのさとに人やまつとて

實方ト藤
原爲任

ためたうの辨、なかよりのいへに、たえそめしときに、としかはりて、宮
のへのれうに、うへの御そのはしをこひたりければ、辨あはれにおも
ひたりけるけしきをさして、

あめにますかさまのかみのなかりせはふりにしなかをなれたのまゝし

ためたうの辨南葵文庫本、た、めのひたるところよりあしたに、
たかさといかにしのふそほとくすすをかかさねはなやちりにし
ためたうの辨三條にはしめてこうませたりけるにきしやるとて、
さすむをしほのはらのこまつはらとりはしめたるちよのかすかも
返し

をしほやましらさりつるをすむとりのとふにつけてもおとろかれぬる
このうたを右少辨ためとうのととりてよりたりければ、
このころはむろのやしほもぬすまれておもひありともえこそしらせね

右少辨もろともにもへゆくにしはつみくるまのゆきいつるを、
はるくりのしはつみくるまうしよはみたかふるさとのかさねしめしそ
みかは水のつらに、あるくら人のなかむるをものおもひかほにても、
ぬたるかなといへは、くら人、
こひせまほしきかけや見ゆらむ
とあるに、

實方ト藏人

實方ト主殿頭

實方ト大舍人助爲吉

實方ト因幡守たさ

實方ト三河守

實方トためまさ

やつはしにあらぬみかほのをちにゐて

とのもりのかみにむらさきこひたれば、をこすとて、

かこつへき人ゆへもなきよ身にむさしのわかむらさきをなかにみすらむ

御かへし

したにのみなけくをしらてむらさきのねすりのころもむつましきゆへ

〔實方朝臣集〕

書宮内省圖察所藏

大舍助爲吉のなかくいひければ、

も、しきのみかさの中に春とめていくちよまてのなはるをみてまし

因幡守たさたに、ぬなかへくたるに、

わかれてもたちかへるへきなかなれといなはこひしとおもふへきかな

みかほのかみ、冬いとゑさせむといひたりしか、はるになりて、をこせ

たりしかは、返事、

いにしふゆいとしもなにしまたれけむはるくるものとおもはましかは

いはし水のりう臨時祭しのまつりのつかひに、ためまさの朝臣のありける
とし、まひ人にて、かへりての又の日、かさしのはなにさして、

實方トか
けまさ

かつらかはかさしのはなのかけみえしきのふのふちそけふはこひしき
うちにこれかれゆくに、かけまさの朝臣、ひわりこのはたに、かきてを
こせたり、

返し
はしひめによはのさむさもとふへきにさそはてすくるかり人やたれ

實方と藤
原爲相

返し
はしひめに袖かたしかはほともなしかりにとまらむ人にたくひて
殿上にて、ほとと、きすまつころ、

かきくもりなとかおとせぬほとと、きす
ためすけきして、
かまくらやまにみちやまとへる
ためすけ、かうふりうへきまへのとし、八月つきあかき夜、ものかたり

して、
かそふれはいまいつと、きになりけり

ためすけ、
むつきにならほとふ人もあらし

二條との、せ行のひ、つとものおほくみゆれは、ためすけ、
かのひつはなにそのひつそおほつかな

といへは、
かたひのまへのほかひなりけり

さねまさの朝臣、はりまへいくとて、かりきぬこふ、やるとて、
あまた、ひたちなれにけるから、もたむけのかみも心はつかし

ある人のつほねのまへに、あせはしきをかけてありけるをみて、すけ
た、かよみける、

むつましきなつのころもをぬきすて、いとされかたきあせはしきかな
返し

返し
いにしへのあまのてこらかおりぬのもさらせはさらぬものにやはあらぬ
くにより五月はかり、東宮にきこえさせける、

はるかなるみやまかくれのほとと、きすきく人なしにねをやなくらむ
〔實方朝臣集〕時明朝臣ほうしにならんするころ、女に、くしの箱とらす
ふたにあしてして、

實方ト時
明

實方トく
により

實方トす
けたい

實方トさ
れまさ

なれてける程な忘れそ玉くしけあけ暮そはぬおりはありとも
そのくしの箱を女院の物にてめしければ、たてまつりたるを御覽し
て、かへし賜はすとて、

忘るなと契りをきける玉くしけ我かたみとやけふはみるらん
御かへし

中々にをくかたなきは玉くしけみには餘れるかたみなりける

〔實方中將集〕

○建治本

宮内省圖書寮所藏

にわし(宮朝)のそう正東宮に御くた物ま

いらせ給へり、らしいのかへさにかきつく、

おもふことなりもやするとうちむきてそなたさまにそらいしたてまつる

返し

我ためにむらひしたまふことなくはおもふことろのならさらめやは

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

木寺の阿闍梨にをくる、

おほつかなよをそむきにしやまふしはいかゝみるらんあきの月をは

〔實方朝臣集〕

中宮の宰相君、七月七日に、○圖書寮本建治本實方中將集、七月七日、春宮のさとのきみに作

實方下木
寺ノ阿闍梨

實方下中
宮宰相君

七夕のをにぬく玉もわかことやよはにをきゐて心かすらん○建治

ヲ、ころもかす
らん=作ル、

〔實方中將集〕

○建治本

宮内省圖書寮所藏

中宮宰相きみ、うへにのみさふらふ

をきして、うらみて、

かせはやみあらしのやまのもみちはもまにはとまるものところきけ

中宮の兵衛に、ものいひ侍しに、いとくいり侍にしかは、つとめて、

久かたのあまのとなからみしつきのあかていりにしそらそこひしき

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

中宮のすけの君の、かくれいひかけたりけれ

は、すゑをそつかけたりける、

小男鹿のみふりたてゝきこしめせおもとをさせるつみはあらしな

〔實方中將集〕

○建治本

宮内省圖書寮所藏

めのとの、○圖書寮本實方朝臣集、中宮にめのとのたちの=作ル、

ゆみのふくろをとりいてゝ、くたものをとりいれて、をこせたりけれ

は、

をしはりてゆみのふくろとしるゝやおもはぬやまのものをいるらむ○外二略ス、

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

女院の御めのとこの少輔の内侍にもいふ

實方下中
宮ノ兵衛

實方下中
宮ノ亮の君

實方下中
宮ノ乳母

實方下東
三條院ノ
乳母子ノ

長徳四年十二月是月

人に、肥後守まさたか物いふときして、さそあるといへは、女はいみし
うあらかひしをしられてまかてたるに、せりのなかきをやる、
水ふかみみなかくせりとおもふにもまつあらはるゝねにこそありけれ

〔實方中將集〕

○建治本
○宮内省圖書寮所藏

女院の小侍従のきみに、

たへねとやいかにせよとそさゝかにのいとかくまてはおもはさりしを
小侍従の、またしのひけるに、けしきみたりける人の、いひちらしけれ
は、命婦のものとなる、たつやといふしもつかひして、

あたまのたつやをうきとさわくなりみしまのかみはいかゝこたへむ

おなし女にやるふみを、こまの命婦にみせて、さりなからなき事を、人
人いふときして、

こまにやはまつしらすへさまこもくさまことにおもふ人もこそあれ

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

小侍従にもいふ人の、かれくになりぬと

きして、

かつらきやひとことぬしをたのむかなくめちのは、しもたまあれやと
ちきりこしことのためかふそたのもしきつらきもかくやかはるとおもへは

春宮に、藏人いふ人に、

はことりのあけてののちはなけくともとくらなからのこゑをきかはや

〔實方中將集〕

○建治本
○宮内省圖書寮所藏

一品のみやの大はとこ^盤ろに、さくら

をもしろきを、ある人に、心よせてむすひつたり、

うゑてみる人のこゝろにくらふればをそくうつろふはなのいろかな

かへしむすひつたり、

かけにたにたちよりかたき花の色をなましかほにもくらへけるかな

又かへし

たちよらむ事やはかたきはるかすみならひのをかのはなゝらすとも

〔實方中將集〕

○横本
○宮内省圖書寮所藏

ひわとのゝ内きのしゝうといふ人

に、

おほつかなゆめちのをのゝたよりにもなをさりなりしよひのいなつま^{○建治}
をくのたよりにや^{○實方}作ル、
中將集、二句、三句ヲ、ゆめちの

かへし

やま人ののをのゝたよりとおもふともこりしもせしなみねのつまきに^{○建治}
本實方

長徳四年十二月是月

中將集、初句ヲ、山里のニ、五句ヲ、みれのつまきをニ作ル、

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

宣耀殿承○南葵文庫本のさい相のき

みなしをさしいてたれば、

かくれなき身とはまるくやまなしのおふのうらまておもひやるかな

宣耀殿のさい相のきみの、さらにいてたるに、ひとあるけしきなれば、

かへるとて、なかへはに、せりあらひける女して、

なかへはにすくたせりのねたき事あらはれてこそあるへかりけれ

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

なかへはの宰相の君に、はすのはにうつせみ

をつゝみて、やりたりければ、女、

いつれをかのとけきかたにたのまゝしはちすの露とうつせみのよと

返事

はちす葉にうかふたまこそたのまるれなにうつせみのよをなけくらん

せむえう殿に、中將の君といふ人さふらひしか、おやなくなりてあり

しころ、みつからはこそいみにこもりてあるをさして、中將の君のと

ひにをこせたる、

實方ト宣耀殿ノ宰相の君

實方ト宣耀殿ノ中將の君

實方ト女御城子

實方ト小一條家ノ侍女

實方ト辨の君

おやもこもふちのころもの身をつみてなみたのほとはおもひこそやれ

返事

ふちころもなみたのほとはくらふともこはたちまさるこゝちこそすれ

〔榮華物語〕

見はてぬゆめ

○上略、濟時ノ子女、大將の御をひの實方中將、

世のすきものにはつかしういひおもはれ給へる、その君をそこの女御お

ほかたのよろつものゝはへにもものし給、

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

右大將のもとに侍し女に、しのひて

ものいひ侍しを、はらみ侍にけるをかくし侍しかは、

つのかにのたれとふしやのふしかへりそのはらさへはたかくなりしそ

おなし大將の女御、内にさふらひしに、辨のきみといふ人に、月のあか

かりしよ、

よそにてもほしとそきみはおもふらんなおほそらの月によそへて

を、

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

辨君のあいしまつきみをこひてをくるうた、

をとさゝのなのみなりけりすゑのまつみやこのかたそなみはこしける

實方ト小
一條家ノ
女

長徳四年十二月是月

二九〇

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏

小一條にて、ある人のむすめを志の

ひて、かたらふに、女のおやき、つけて、いみしうはらたちて、むすめを、
あさましうつむなときくに、三月三日ゆふつかた、きたのかたのもち
ぬまいれとて、いたし給へるに、

みかのよのもちぬはくわしわつらはしきけはよとのには、こつむなり
をなしところの少將のをもと、五節のまひ、めして、返たるに、
かみまぬしをとめはいかてさかきはのかはらぬいろとしらせてしかな

そのひと、なかのたいの、あらはなるに、ぬあかして、あさほらけに、つ
まとを、しあけたるに、そらのけしきも、おかしうて、人のかたちも、お
かしう見へければ、

あまのとを我ためにとはさ、ねともあやしくあかぬこ、ちのみして
おなし人のさとなるに、いきたるに、なきよしをいひて、あはさりけれ
は、うちへまいりにけり、女また、つとめていひをこせたり、

あまのとをさしてこゝにとおもひせはあくまもまたすかへらましやは
かへし

實方ト小
一條家ノ
修理

實方ト小
一條家ノ
宮の内侍

實方ト小
一條衛門

あまのとをあくといふとをいみしまにとはかりまたぬつみはつみかは
おなし人、わるきこゝちやみて、くすしのいかにとかやしたるをき
て、

いかなれは我しめし野とおもへともはるのほらは人のやくらむ
小一條との、すり○南葵文庫本、にふみやり給へりける、返事をはせ
て、いなはのもりのといへるに、

むすふてふやま井の水もあるものをなにし、いなはのみねをかくらむ
おなしとのに、宮の内侍といふ人、おとこにかみきられたりときして、
よそにかくきえみきえすみあはゆきのふるのやしろの神をしそおもふ

おなしとところに、さふらひける人、せう香殿にまいりにけるに、みし人
とおほへた、ぬ事とも、いひたりければ、

わりなしや身はこゝのへにありなからとへとは人のうらむへしやは
小一條衛門に、

めのまへにたへせすみゆるつかさかなうきをむかしとおもふへきよに
をなし少將のもとにいきたるに、あはてかへしければ、

長徳四年十二月是月

二九一

いのちたにあらはたのまむあふことのいといきかたきこちこそすれ
小一條の衛門に、かれかたなるころ、あきまるといふうしかひをし
て、くるまのいきければ、をんなさとにて、

くも井にてなきわたるなるかりかねは秋こしみちやおもひいつらん
かへし

かへるかりいつちかゆかむすみなれしきみかとこよのくにならずして
三條の中將のきみに、五月五日、

みつとのみさはかぬ、まのしけきにもいつかとのみそなをまたれける

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏 七月七日にやる、中將君に、

かへさすはほともこそふれあふ事をたなはたにいかにかすへきけふの暮をは

返事

ひこ星のころもしらすうちとけてその逢事をうはの空になしはしかされそ

〔實方中將集〕

○建治本 宮内省圖書寮所藏 清涼殿 ○建治本他本、こうらう殿ニ、
御前のすゝきをむすひたるをたれならんといひて、ないしの命婦な○

實方ト内侍命婦

實方ト三條中將の君

實方ト中將君

實方ト宰相内侍

實方ト平内侍

實方ト馬内侍

い、しの命婦、建治本他本、いせの命婦のむすひつけさせける、
ふくかせのころもしらてはなすゝきそらにむすへる人やたれそも撰○新和歌
集、初句ヲ、秋かせのニ、五句ヲ、人はたれそもニ作ル、

殿上人々、かへしせむなど、さたむるほとに、まいりあひて、

風のまにたれむすひけむはなすゝきうはゝのつゆもころをくらし

宰相の内侍に、○横本、さい宮内侍ニ作ル、

たなはたにちきるそのよはとをくともふみゝきといへかさゝきのはし

返し

たゝちにはたれかふみゝむあまのかはうきゝにのれるよはかはるとも

平ないしに、ふみつかはし、返事もせさりしかは、

かさくらしふるあはゆきの袖ふかみけふくものあとの見えしとすらむ

へいないし返事もせさりしかは、おほやけ事につけて、人のもとに侍

しふみをとりに、もしをきりいて、つかはし、

いせをのやあまと我身はなりぬらんそてのうらなるなみたかそへは

〔馬内侍集〕

公任の君、こそその春やりたりし梅の花を、文にさしておこせた

れは、
むかしに似たる梅の花かな
といひたりしかは、

梅花昔のことをうたかへと空のけしきの變れるやなそ
さねかたの君えてきたり此の文ありけるを見て、
羨まし散くる跡や都鳥ならひありせは後れましやは

〔玉葉和歌集〕

戀歌五

小辨に物申侍ける比又こと人に、かたらふと聞て、

實方朝臣

ふたつある心を我ももたりけりうしと思ふにさても忘ぬ

〔實方中將集〕

建治本
宮内省圖書寮所藏

小辨、こと人にものいふときして、

うら風になひきにけりなさとあまのたくものけふりこゝろよはさは

實方
小
大
君

七月七日、ひきたるいとに、くものいかきたるをみて、
のあしたに、春宮
にてひんかしに、たちはきのをさのありしかたに、ひきたる糸に、くも
の葉をかきけに、はゆきよりにしかけ、
とかなむ、おとりたる糸に、くも
はせら作れ、
か

小大君

たなはたのもろてにいそくさゝかにのくものころもはかせやたつらむ

といふ、かへし、
り給ふめりしかは、立ちなから、
作れ、
語

ひこほしのくへきよひとやさゝかにのくものいかきもしるくみゆらむ

〔小大君集〕

扇の縫ひ物したるを持たせ給ひて、これ見よと仰せられて給

はせたるに、郭公の卵の花くひて、いくかたあり、たゝにやはとて、

垣ね出る便に移る卵花を惜むと聲は立てぬなるへし

これを實方に給はせたれば、

時鳥なくにし散らは卵花の垣ね乍らそ聞へかりける

實方の中將、人のかりやらむとて、ためたふの君に、かくいはむはいか

かといひける歌、

争てかは思ありとは知すへき室の八島の煙ならては

をかしなといひて、爲たふの君、わか懸想する人のかりやりてけり、女

も聞きてわらふ程に、わたりければ、女、

此の頃は室の八島も盗まれて

と云ひければ、

えこそはいはぬ思ひなからに

内に參るに、實方の中將、月こそいとあかけれとのたまひしかは、

雲の上に誘はさりせは、久方の身に添影も送らさらまし

實方の君親(定時)に後れて歎くと聞く頃、

底はふち淵は瀬ならぬ涙川袖の渡りは有しとそ思ふ

〔拾遺和歌集〕

十四 元輔(清原)かむこになりて、あしたに、

藤原實方朝臣

時のまも心はそらになる物をいかてすくし、むかしなるらん

〔實方中將集〕

建治本 宮内省圖書寮所藏

もとすけかむすめの中宮にさふら

ふを、おほかたにて、いとなつかしうかたらひて、人にはしらせす、たへ

ぬなかにてあるを、いかなるにか、ひさしうおとつれぬを、おほそうに

てもものなといふに、女さしよりて、わすれ給にけるよといふ、いらへは

せてたちける、すなはち、頃、清少納言集、宮のあはた殿に、おはします

とかのたまふに、さし寄りて、忘れ給ひにけりなと、いら、へもせて立ちにける、即ちいひおくり給へるニ作ル、

わすれすよまたわすれすよかはらやのしたくけふりしたむせひつゝ

返し

せい少納言

あしのやのしたくけふりつれなくてたへさりけるもなにしよりてそ

〔清少納言集〕

永仁本 宮内省圖書寮所藏

右大將殿のこなくなしたまへるか、

かへりたまふに、

ためより

神無月もみちはいつもかなしきをこゝるのもりはいかゝみるらん

かへし

さねかたのきみ

いつとなくしくれふりしくたもとはめつらしけなき神無月かな

こよひあはんといひて、さすかにははさりければ、

しらすはなみたか何そよることゐたるあひたの袖にこぼるゝ

うちなる人の、ひとめつゝみて、うちにてはといひければ、

さねかた

いつといるとあまつそらなる心ちして物おもはするあきの月かな

〔實方朝臣集〕

宮内省 圖書寮所藏

たいの御方の小納言(少)にきこえし、

おほ空のしくるゝたにもかなしきにいかになかめてふるしくれなみたかそも

〔實方中將集〕

建治本 宮内省圖書寮所藏

くにへくたるとてまかり申しに、女

實方少納言

實方侍従の典侍

實方清原元輔ノ婿トナル

實方少納言

院にまゐりたるに、ものかつくるまゝに、

侍従の典侍

みちのくにころものせきはたちぬれと

といひもはてぬに、

またあふさかはたのもしきかな

〔實方集〕

○南葵文 庫所藏 こせちのまひしめに、

おほつかないかにわれをかすへらきのとよのあかりをいつくともかな

〔實方朝臣集〕

(明子) 高松殿のうへに、聞えさせたまひけるに、さふらはせ給ひけるほとにや、

神ならぬみははちす葉のいける世にうきは獨とおもほゆる哉

さね明の君の女を、かれにければ女にいひやる、

わひつゝも此よはへなんわたり川淵瀬を誰に問はんとすらん

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏 みのゝかみのむすめなりしとき、ま

たかみゝるほとにて、返事なし、

おほつかなかゝらぬたひもなきものをたむけのかみのこゝろつくしに

實方ト五節ノ舞姫

實方ト明子

實方ト實明ノ女

實方ト美濃守ノ女

大原ニ小鷹狩ス

河尻ニ赴ク遊女トあら

桂ニ遊ブ

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏 みのゝかみのむすめに、あるおとこふみやり

けるに、おやのせいしければ、返事など、時々成ければ、

みつかさのかさのみたゆる玉章はみのゝをやまの神やいさむる

返事

をやまなる神もいさめすみつかさのみつからたゆるたまつさとしれ

〔實方中將集〕

○建治本省圖書寮所藏 三月はかり、おほはらに、こたかゝり

にいきたるに、道にさくらのおもしろきところにとまりて、またの日

(道綱) 權少將のもとに、

きゝすなくおほはらやまのさくら花かりにはあらてしはし見しかな

返し

みちつなのきみ

かりならてわれやゆかましおほはらのやまのさくらにとりもこそたて

かんたちめなとして、かはしりにいきたるに、權大納言ことあらとい

ふあそひよひて、うたなとうたはするに、ゆめおもふといふ題あるに、

ゆきやかてひもくれぬへしふねのうちにかきはなれぬる人をこふとて

〔小大君集〕

殿上人、桂より舟にて渡るに、星の影のみえければ、

水底にうつれる星の影見れば

さねかた

あまの戸わたる心ちこそすれ

〔實方朝臣集〕

○宮内省圖書寮所藏

うちとのに、殿上人もゆきて、ふねにのりて、し

きつといふ所に、舟とめてありけるに、

舟とめてこよひはかりはたひねせんしきつのそらに夢はさむとも

うちとのにて、水にうかひたるはしのうへにて、これかれうたゝねし

たるに、夜ふかうめさまして、實方中將、こゑをかくしてかくなむ、治本

實方中將集、うちにて、水にうきたるはしに、うたゝねし

たるに、よふかき月に、こゑおかしくて、信方中將、作ル、

うちかはの、まくらにゆめさめて、治本、實方中將集、二句、

といひもはてす、ねをひれたるこゑにて、ある人、集、治本、實方中將、

夜ははしひめはやねさるらん、治本、實方中將集、よるはし、

〔實方朝臣集〕

宇治にて、

はしひめのかたしく袖もかたしかて思はさりける物を社思へ

朝日山ヲ

〔實方中將集〕

○宮内省圖書寮所藏

あさひやまのふもとに、かみまつり

たるところ、

あさひやまふもとをかけてゆふたすきあけくれかみをいのるへきかな

秋、さくらゐのさといふところにて、もみちをみて、

秋風のふくにちりそふもみちはをはなとやおもふさくらゐのさと

はつせにまうて、おほつかなかりし事なといひて、女に、

いそのかみふるのせかはのみつたえていもにあはすてほとそへにける

きよみつにまうて、たまとのにかきつけし、

たきみれとけふりもたゝすみつしあれはいかなるおきに水つかるらむ

神無月に、いし山になかたうの中將とまいりて、かへるに、あさほらけ

に、みわたせば、そらもうみもきりあひて、心すこきに、ちとりのなき侍

しかは、

ふゆさむみたつかはきりもあるものをなく、きゐるちとりかなしな

〔實方中將集〕

○宮内省圖書寮所藏

いしやまにてあかつきに、ひくらし

のなくをさゝ給て、小一條の大將、くらしのこゑをきいて、大將殿、作

櫻井ノ里
観ル

泊瀬詣

清水詣

石山詣

あさほらけ日くらしのねそきこゆなるこやあけくれと人はいふらん ○圖書
方朝臣集、初句ヲ、ほの、とニ、四句、五句ヲ、
こやあけくれのをりに、は、あるらむニ作ル、

とのたまふをきして、○圖書察本實方朝臣集、それ、
なむまかみといふ人ニ作ル、

はをしけみとやまのかけやまかふらんあくるもしらぬひくらしのこゑ

〔實方朝臣集〕あまの川にて、

天の川かよふうきゝにことゝはんもみちの橋はちるやちらすや

かすかにて、

またわかぬかすかの里の姫小松いのる心は神そしるらん

〔實方中將集〕

○建治本
宮内省圖書寮所藏

てらめくりし侍し日衛門のかみに、

いそかなむちりもこそすれもみちするまさきのかつらおそくゝるとて

仁和寺のむめのはな、御らんして、殿上人などに、うたゝてまつらせ給

に、

ちらすまつはなの心もみえぬらしけふよりのちはふかはふけ風

ちきりてしことのかかふそたのもしきつらさもかくやかはるとおもへは

天の川ニ
到ル

春日ニテ
歌ヲ詠ム

寺巡リ

仁和寺ニ
詣ル

歌人

〔續本朝往生傳〕一條天皇者、○中時之得人也、於斯爲盛、略○中和歌則、道信、實

方、長能、輔親、式部、衛門、曾根好忠、○下

〔無名抄〕

一條院の御時、みちゝさかりたる事を、（臣）江帥しるしたる中にも、

歌よみは、道信、實方、長能、輔親、式部、衛門、曾禰好忠と、この七人をこそ、しるさ

れて侍れ、○上略

〔和歌色葉集〕

上 六名譽歌仙者 俗百六十人

（拾後詞）

右近中將藤原實方 侍從定時息、小一條左大臣孫、母左大臣雅信女、

〔二中歴〕

十二 倭歌 歴 歌人 公卿 藤原實方中將

〔拾芥抄〕

上末 和歌家部第二十九 又歌人三十六人 藤原實方 左大臣師尹孫、

四位上、左中將、

〔勅撰作者部類〕

自帝王至 實方 四位左中將、侍從、藤原定、 拾遺集 夏、二、戀

二、戀、四、三、雜 後拾遺集 哀、三、戀、一、戀、二、雜、二、 詞花集 戀上、一、戀、

春、一、哀、四、戀、 千載集 別、四、戀、三、戀、 新古今集 哀、一、別、六、戀、 新勅撰集

夏、二、賀、一、戀 續後撰集 戀三、二、 續古今集 戀四、一、雜上、二、戀、 續拾遺集 戀四、 玉葉

三、二、雜上、二、戀 續千載集 戀一、二、 續後拾遺集 別、二、 新千載集 別、二、戀

長徳四年十二月是月

名譽歌仙

中古三十
一六歌仙ノ
一人

歌什

長徳四年十二月是月

三〇四

新拾遺集

春下、一、戀四、
雜下、一、講、

新後拾遺集

春下、

新續古今集

春下、

〔萬代和歌集作者部類〕

實方朝臣

春下、一、

秋上、三、

秋下、二、

冬、一、
神、

一、戀一、二、

戀二、一、

戀四、五、

戀五、一、

雜一、三、

〔源道濟集〕

ある人のもとから、實方君の集をおこせたりけるに、かへすとて、かさつく、

なき世にはかたみなりけるたまつさを昔はさしもおもはさりけん

〔實方中將集〕

建治本
〇宮内省圖書寮所藏

〔書入〕
建長元年己酉三月、以法性寺少將雅平本、詔人書寫了、

〔建治〕

建治元年五月廿二日書寫畢、

同廿三日校合了、

素寂

實方ノ墓

〔今鏡〕

十島のうちき、

實方中將の御墓は、みちのおくにそ侍なると傳へき、侍しまことにや、藏人頭にもなり給はて、みちのおくの守になり給て、かくれ給ひにしかは、この世までも、殿上のつきめのたいはんすへたる

死後雀ト
ナリテ殿
上ニ來ル
トノ説

僧西行實
方ノ墓ヲ
甲フ

〔山家集〕

下

みちの國にまかりたりけるに、野中に常よりもと覺しき塚

の見えるを、人にとひければ、中將の御はかと申すはこれかことなりと申しければ、中將とは誰か事そと、又問ひければ、實方の御事なりと申しける、いと悲しかりけり、さらぬたに物哀におほえけるに、霜枯の薄、ほのく見え渡りて後に、

朽もせぬ其名計を留めおきて、枯野の薄形見にそみる

〔新古今和歌集〕

八哀傷歌

みちのくにへまかりける野中に、めにたつさまなるつかの侍けるを、とせ侍ければ、これなん中將のはかと申と、こたへければ、中將とはいつれの人そととひ侍ければ、實方朝臣の事となん申けるに、冬の事にて、霜かれのすきほのくみえわたりて、おりふしものかなしくおほへ侍ければよめる、

西行法師〇歌略ス、山家集ニ同ジ、

長徳四年十二月是月

三〇五